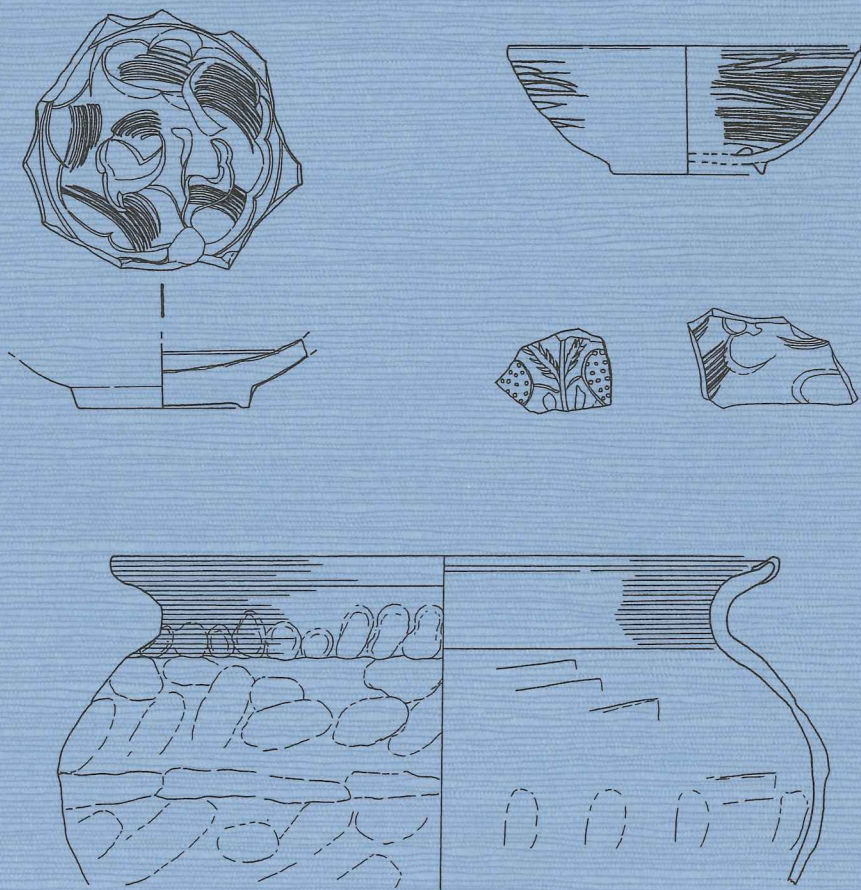


中島遺跡・浅羽大囲堤

静岡県磐田郡浅羽町
中島遺跡・浅羽大囲堤発掘調査報告書

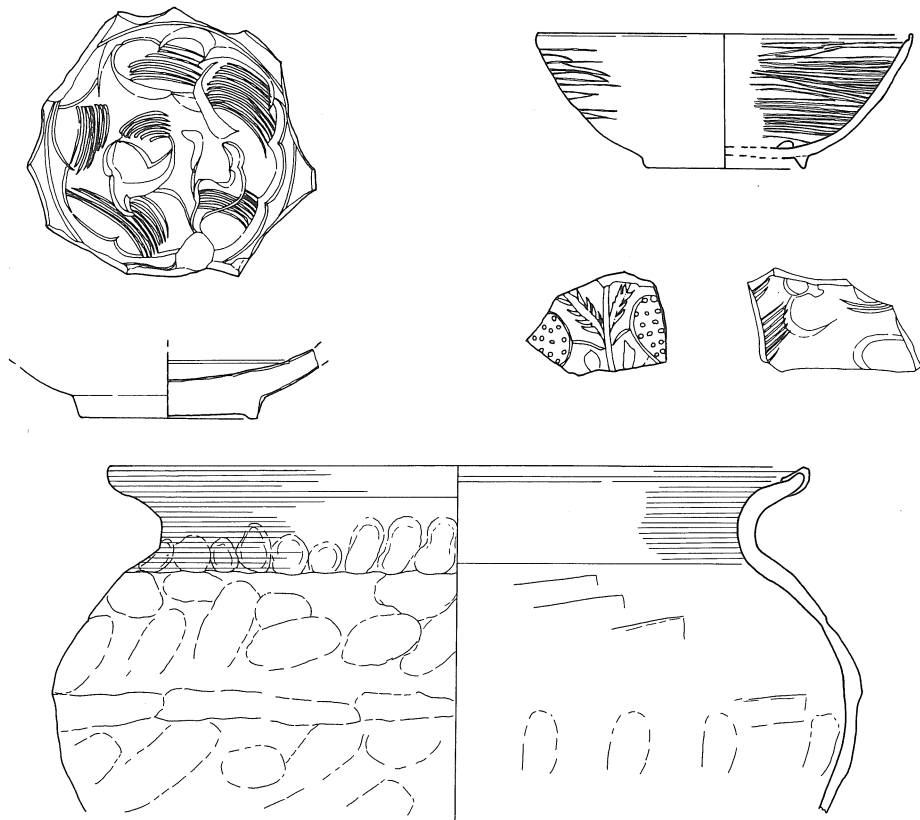


2000

浅羽町教育委員会

中島遺跡・浅羽大冢堤

静岡県磐田郡浅羽町
中島遺跡・浅羽大冢堤発掘調査報告書



2000

浅羽町教育委員会

例 言

- 1 本書は静岡県磐田郡浅羽町長溝に所在する、中島遺跡・浅羽大囲堤発掘調査の報告書である。
- 2 調査は原野谷川河川改修工事に伴う事前調査として、袋井土木事務所の委託を受け、浅羽町教育委員会が調査主体となって実施した。
- 3 調査は稗原道遺跡・長溝十二所遺跡の試掘確認調査を1995年度に、浅羽大囲堤の発掘調査、中島遺跡の試掘確認調査を1996年度に、中島遺跡の発掘調査を1997年度に実施した。
- 4 調査期間は稗原道遺跡・長溝十二所遺跡の試掘確認調査が1995年11月16日～96年2月1日、浅羽大囲堤の発掘調査が1996年8月23日～10月17日、中島遺跡の試掘確認調査が1996年12月9日～97年2月7日、中島遺跡の本調査が1997年10月20日～1998年4月22日（但し4月1日以降は町単独事業）、報告書作成が1999年9月13日～2000年3月15日である。
- 5 1995～97年度の調査体制は次のとおりである。

調査主体者 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会 教育長 岡本幸夫(95～96年度)、廣岡秀雄(97年度)

調査担当者 浅羽町教育委員会社会教育課 主査 山本義孝、嘱託員 木曾昌司

事務局 浅羽町教育委員会社会教育課 課長 村松修、係長 鈴木保裕、主査 山本義孝
(文化財担当)

調査作業員 荒井友彦、阿部豊平、安間好美、石川信夫、石部花子、大石テル子、大石勝、
大隅好雄、大隅エミコ、岡本春子、加藤みよ、金原藤江茂、澤田しな子、武田光子、
鈴木仁美、鈴木はる子、戸塚寛、袴田文子、早川トミ、増田芳子、安井力、
松野朝子
- 6 1999年度の報告書作成業務の体制は次のとおりである。

主 体 者 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会 教育長 廣岡秀雄

担 当 者 浅羽町教育委員会社会教育課 主任 山本義孝、嘱託員 木曾昌司

事務局 浅羽町教育委員会社会教育課 課長 松川幸雄、係長 鈴木利征、主任 山本義孝、
(文化財担当)

整理作業員 加藤順子、加藤みよ、鈴木仁美、鈴木涼子、水野由美子
- 7 本書の執筆、編集は山本が行ったが、第四章三節遺物の舶載陶磁器の執筆・観察表作成、挿図の作成は鎌倉考古学研究所 原廣志氏に依頼した。その他の遺物は木曾昌司が執筆した。
- 8 遺物のうち、伊勢型鍋、土師器は全点、常滑、山茶碗、小皿の一部は菊川町教育委員会 塚本和弘氏の作成した実測図を使用させて頂いた。瓦器埴は原廣志氏の作成した実測図を使用させて頂いた。
- 9 基準杭設定、空撮は㈱フジヤマに委託して実施した。
- 10 本書に用いた水準は海拔、方位は座標北である。
- 11 本書に用いた土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帖』に基づいた。
- 12 調査によって出土した遺物、調査に関わる諸記録は浅羽町教育委員会が保管している。
- 13 報告書の作成にあたり小野正敏、佐藤達雄、佐野五十三、塚本和弘、西尾太加二、原廣志、藤澤良祐、松井一明の諸氏から助言及び協力を得た。

中 島 遺 跡 ・ 浅 羽 大 囲 堤

目 次

例 言

第1章 調査に至る経緯と環境	1
1 調査に至る経緯	1
2 環 境	3
第2章 試掘・確認調査	7
1 調査経過と方法	7
2 調査成果	9
第3章 浅羽大囲堤（稗原道遺跡）の調査	11
1 調査経過と方法	11
2 調査成果	11
3 総 括	16
第4章 中島遺跡の調査	17
1 調査経過と方法	17
2 調査成果	17
3 遺 物	32
4 総 括	62

図 版 目 次

1	1. 同安窯系碗・龍泉窯系碗（内面）	2. 同安窯系碗・龍泉窯系碗（外面）
2	1. 龍泉窯系碗・皿（内面）	2. 龍泉窯系碗・皿（外面）
3	1. 白磁（内面）	2. 白磁（外面）
4	1. 白磁・青白磁（内面）	2. 白磁・青白磁（外面）
5	原野谷川・蟹田川合流地点と浅羽大囲堤（背後は袋井市街）	
6	試掘・確認調査トレンチ土層断面	
7	浅羽大囲堤全景	
8	1. 浅羽大囲堤全景（調査前）	2. 大囲堤土層断面 1
9	1. 大囲堤A区東側調査状況	2. 大囲堤A区縦断面
10	1. 大囲堤土層断面 6	2. 大囲堤土層断面 5
11	上空からの中島遺跡（手前は原野谷川、背後は太田川、後ろの森は鎌田神明宮）	
12	上空からの中島遺跡（遺構検出面）	
13	1. 遺物包含層からの遺物出土状況	2. 遺構検出面
14	1. 南壁土層断面	2. 中央部土層断面
15	溝2 遺物出土状況（北から）	
16	1. 溝2 ホ区最終面	2. 溝2 二・ホ区土層断面

17	1. 溝4全景（西から）	2. 溝4土層断面
18	1. 住居1調査状況（西から）	2. 住居1と周辺状況（洪水後の再調査）
19	1. 住居2遺物出土状況	2. 東西方向東側断面
	3. 東西方向断面（炭焼土部分）	4. 東西方向西側断面
20	1. 柱穴1	2. 柱穴2
	3. 柱穴7・8	4. 柱穴10
	5. 柱穴11	6. 柱穴23
	7. 柱穴48	8. 中央断面に掛かった柱穴
21	7. 柱穴49	2. 住居1 伊勢型鍋出土状況
	3. 住居2 柱穴5土層断面	4. 住居2 柱穴5
	5. 祭祀土坑	6. 土坑1
	7. 土坑3	8. 土坑4
22	中島遺跡出土遺物1（墨書土器）	23 中島遺跡出土遺物2（墨書土器）
24	中島遺跡出土遺物3（墨書土器）	25 中島遺跡出土遺物4（墨書土器）
26	中島遺跡出土遺物5（山茶碗）	27 中島遺跡出土遺物6（山茶碗）
28	中島遺跡出土遺物7（小皿）	29 中島遺跡出土遺物8（瓦器碗）
30	中島遺跡出土遺物9（土師器類）	31 中島遺跡出土遺物10（伊勢型鍋）
32	中島遺跡出土遺物11（常滑）	33 中島遺跡出土遺物12（渥美）
34	中島遺跡出土遺物13（砥石・古銭）	

挿 図 目 次

図1	中島遺跡の位置	1
図2	原野谷川・太田川を中心とする低地の主要遺跡（古代・中世）	2
図3	貞享三(1686)年の絵図をもとにした近世前期の浅羽低地	4
図4	調査地点配置図	6
図5	稗原道遺跡・中島遺跡柱状図	8
図6	浅羽大囲堤測量図	10
図7	浅羽大囲堤A区	12
図8	浅羽大囲堤B区の土層断面	13
図9	浅羽大囲堤C～E区の土層断面	14
図10	浅羽大囲堤出土遺物	15
図11	浅羽大囲堤地籍図	15
図12	二瀬橋周辺の明治初期の浅羽大囲堤	16
図13	中島遺跡全体図	18
図14	中島遺跡包含層区分・挿図位置図	19
図15	中島遺跡土層断面図	20
図16	溝1主要遺物出土状態（イ・ロ区）	22
図17	溝1主要遺物出土状態（ロ区）	23
図18	溝2主要遺物出土状態（イ・ロ区）	24

図19	溝2 主要遺物出土状態 (ハ区).....	25
図20	溝2 主要遺物出土状態 (ニ・ホ区).....	26
図21	住居1・3 実測図	27
図22	住居2 実測図	28
図23	主要土坑集成図	29
図24	調査区南柱穴密集地区実測図	30
図25	中島遺跡出土遺物1 (舶載陶磁器).....	31
図26	中島遺跡出土遺物2 (舶載陶磁器).....	32
図27	碗・皿主型式参考図	35
図28	中島遺跡出土遺物3 (墨書土器).....	44
図29	中島遺跡出土遺物4 (墨書土器).....	45
図30	中島遺跡出土遺物5 (墨書土器).....	46
図31	中島遺跡出土遺物6 (山茶碗).....	47
図32	中島遺跡出土遺物7 (山茶碗).....	48
図33	中島遺跡出土遺物8 (山茶碗).....	49
図34	中島遺跡出土遺物9 (小碗・小皿).....	50
図35	中島遺跡出土遺物10 (小皿・瓦器碗・かわらけ).....	51
図36	中島遺跡出土遺物11 (かわらけ・小型鍋・伊勢型鍋).....	52
図37	中島遺跡出土遺物12 (伊勢型鍋・常滑).....	53
図38	中島遺跡出土遺物13 (常滑).....	54
図39	中島遺跡出土遺物14 (渥美).....	55
図40	中島遺跡出土遺物12 (砥石・古銭).....	56
図41	中島遺跡遺構変遷図	62

第1章 調査に至る経緯と環境

1 調査に至る経緯

1993年春頃、地元の小学生が原野谷川の河原で遊んでいたところ、古そうな焼き物が見つかるので見て欲しいという相談が教育委員会にあった。全部で10点程であったが、その内容は古墳時代頃の土師器、中世の山茶碗であり、この時期に該当する遺跡が河川敷内に所在することがわかった。

そこは原野谷川と蟹田川の合流点から少し下った左岸にあたり、蟹田川が形成した自然堤防上に集落が形成されていたものと判断された。

これを受けて、当時年度末に毎年実施していた管内の埋蔵文化財包蔵地の追加・変更箇所として静岡県教育委員会文化課に、右岸を長溝十二所遺跡、左岸を稗原道遺跡と命名し新発見遺跡として報告した。現在の原野谷川の流路は近世初期に本来別の川であった太田川・原野谷川を合流させて人工的に造り出したものであり、この時に蟹田川が形成した自然堤防上をぶち抜いて流路が付けられたことから、両遺跡は本来同一のものである可能性が高いが、現在の地形に従い二遺跡とした。

この当時、原野谷川は下流から河川改修工事が進められており、新たに登録された遺跡が工事に対してどのような影響が有るのが課題となり、袋井土木事務所からの照会を受けたのを契機に、1994年11月18日付けで遺跡の所在と内容報告を文書で回答し協議を始めた。

この結果、袋井土木事務所が計画している工事に伴い両遺跡が消滅する可能性が高いと判断されたので、試掘確認調査が必要となり、1995年9月10日付けの文書で「試掘・確認調査の依頼」を受け、更に10月27日付の契約書を袋井土木事務所長と浅羽町長との間で締結し、実務を教育委員会が担当して、左岸から試掘確認調査を始めた。

調査の結果、各トレンチからは小片となった遺物を含む包含層が発見されたが明確な遺構は無く、これに代わって、町内からは既に消滅したと考えられていた近世初頭の浅羽大囲堤約50m分が残っていることが確認され、1996年度の調査対象地点となった。

1996年度には残った右岸の試掘確認調査も行い、最後に設定したトレンチで中世の集落、中島遺跡を発見し97年度に発掘調査を実施することとなった。各遺跡の調査経過と方法は次章以下で記述する。

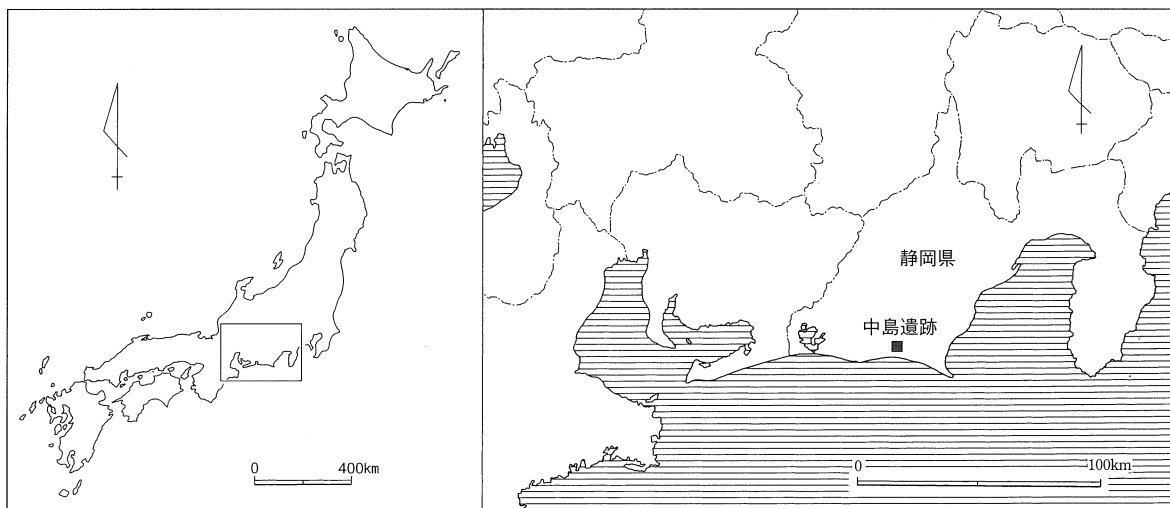


図1 中島遺跡の位置

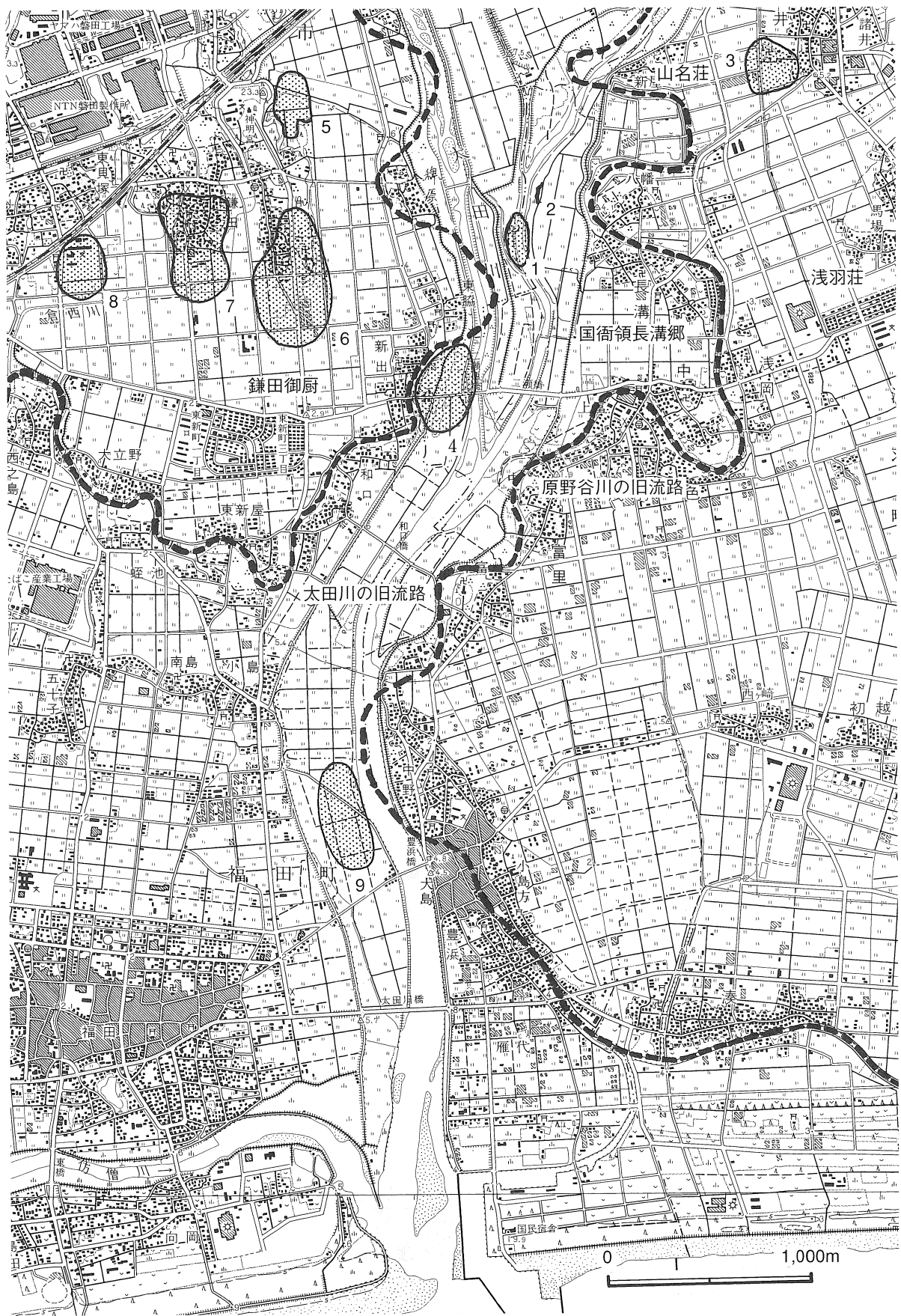


図2 原野谷川・太田川を中心とする低地の主要遺跡（古代・中世）

2 環 境

地理的環境 中島遺跡・浅羽大囲堤が所在する磐田郡浅羽町は静岡県西部（旧遠江国）に属しており、県内で最も広い遠州海岸平野の東端に位置し、町域の八割近くまでを沖積低地が占めている。

町域の南側は遠州灘に面して砂堤が広がり、東側は海拔 264 m の小笠山多門天神社付近を最高所とする小笠山丘陵と接している。北側と西側は掛川市八高山付近より発した原野谷川によって概ね区切られ、平面的には三角形状を呈している。

町域の多くを占める仮称浅羽低地は、大規模な排水工事が実施されるまでは排水不良地として地域住民を悩まし続けた。低地の地質の多くは粘土・炭混じりの粘土・泥炭からなっている。これは、縄文前期に始まる海進（5,000～6,000年前）によって太田川・原野谷川の下流域に海水が流れ込み、入江を形成したことから始まる。その後、海退現象に伴って入江の出口が砂州により塞がれて潟となり、砂州の背後は河川の堆積物によって徐々に埋められ後背湿地を形成する。

低地の形成が進むと、太田川・原野谷川の流れは自然堤防を形成するようになる。自然堤防は、後背湿地との比高差が1～2 m と僅かなものだが、起伏の乏しい沖積低地にあっては限られた高乾地であり、多くの遺跡がこの部分に集中している。中島遺跡が位置する微高地は、原野谷川に合流する蟹田川の自然堤防に相当し、他の浅羽低地の遺跡と同じような立地条件となっている。

中島遺跡・浅羽大囲堤が位置する浅羽町長溝の地は浅羽町の西端にあたり、太田川を挟んで磐田市と接している。この太田川・原野谷川の両河川は現在でこそ遺跡から南へ1 km の地点で合流し、一本の川筋となって遠州灘に注いでいるが、これは、近世初頭に合流工事が行われてから後の姿で、それ以前は別々の川であった（この川筋は図2に破線で示した）。

歴史的環境 中島遺跡は12世紀後半を中心とする平安時代末～鎌倉時代前半という限られた期間の遺跡である。この当時、遺跡の所在する長溝の地は東側を諸井川と呼ばれた原野谷川の川筋が蛇行して南北方向に流れ、西側は太田川が同じく蛇行して西南方向に流れており、これら両河川に挟まれた細長い土地を形成しており、国衙領長溝郷と呼ばれていた。

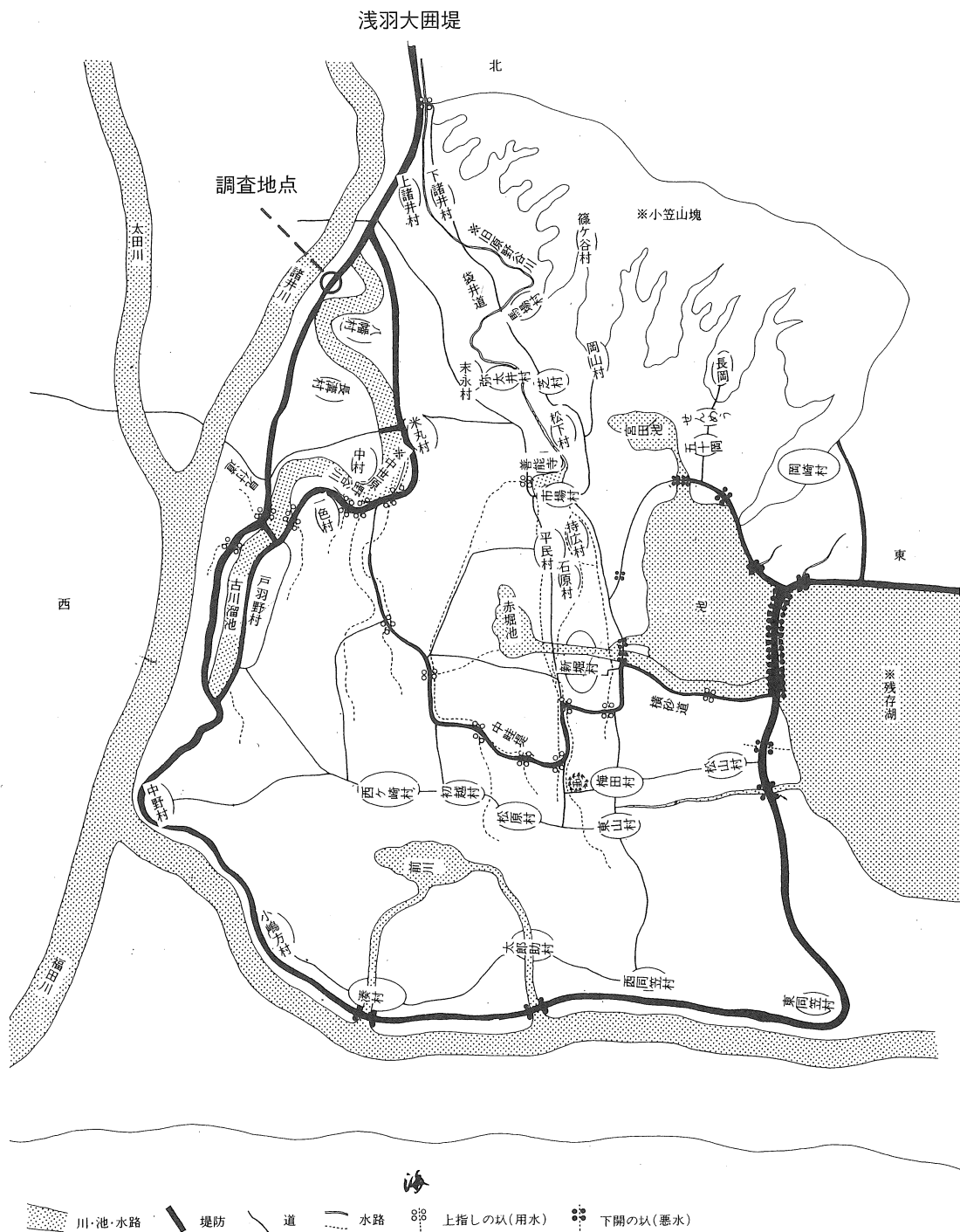
一般に国衙領の関係史料は、荘園領主のように個別の權益を守ろうとするものでなかったため残りにくく、支配の実態がつかみにくい。長溝郷も例外では無く、詳細については全く不明である。

ただ、遠江国では南北朝期に国衙領を列記した文書（「西園寺実俊施行状」『熊野速玉神社文書』貞治元(1362)年）が残され、その中に長溝郷が見られる。これは文和三(1354)年に後光厳天皇が、火災に遭った熊野新宮本殿復興のために安房・遠江両国を造営料所として寄進したが、遠江国は当時南北朝内乱の主要な舞台となっており、熊野山新宮の国衙領支配は容易には進まず、貞治元年十月に改めて後光厳天皇綸旨が出され、これを受けて西園寺実俊から幕府に善処を訴えた文書である。

そこに書き上げられた遠江国衙領の分布の特徴は、主として太田川・原野谷川流域や菊川流域という中遠地方の河川域に集中していることである。太田川に面する長溝郷はまさにこの立地条件に適った土地であるといえよう。

諸井川（原野谷川）の東は摂関家領（殿下渡領）で勸学院領浅羽荘が広がっている。具体的な立荘時期は不明だが、遅くとも平安時代末には成立していたと考えられている。

勸学院は藤原氏の子弟を教育する大学であると同時に、氏寺の興福寺、氏神の春日大社の事務も掌る家政機関で、暦応五(1342)年正月の摂関家の荘園伝領目録には田一六九町三反六〇歩と記されており、広大な荘域を有していたことが分かる。しかも諸国に散在する勸学院領の中では最大規模の荘園であった。



柴田稔氏作成原図をもとに作成

図3 貞享三（1686）年の絵図をもとにした近世前期の浅羽低地

太田川の西は伊勢神宮の鎌田御厨領である。この所領は遠江国に成立した御厨の中でも初期に属するもので、延長年中(923~31)より禰宜の度会氏が豊受大神宮領として相伝してきたという。

その範囲は『遠江国風土記伝』によると「西は今の浦の流れ以東、三箇野川、諸井川を限り、北は原野、南は中嶋の海辺なり」とあって、現在の磐田市東南部から福田町の中島にかけての地域に相当し、惣鎮守として鎌田の地に鎌田神明宮が鎮座している。

鎌田御厨に関する遺跡として、鎌田・鍛影遺跡、長江崎遺跡、野際遺跡が知られている。これ以前の遺跡として奈良時代の郡衙の可能性が考えられる犬間遺跡は、鎌田神明宮の所在する丘陵直下に隣接する遺跡である。鎌田・鍛影遺跡からは「草寺」と記された墨書土器や軒瓦が発見されており、郡司クラスの氏寺が存在する可能性が指摘されている。

浅羽大囲堤（あさばおおがこいつつみ）は、浅羽低地に散在する三十三ヵ村を水害から防ぐために設けられた総延長13kmの水除堤である。図3は貞享三(1686)年に描かれた絵図を基にして作成された近世前期の浅羽低地の様子で、諸井川（原野谷川）と太田川が一つに合流され、これに並行して水除堤が南へと延びている。

この工事は慶長九(1604)年、幕府の代官頭として遠江支配に関わっていた伊奈忠次があたったとされる。それは彼の持つ高い技術力と強大な幕府権力が結び付いたことにより始めて成された一大事業であった。宝暦十一(1761)年に成立した「長溝村開発由緒書」によると、慶長以前は原野谷川は長溝村の東側を流れていたが川筋が悪く、川が増水した時にはたびたび堤を押し切られ、浅羽輪中に水が入っていたという。

これを解決するため慶長年中に伊奈備前守の見立てで新たに川を築き留め、長溝村の西側に川筋を通し（現在の河道）、それに合わせて大囲堤も長溝村の西側に築き変え、浅羽輪中に水が入らないようにした。この工事により長溝村は原野谷川の東に位置し、浅羽輪中の中に入る事となった。

太田川についても、稗原村・和口村の東に川筋を移して御厨地域へ水が入らないようにしたという。本報告の堤はこのようにして成立し、度重なる改修をへて近代まで続いた。

〔参考文献〕

- 安藤 寛 1992「第5節第1章 歴史時代」『磐田市史 史料編1 考古・古代・中世』磐田市
加藤芳郎 1993「序説 自然環境の変遷」『磐田市史 通史編上巻 原始・古代・中世』磐田市
本多隆成 2000「第三編第1章 鎌倉・室町期の浅羽」『浅羽町史 通史編』浅羽町
松本稔章 2000「第四編第3章 浅羽大囲堤と浅羽一万石」『浅羽町史 通史編』浅羽町

〔原野谷川・太田川を中心とする主要遺跡一覧〕（番号は図2に対応）

1. 中島遺跡（本報告の遺跡、12世紀後半～13世紀前半）
2. 浅羽大囲堤（本報告の遺跡、近世初頭に築堤、この部分に50mだけ残る）
3. 十二所遺跡（弥生時代～近世の複合遺跡、特に13世紀代に成立した館を中心とする拠点集落）
4. 西向遺跡（古墳時代前期、平安末、戦国期の集落遺跡）
5. 犬間遺跡（磐田市・奈良時代後半を主とする、官衙性格の遺跡）
6. 鎌田・鍛影遺跡（磐田市・奈良、平安時代、鎌倉時代を主とする、国分寺に先行する寺院が存在）
7. 長江崎遺跡（磐田市・中世を主体とする掘立柱建物群）
8. 野際遺跡（磐田市・方向性を持ち、庇を想定できる奈良時代の掘立柱建物、平安時代末～鎌倉時代の柱穴を多数検出）
9. 元島遺跡（福田町・戦国期を中心とする集落遺跡）

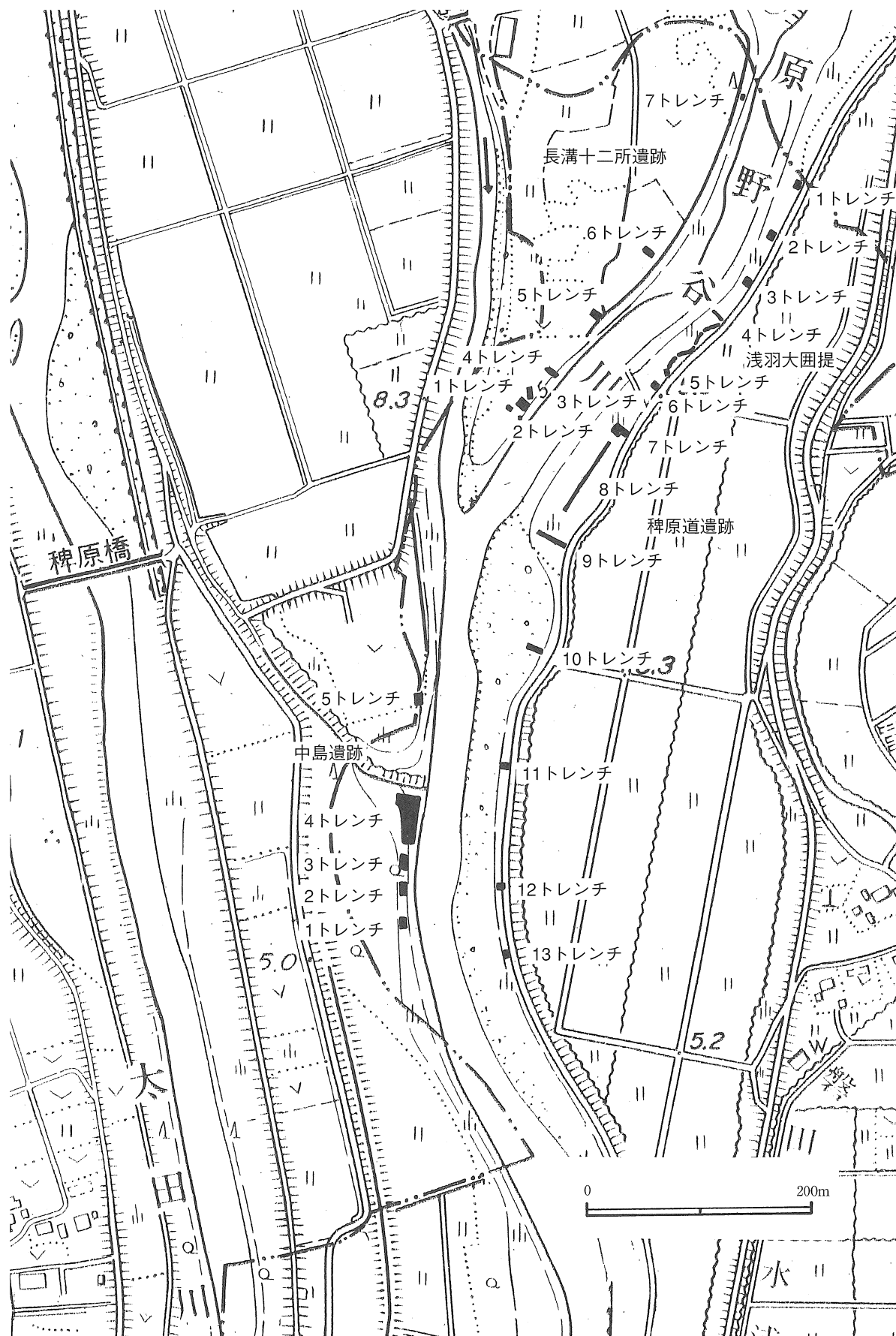


図4 調査地点配置図

第2章 試掘・確認調査

1 調査経過と方法

試掘確認調査は原野谷川左岸の稗原道遺跡と命名した遺物散布地から着手した。調査は1995年10月30日に開始した。対象範囲が広範囲に及ぶので、できる限りトレンチの数を多く設定することに務めた。しかし、現地は女竹が隙間もないほどに密集し、見通しも利かず作業は困難を極めた。

伐採作業を済ませないと掘削が始められないので最初に伐採を実施したが、後の処理のことを考慮して人力による伐採を行い、それを束ねて片付ける作業が全体作業量の7割近くを占めた。

伐採が済んだ地点から順次、0.7m³のバックホーを用いて掘削を進めた。掘削にあたってはできる限り確実性を増すことと、安全性の確保のために最初は広範囲に掘り下げ、その中を範囲を狭めて深く掘り下げる（段々掘り）という方法を用いた。

掘削の深さは、似た条件にある太田川の西向遺跡で遺構、遺物が確認された黒色粘土（遺物包含層に相当）、灰白色粘土及び青灰色粘土（河川が形成した自然堤防に相当）が出るまでを目安として行った。

1995年度は左岸に位置する稗原道遺跡の対象範囲全てを年内に終了、1月に右岸の蟹田川合流地点より北に位置する長溝十二所遺跡と命名した遺物散布地に移動し、対象地域全ての試掘確認調査を済ませ撤収した。

この時点で袋井土木事務所、静岡県教育委員会文化課と浅羽町教育委員会の三者で協議を行い、次年度は試掘確認調査で発見した浅羽大囲堤の残存部分約50m分の発掘調査と、試掘確認調査を実施していない蟹田川合流地点より南側の調査を行うことで合意した。

1996年度は浅羽大囲堤の調査が終了した段階で右岸に移動、南側から順次トレンチを設定して調査を行った。全て太田川の礫層が厚く覆って遺跡の存在が確認できなかったが、最後に設定した4トレンチから山茶碗を始めとする多量の遺物が発見され、土層観察によって中世の遺跡が存在することが明らかとなった。

この時点で、文化課に連絡し1月31日に現地において袋井土木事務所、静岡県教育委員会文化課と浅羽町教育委員会の三者で緊急の協議を行い、遺跡の範囲を確定するために北側にもう一ヵ所新たなトレンチを設定することを決め、磐田市域ではあるが5トレンチの追加調査を行った。この結果、遺跡はここまで延びておらず、太田川右岸の字中島の範囲の中に収まることが推定された。この新発見の遺跡は小字名を取って中島遺跡と命名した。

試掘確認調査の記録は土層断面の写真撮影・20分の1スケールによる土層断面図の作成によって対応した。稗原道遺跡、中島遺跡の土層観察にあたって、静岡大学名誉教授加藤芳郎氏の現地指導を頂いた。

それぞれの遺跡に対する試掘調査の期間は次のとおりである。

稗原道遺跡	1995年10月30日～12月22日
長溝十二所遺跡	1996年1月8日～3月15日
中島遺跡	1996年12月9日～1997年2月7日

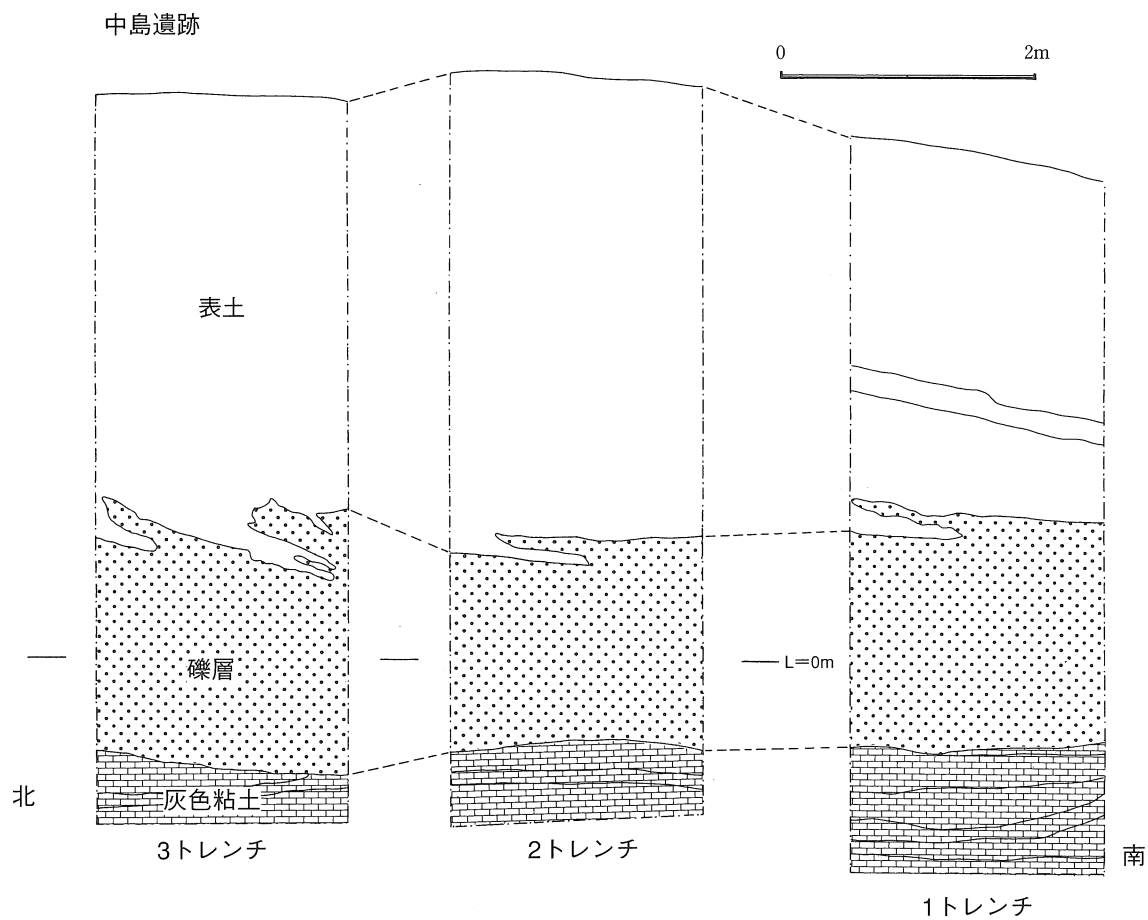
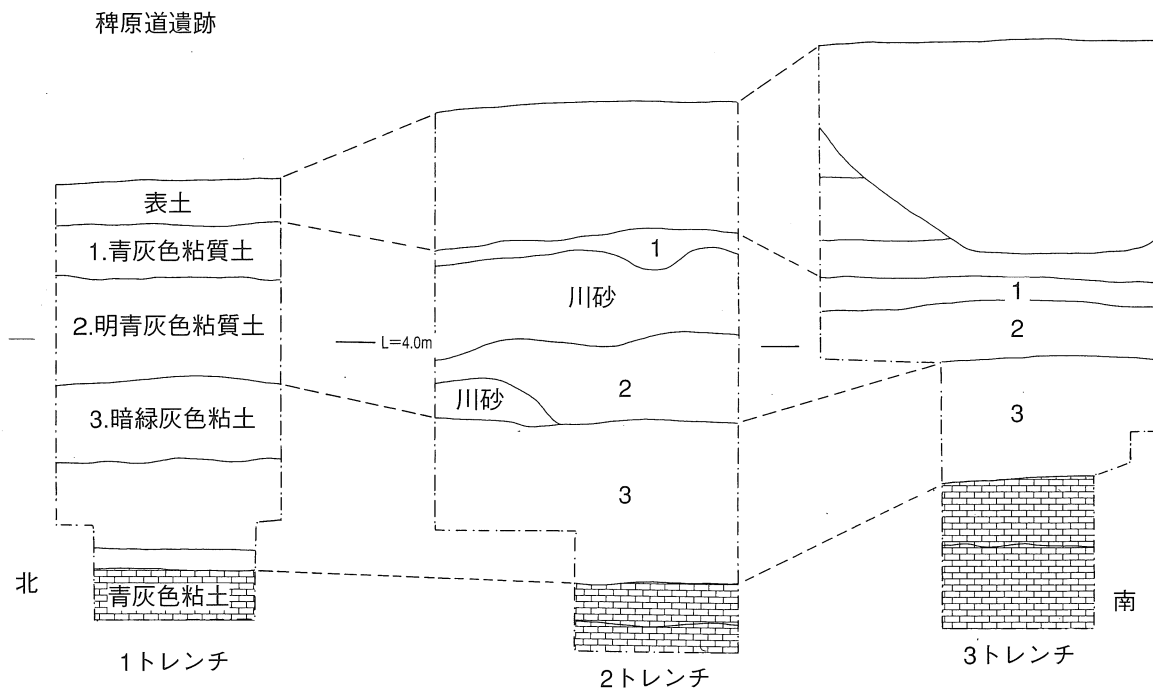


図5 稗原道遺跡・中島遺跡柱状図

2 調査成果

稗原道遺跡 稗原道遺跡では最終的に13ヵ所のトレンチを設定した(図4)。その結果9～11トレンチは旧河道内と判明。古墳時代と考えられる土師器片や山茶碗片(細片のため実測不可能)を含む黒色粘土や、恐らく太田川・原野谷川の河川合流工事が行われる直前の戦国時代と推定される水田状の痕跡が1～8トレンチで発見されたが、後の攪乱及び河川の氾濫によって遺存状況が悪く、散漫であった。

このようなトレンチのうち、1～3トレンチの三ヵ所の土層断面図(図5上)と2・3トレンチの写真(図版6)を示した。

蟹田川が形成した自然堤防と考えられる青灰色粘土の層は1・2トレンチでは標高2.3m前後、3トレンチでは上昇し、標高3m程となっている。3ヵ所の土層断面間の距離は約100mである。いずれのトレンチも、遺物はこの上面の土層から出土している。

この遺跡の調査で特筆されるのは4トレンチと5トレンチの間約50mの範囲に旧堤防を発見したことである。竹が密集した段階では全く気付かなかったが、両トレンチを設定するための伐採によって、この範囲にだけ堤防が残されていたことを確認した。

ちょうど、5トレンチに隣接する部分に堤防の断面が見えていたので断面を削り、土層観察を行った。この断面からは遺物が出土しなかったが、重機を用いた築堤とは考えられなかったので、浅羽大囲堤ではないかと推定するに至った。

長溝十二所遺跡 長溝十二所遺跡では最終的に7ヵ所のトレンチを設定した(図4)。その結果、北端の7トレンチ(地表下約5mまで掘削)で自然堤防に相当する青灰色粘土層を確認し、断面に溝状遺構が掛かったが地盤が悪く、壁面の崩落を生じかねないので直ぐに埋め戻した。この地点周辺は遺構の存在が有力視されるが、河川改修の範囲からは外れるので、調査対象外となった。

4トレンチからは木片や土器片が発見されたが、摩滅が激しく、しかもこの地点はちょうど、河川の氾濫原に相当するものと考えられた。恐らく近世の旧原野谷川の氾濫原ではないだろうか。

中島遺跡 中島遺跡では最終的に5ヵ所のトレンチを設定した(図4)。このうち、1～3トレンチの三ヵ所の土層断面図(図5下)と4トレンチの土層断面図(図15左、但しこれは中島遺跡の本調査で再調査し、4章で報告する)と写真(図版14-2)を示した。

調査の結果、1～3トレンチでは自然堤防面に相当する灰色粘土層が標高-0.7m～-1.0mの高さで確認され、その直上に1.5m程の礫層が堆積していた。3ヵ所のトレンチ断面間の距離は約70mであるが、礫層の高低差は殆ど無い。

これと似たような堆積は5トレンチでも確認され、現在の原野谷川の河道が以前は西側に迂回していたことが判明した。この旧河道のルートに沿って大字長溝の範囲が決められており、現在の浅羽町と磐田市の行政境にも踏襲されている。原野谷川の右岸に字中島の部分と字長溝十二所の部分の二ヵ所が大きく張り出して浅羽町域となっているのは、過去の原野谷川の流路と関わっていたのである。

4トレンチからは、複数の柱穴と溝と推定される遺構が確認された。しかし、東側は現在の原野谷川の河川となって浸食され、西側も旧河道によって浸食されており、トレンチ部分で東西幅が僅か16m分しか残っていない状況が観察された。

次年度に本調査を予定していたので、遺構の掘削は断面に掛かった数ヵ所の柱穴と溝状遺構の上面部分だけに止めた。

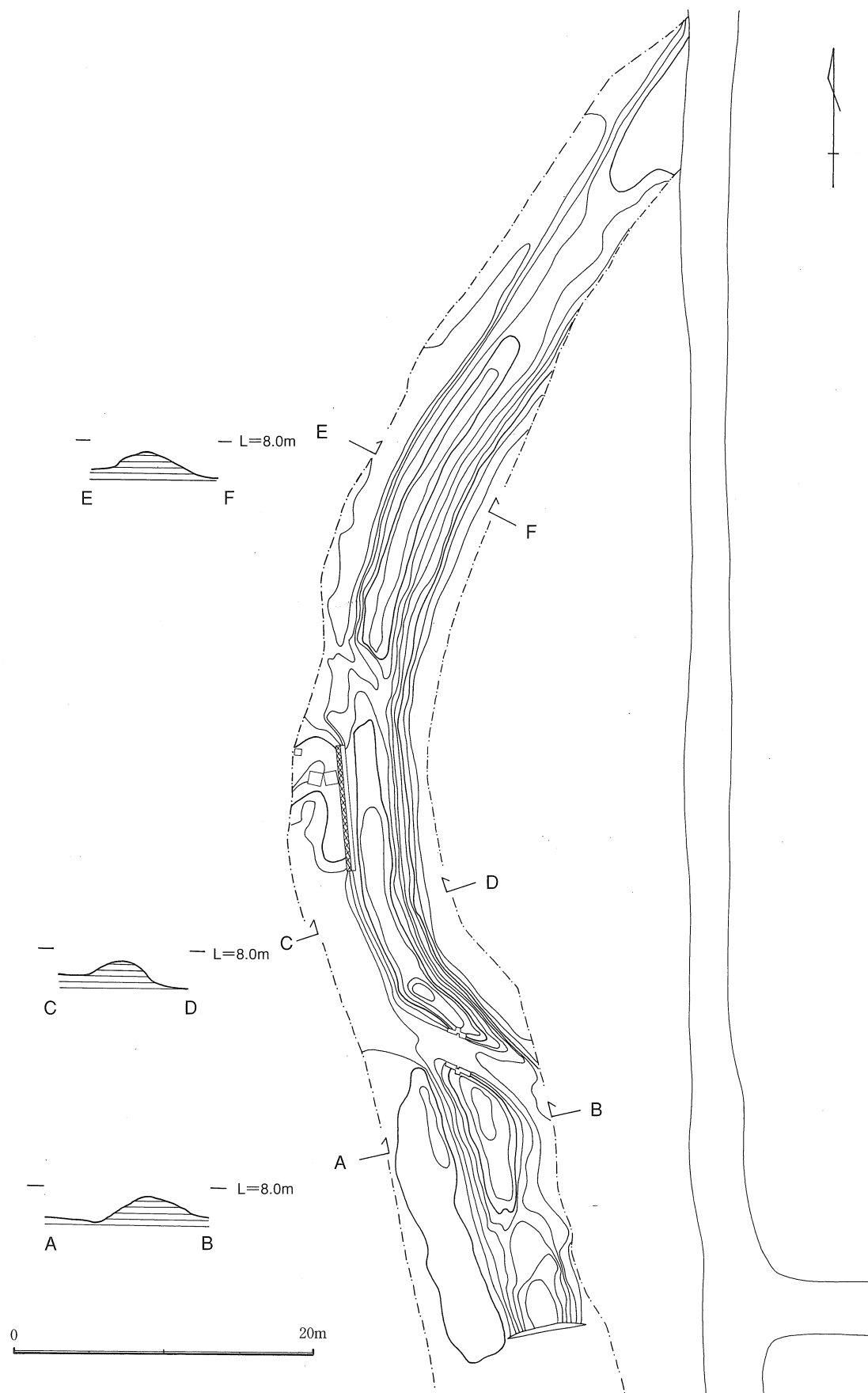


图6 浅羽大堰测量图

第3章 浅羽大囲堤（稗原道遺跡）の調査

1 調査経過と方法

浅羽大囲堤の現地調査は1996年8月23日から開始した。最初の作業は全面に隙間の無い程密集して生えている女竹の伐採で、これは全域を人力で行った。

伐採が終了し全貌を現わした段階でラジコンヘリコプターによる空撮を実施した。撮影にあたっては現在の河川と堤との位置関係が分かるカット（図版5）と、真上から見下ろした状態が分かるカット（図版7）の2カット分の撮影を9月3日に行った。

撮影が終了した時点で直ちに100分の1スケールの平面図を作成、この図は20cmコンターで等高線を入れ、それによって地形を表現した。

この後の調査は、作成した平面図を元にして計画を進めることとなる。9月4日より人力による掘削を開始した。最初に横断面観察を行うため、堤防に直行する方向にトレンチを4ヵ所設定し（断面3・4・5・6）、これを境に南からA～E区の5区に細分した（図7・8参照）。

横断面観察の結果、断面3は他の断面の築造過程と異なって作業単位が細かく古い様相を呈しており、近世の部分が残っている可能性が高いので断面1との間のA区はバックホーを使わず、全て人力で分層しながら地山面まで掘り下げた。

残るB区～E区の間は、東側半分を地山面までバックホーを使って削り、縦断面を出した。記録は、A区に関しては平面図を作成し、地山面の起伏を20cmコンターで表現した。縦断面、横断面は全て20分の1のスケールで実測し、これにあたる部分は写真撮影を行った。

10月17日に全作業を終了し器材を撤収した。

2 調査成果

平面形態（図6，図版7）平面図を作成した結果、調査対象となった部分の平面形態は原野谷川に対して張り出すように緩く弧を描き、通路として破壊された南端から約20mの部分より南側は直線状になっていることが分かった。これは、単に川の流れに平行して築堤されていないことを示している。A区（図7，図版8・9）5ヵ所で行った横断面観察により、近世に造成した部分は大囲堤基底部の盛土にあたってまず地山を平らにならすのでは無く、地山を削り込んで山状に整形し、これを基準に盛土を行っていることが判明した。更に、断面3からは細かな盛土状況が観察されたので、その南側は全て人力により断面を残しながら掘削を進め、築造過程の解明と山状に整形された地山面の検出に務めた。

調査の結果、基底部は幅を5～6m、高さは0.7～0.8m程にわたって山状に地山を削り出し（図7中央）、その上に黄橙色の粘質土を0.1m程入れたのち細砂を入れ、次に黄橙色粘質土と粘土ブロックの固まりを交互に入れながら突き固め、1m程積み上げたのち粘土ブロックが多く混じる土を被せ、その上に表土を盛って仕上っている。断面2での盛土の高さは中央部で1.7mである。

このような工程が見られるのはA区の北側5m分のみで（縦断面d寄り部分）、南側は断面1の様に断面2で見られた細かな盛土工程は無く、断面1から続く盛土が断面2から続く盛土を切っている状況が観察された。

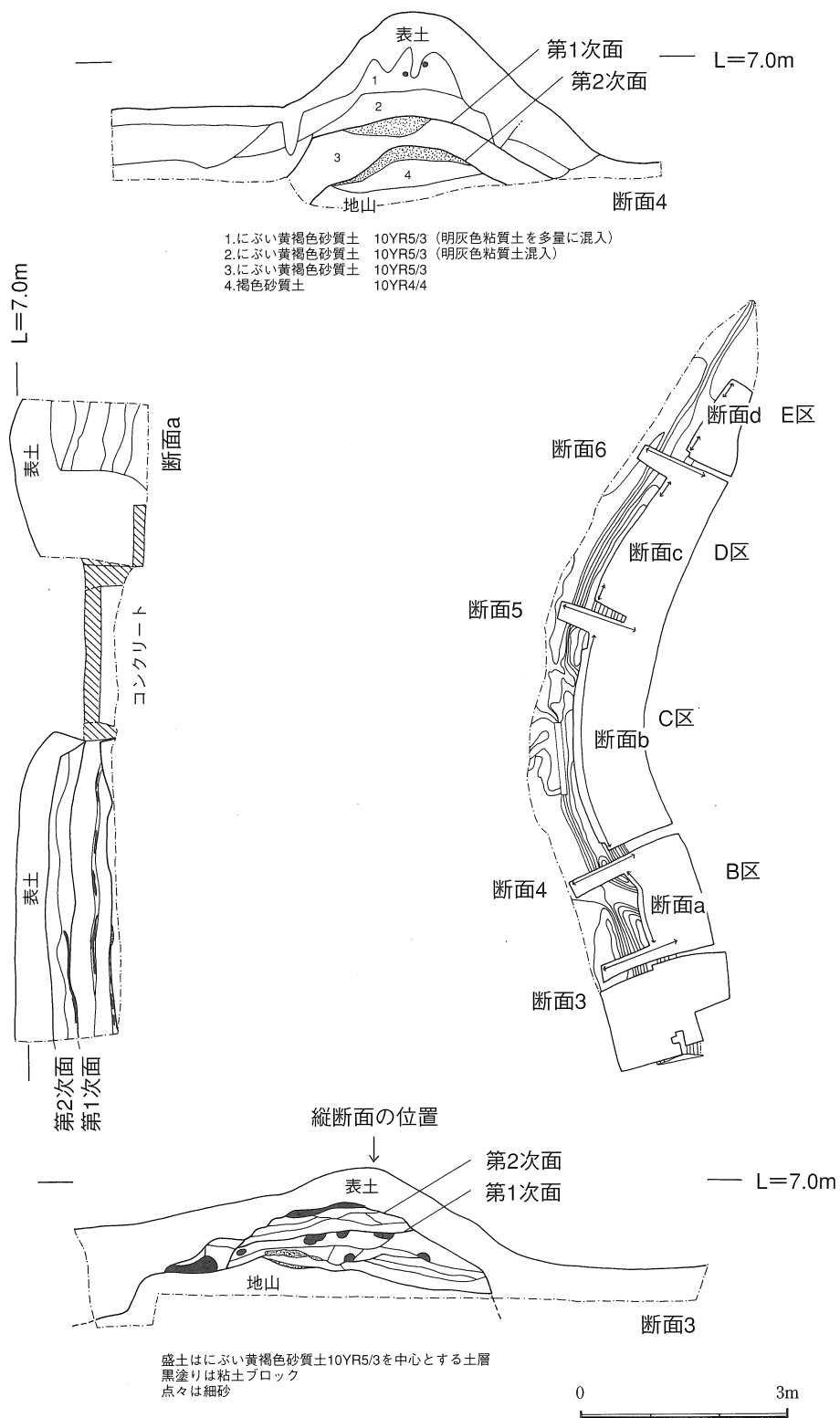


図8 浅羽大囲堤B区の土層断面

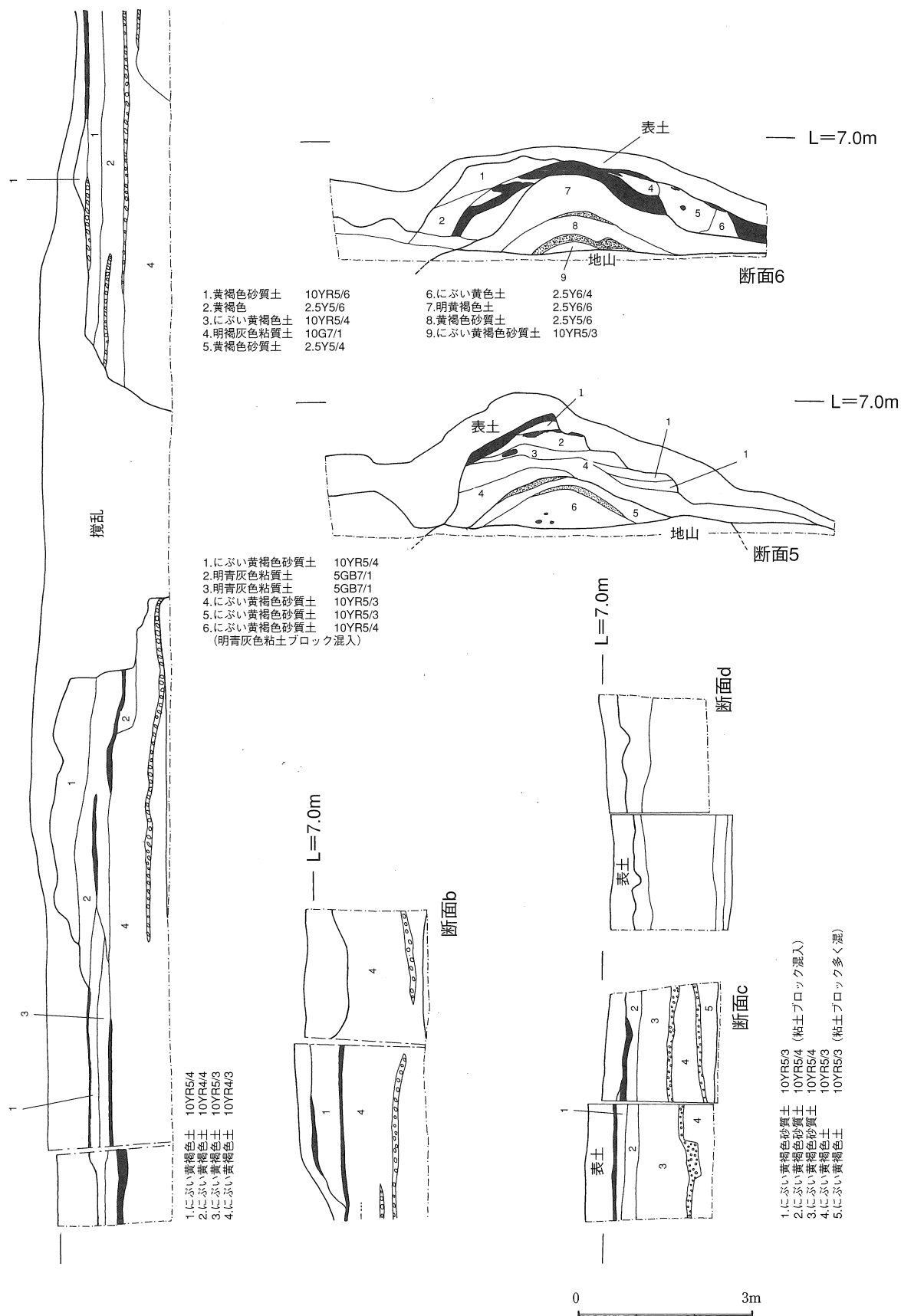


図9 浅羽大囲堤C~E区の土層断面

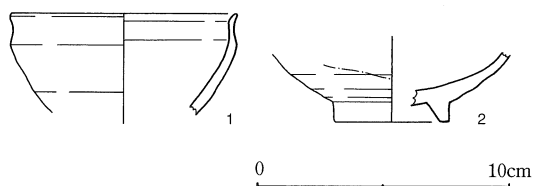


図10 浅羽大囲堤出土遺物

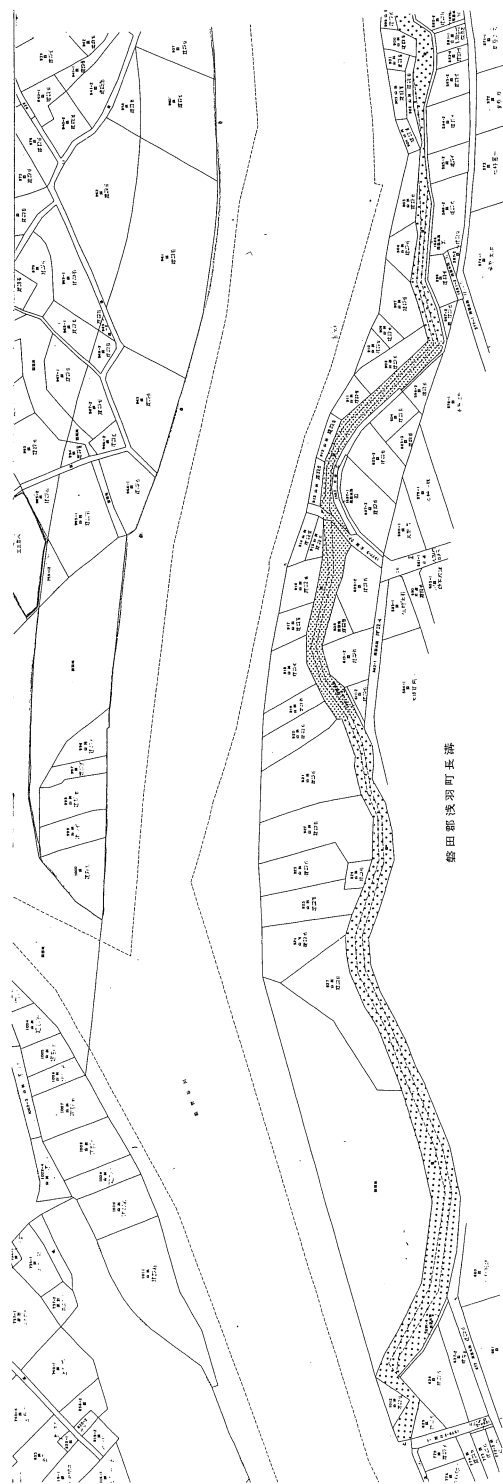


図11 浅羽大囲堤地籍図

断面1で築造工程を検討すると、地山面に黄褐色粘質土を0.6m程盛り上げ、それを灰白色粘土で覆い、その上に黄橙色粘質土を盛り上げて仕上げている。

基本的な工程は断面1も断面2も大差無いが、各層の積み上げ方は断面2に比べると断面1の方が大雑把となっている。

堤防内側（東側）の裾部分には二本の杭列が設けられていることが判明した。この用途については明らかではないが、東側に広がっていた水田との境に当たっており、これに関するものだろうか。

断面2付近の古い盛土は、近現代に下る新しい遺物を含んでおらず、その築造年代は近世初頭～後半に相当するものと考えられる。これを切っている南側の盛土も、やはり近現代に下る新しい遺物を含んでいないが、少し下って近世後半～明治頃と推定している。

B区（図8）B区は中央部に通路が設けられ、後の改変を受けているが、断面3から通路までの部分は古い盛土工程が見られる。この部分で明瞭なのは盛土の工程で、第1次面・第2次面というように二段階に分けた作業が行われていることである。

C～E区（図9，図版10）断面4を含め、C～E区は盛土工程が単調で、縦断面を見て分かるように、同種類の土を一気に盛り上げ、築堤を行っている。ここでは地山を平らに削り、黄褐色土を盛り上げ、砂あるいは礫を挟んで再び褐色や青灰色の粘質土を盛り上げ最後に粘土ブロックで覆うという工程である。機械力を投入した近現代の築造部分であろう。

出土遺物（図10）表土を除いた基底部からの出土品は少なく、全部で20点程である。殆どが近世陶器とかわらけの細片で、このうち図化し得る2点を示した。1は瀬戸・美濃産の天目茶碗、口縁部から体部の破片で内外面に黒色釉を掛けている。口縁8.6cm、17世紀後半。断面3の第2次面から出土。2は瀬戸産の褐釉茶碗、体部下位から底部の破片で、黄褐色～黒褐色の釉薬が掛けられている。17世紀後半～18世紀初頭。断面5から出土。

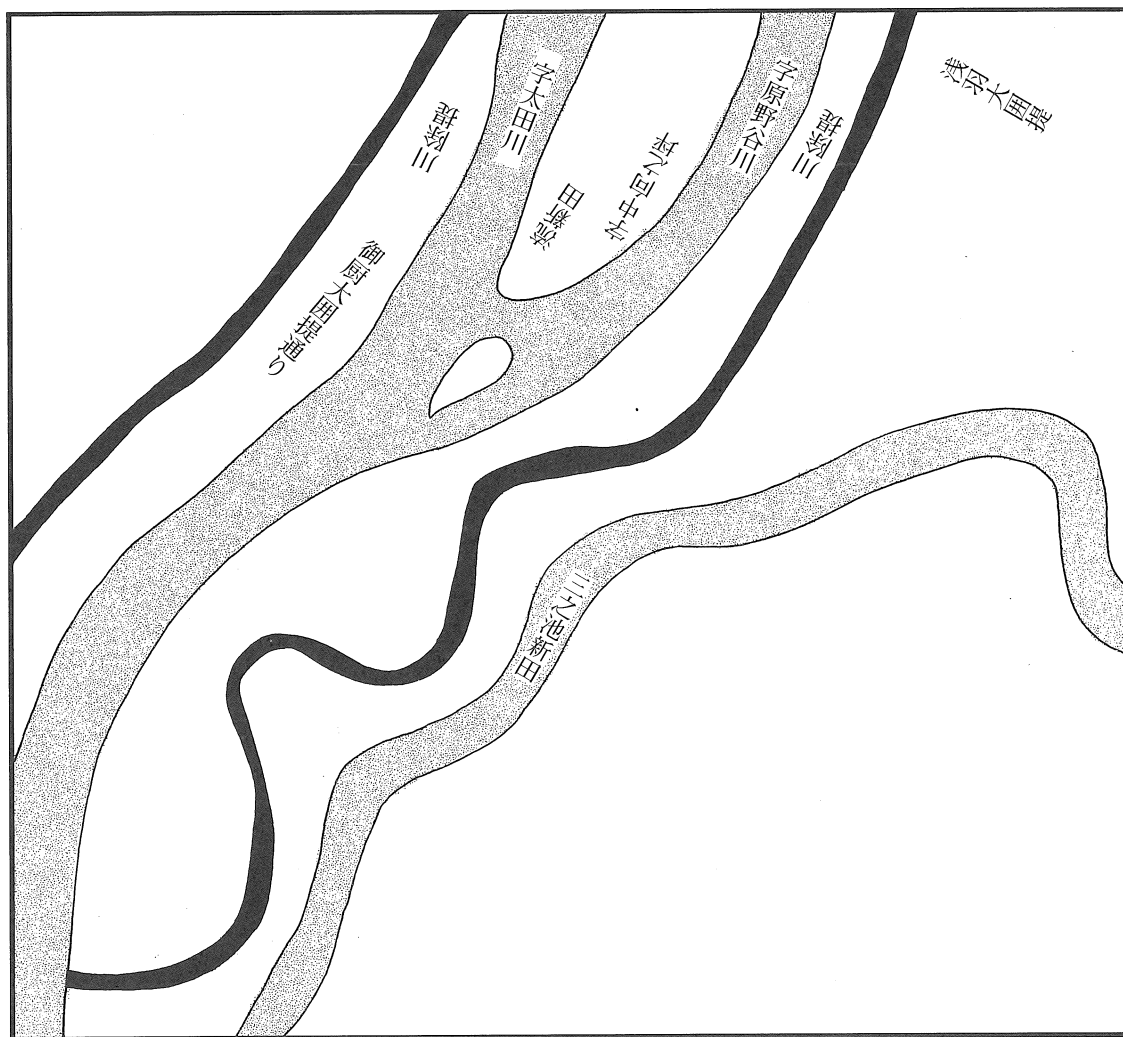


図12 二瀬橋周辺の明治初期の浅羽大堤

3 総括

今回の調査によって、この旧堤防が近世に溯る浅羽大堤の一部であったことが裏付けられた。しかも、中世遺物の出土は無く、近世初頭の築造というこれまでの見解と矛盾しない調査結果となった。外見は完全に繋がっていても度重なる洪水の被害を受け、部分的に補修が繰り返されている実態が明らかとなった。少なくとも近世後半、明治、それ以降という三つの時代に調査区内の堤は補修を受けている。

築造工程を見ると、近世には地山を山状に削り出し、これを基にして粘土と粘質土を交互に積み上げていく状況を知ることができた。これも大きな成果である。

今回の調査で新たに判明したことは、堤の平面形態の特徴である。堤は川の流れに平行するだけでなく、カーブする所や、合流点という氾濫を起こしやすい場所では連続した弧を描き、堤に直接当たる水压を分散する方法が採られていることである。図11は調査地点（網掛けの濃い部分）とその周辺（網かけの薄い部分／消滅）の地籍図で、蟹田川の合流点周辺の線形が連続する弧を描いていた状況がわかる。これと同じ形状部分は図12の模式図（明治5年）に示した太田川・原野谷川合流点の絵図にも見られる。つまり、これが河川の攻撃面に対する工夫であったことが理解できるであろう。

僅か50m分の調査に過ぎないが、水と闘い続けた偉大な先人の知恵を知ることができた。

第4章 中島遺跡の調査

1 調査経過と方法

中島遺跡の現地調査は1997年9月8日に開始した。最初の作業は堤防上に繁茂し侵入を拒んでいる雑草の伐採から取りかかった。これが終了した段階で調査区内とその周辺の排土置き場の伐採を行ったが、女竹だけでなく樹木も多く、予定以上に時間を必要とした。

伐採が一段落した10月20日から昨年に掘削し、シートを掛けたままとなっている4トレンチの調査に手を付け始め、30日に重機による遺物包含層までの掘削を開始した（約2,000㎡）。しかし、表土から遺物包含層までは3m近い堆積があり、その除去に多くの時間を必要とした。

12月11日には重機による遺物包含層までの掘り下げを完了したが、多量の遺物が出土（図版13-1）するので、ドット図を作成しながら遺構検出面まで順次掘り下げた。

全面の遺構を検出した時点で、原野谷川・太田川までを含んだ景観（図版11）と、真上から見た状況（図版12）の2カット分の空撮をラジコンヘリコプターを用いて実施した。

こののち各遺構の調査へと移るが、溝1・溝2からは多量の遺物が出土するので、全点の出土状態を20分の1スケールの図に記入して取り上げ、特にまとまった状態で遺物が出土する溝2の殆どは写真測量により10分の1スケールの図にして取り上げた（3月3日）。

溝の調査が終了した時点で、南側から柱跡、土坑、住居跡へと移り全体の状況が明らかとなったが各遺構の精査と完掘状況の撮影を残して年度末を迎えた。

その後は、町の単独事業に切り替え調査を続けたが、4月13日から降り続いた雨のために15日には危険水位に達して調査区が冠水、仮設事務所近くまで水が迫り危険な状態となった。

雨が降り止んだ16日以降、排水を行い復旧に努めたが、全面にヘドロが厚く覆い、遺構の痛みも激しく、元の状態に戻せないと判断し教育委員会内で協議して全体の調査終了を断念した。

この後は最後に残っていた住居1とその周辺、溝4の大まかな調査と図化のみを実施し、不本意ではあるが現地での作業を終え、22日に器材を撤収して完了した。

2 調査成果

概要（図13）中島遺跡は東側は原野谷川、西側はその旧流路が浸食した中洲として残された遺跡で、最大でも東西幅18m分、南北方向に70m分、面積にして約1,500㎡しか残っていない遺跡である。

調査の結果、溝4条、土坑7基、竪穴住居3棟、柱穴多数（約300）を確認した。

基本土層（図15中央断面、図版14）中島遺跡の土層は西側を川砂が浸食して覆い、表土の下は2m程の黄褐色粘質土が厚く堆積している。その下には灰色粘土、灰オリーブ粘土という灰色系の粘土が堆積し、その下は三つの遺物包含層である緑灰色粘質土、暗緑灰色粘質土、オリーブ粘土となる。

遺構掘り込み面は二面あり、新しい遺構は緑灰色粘質土層の下面から掘り込まれ、古い遺構は遺物包含層の下面から掘り込まれている。

南壁の土層（図15南壁断面）は中央断面に見る土層に準じるが、全体にグライ化が進み、断層が3ヵ所で確認できる。断面図には、数字を入れてどの土層に対応するのかを示した。

溝1 調査区の北端に位置する。幅9m程にわたって緩やかに窪んで立ち上がる溝で、最大の深さ

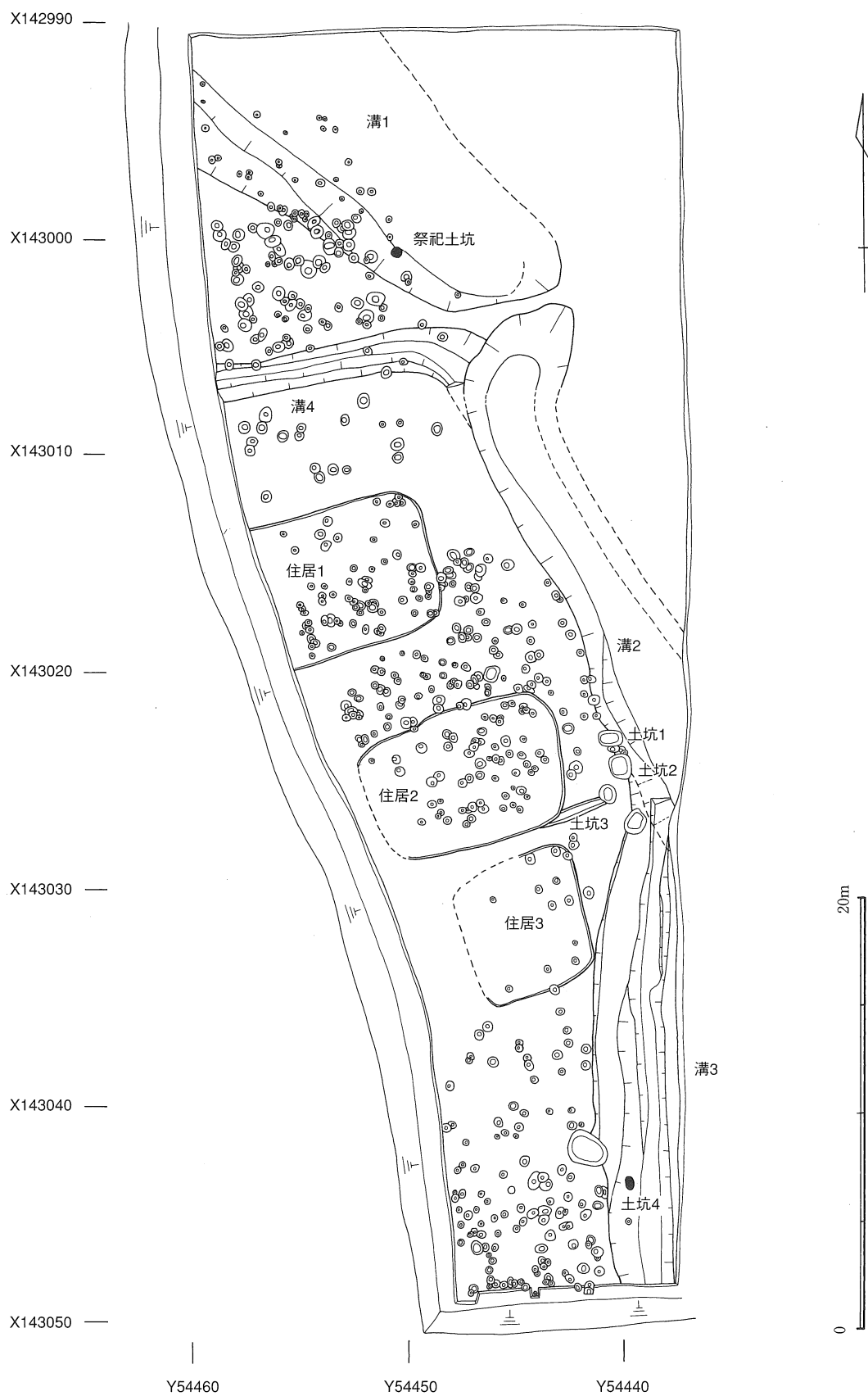


図13 中島遺跡全体図

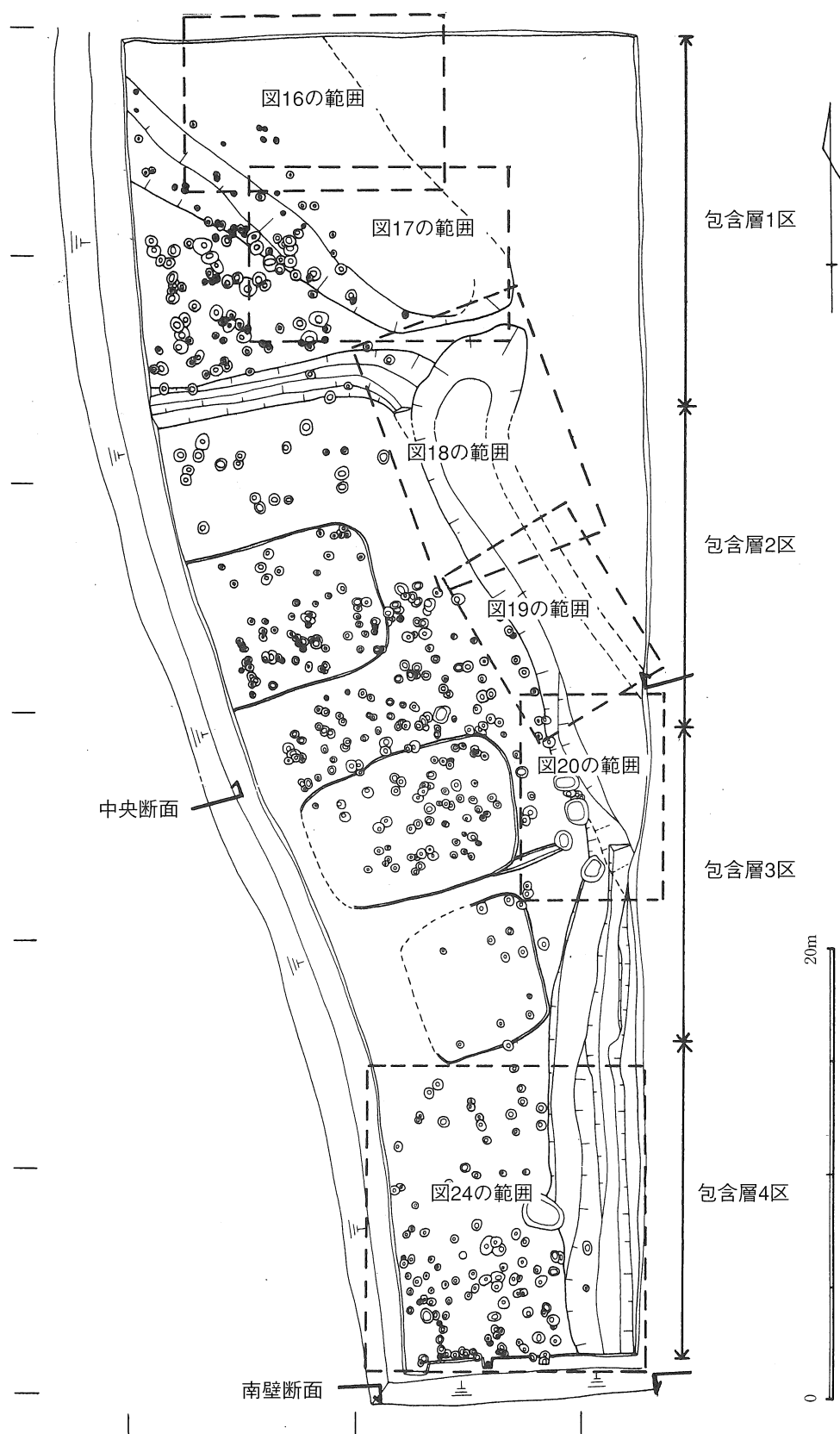


図14 中島遺跡包含層区分・挿図位置図

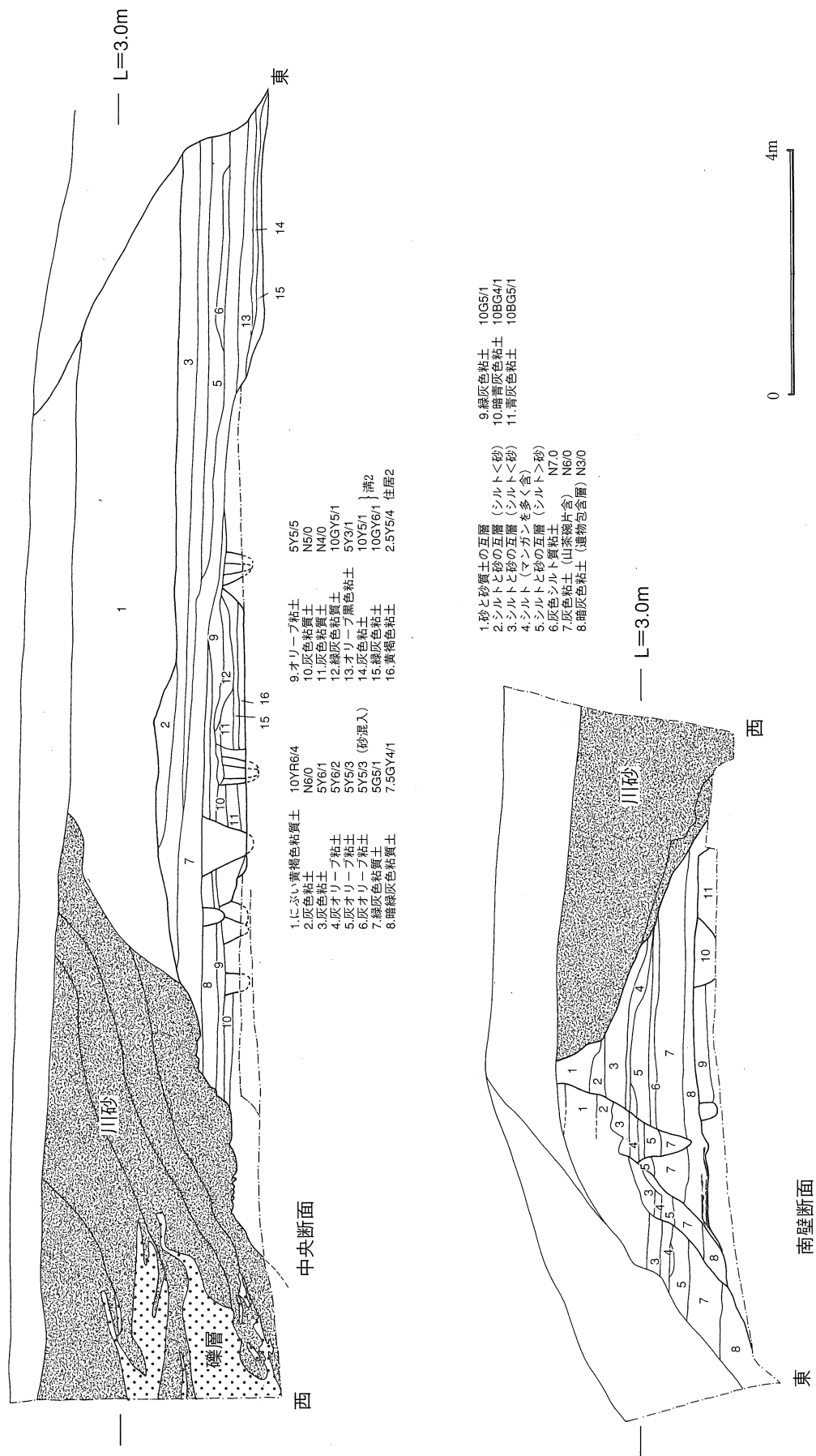


図15 中島遺跡土層断面図

が 0.2m 程の浅い溝である。東側がグライ化して土層の識別ができず、明確な幅は不明。しかし、遺物の集中する範囲から輪郭を復元した。南側は溝 2 との間が切れて、通路となっている。

遺物は溝が切れる南側に集中（図17）する傾向が見られるが、中央の 2 m 幅の間は特に密集し、溝の中心部を反映している（図16で顕著）。12世紀後半を中心とする溝である。

溝 2（図版15・16）調査区の東側に位置し南北方向に延びた溝である。ここでも東側がグライ化して土層の識別ができず、明確な幅は不明であるが、遺物の出土状態から幅 3.5～4.0m、平均の深さ 0.4m 程の範囲を推定した。北端で東に曲って切れる形態をしている。最上層は全面に炭が詰まる黒色粘質土が入り、これを除くと多量の遺物を含む灰色粘土となる。

この溝からは中島遺跡の主体を占める遺物が出土し、北からイロハニホという 5 区域に区別し遺物を取り上げ、その状態を図18～20の 3 枚の図に示した。

遺物は北寄りのイ・ロ区に最も集中し、後のハ・ニ・ホ区では散漫となる。ロ区からは伊勢型鍋(205)が出土し、その周辺にヤマトシジミの殻も固めて捨てられていた。ニ・ホ区は遺物が散漫となるが、瓦器碗片(163)と、6点分の青磁・白磁が出土し、ここから出た排土中からも2点分の瓦器碗片(164・165)が発見され内容はむしろ豊かとなっている。溝 1 同様12世紀後半を中心とする溝である。

溝 3 調査区南側の東端に位置し、長さ約20m分を確認した。遺構発見面は標高 1.5m の高さで、周辺の柱穴が発見される面より 1 m 近くも深くなっているが、これは、地滑りによって原野谷川寄りの部分が沈下したからである。2つの断層と溝の関係は図24で示した。断面は図15南壁断面で確認されたい。

溝の幅は 1.1～1.6m、深さが 0.4m 程の溝である。出土遺物は多くないが、13世紀前半を中心とする溝である。

溝 4（図版17）調査区北寄りに位置する。東西方向に延び、溝 2 に接する地点で南にカーブする溝である。切り合い関係から、溝 2 に先行する。幅 1.5～2 m、深さ 0.4～0.5m 程の溝である。

住居 1（図21上、図版18）南北 6.6m、東西 8.0m 程（西側はグライ化により、識別できなかった）の規模を持つ隅丸方形の竪穴住居で、竪穴内からは複数の柱穴が見つかったが、図には床面で確認した 9 穴のみを示した。床面から伊勢型鍋(208／図版21-2)が出土した。

住居 2（図22、図版19）南北 6.4m、東西 9.0m 程（西側はグライ化により、識別できなかった）の規模を持つ隅丸長方形の竪穴住居で、竪穴内からは複数の柱穴が見つかったが、図には床面で確認した 8 穴のみを示した。遺構内覆土からは多数の破片となった遺物が、炭や焼土と共に出土した。

図には特に集中する範囲に網を入れ示した。

住居 3（図21下）南北 6.4m、東西 5.0m 以上（西側はグライ化により、識別できなかった）の規模を持つ隅丸方形の竪穴住居を想定したが、住居 2 のような東西に長い建物であったかもしれない。以上 3 棟の竪穴住居は建物の方向性、出土遺物から12世紀中頃～後半に並存した建物と考えられる。主要土坑（図23）土坑 1～3 は溝 2 の南端に位置し、溝の肩を切って掘られている。土坑 1（図版21-6）は南北0.75m、東西1.15m、深さ0.28mの規模を持つ。土坑 2 は南北1.15m、東西 0.9m、深さ 0.23m の規模を持つ。土坑 3（図版21-7）は南北1.25m、東西0.95m、深さ 0.6m の規模を持つ。

祭祀土坑（図版21-5）は溝 1 の南肩に位置する。土坑の中に火を受けた砥石を立て、これに輪花碗を被せた「まじない」を行ったものと考えられる。掘削時に上面を欠いてしまったが輪花碗は完形である。

南柱穴群（図24）調査区の南側には礎板や礎石、土器を入れた小ぶりの柱穴が多数見つかり、これを一括して示した（図版20～21）。



図16 溝1主要遺物出土状態（イ・ロ区）

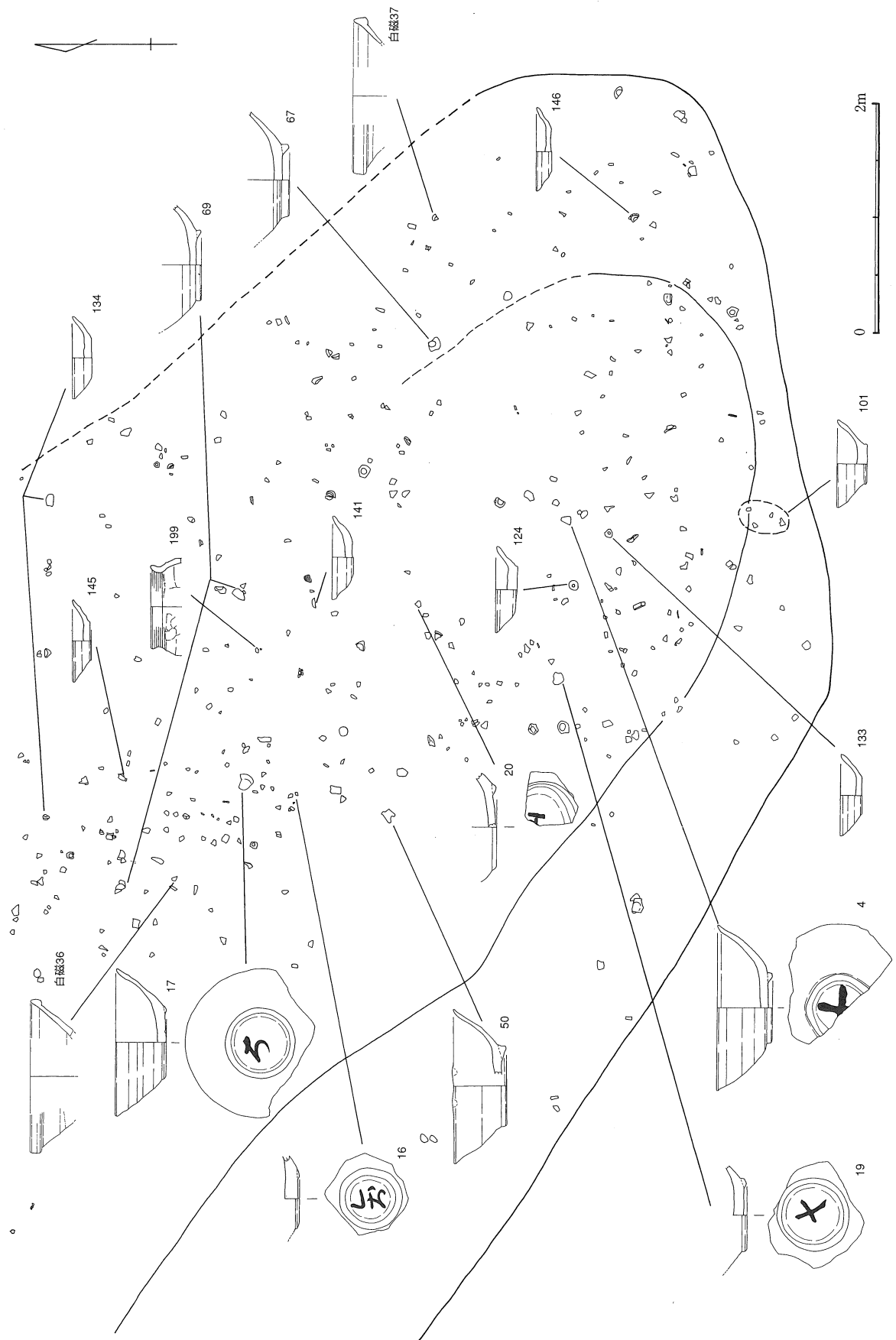


图17 沟1主要遗物出土状态 (口区)

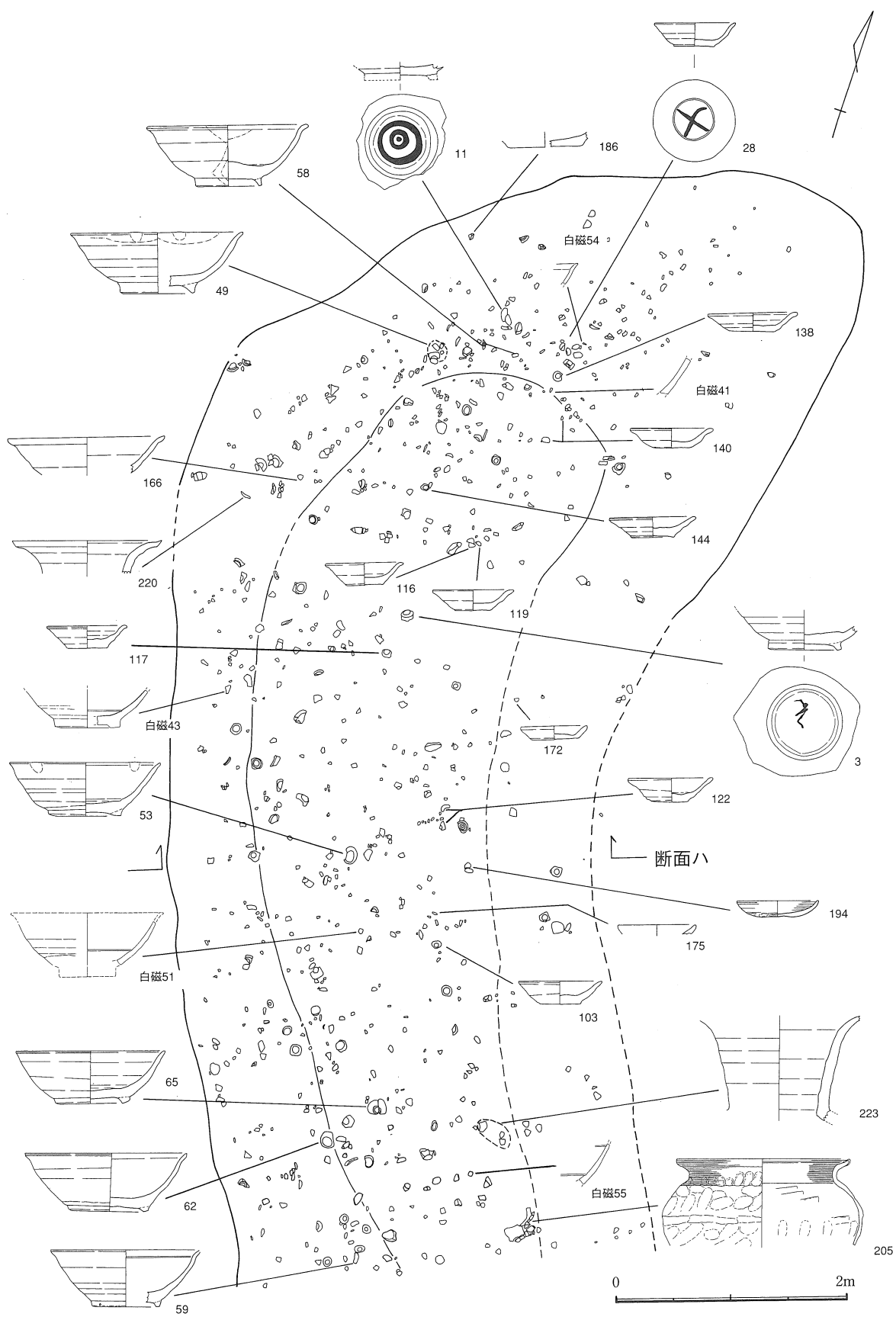


図18 溝2主要遺物出土状態 (イ・ロ区)

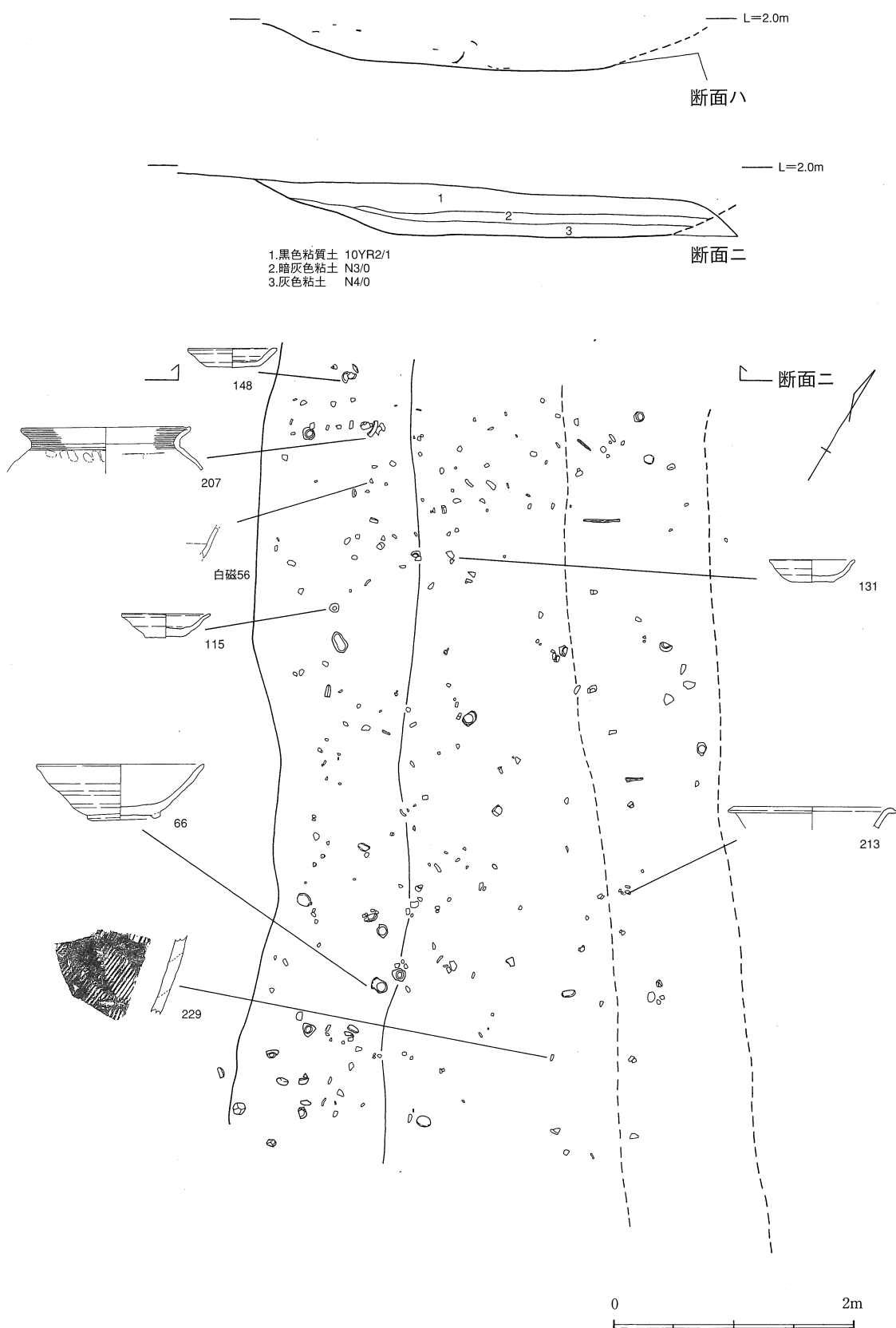


図19 溝2主要遺物出土状態 (ハ区)

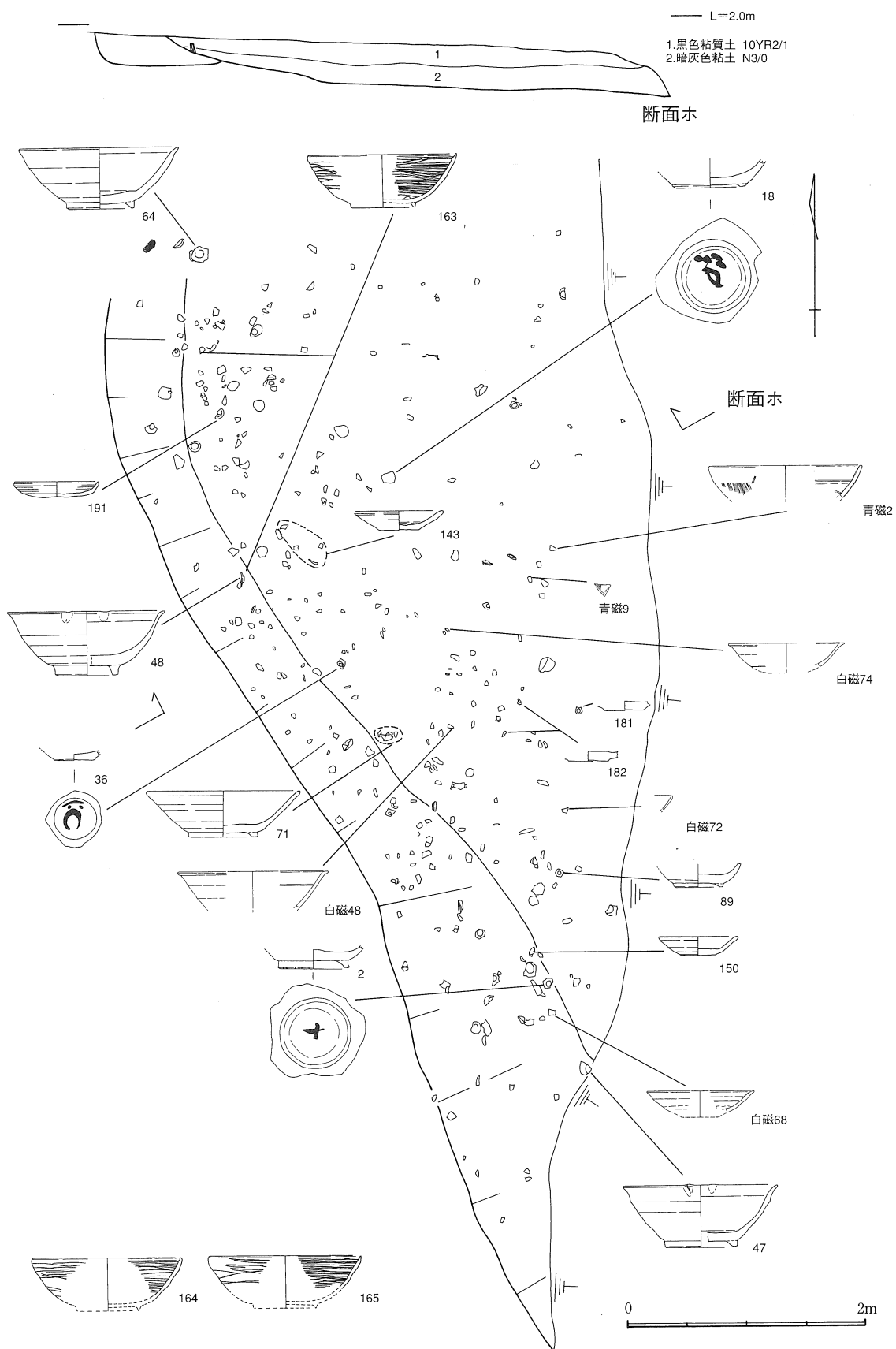
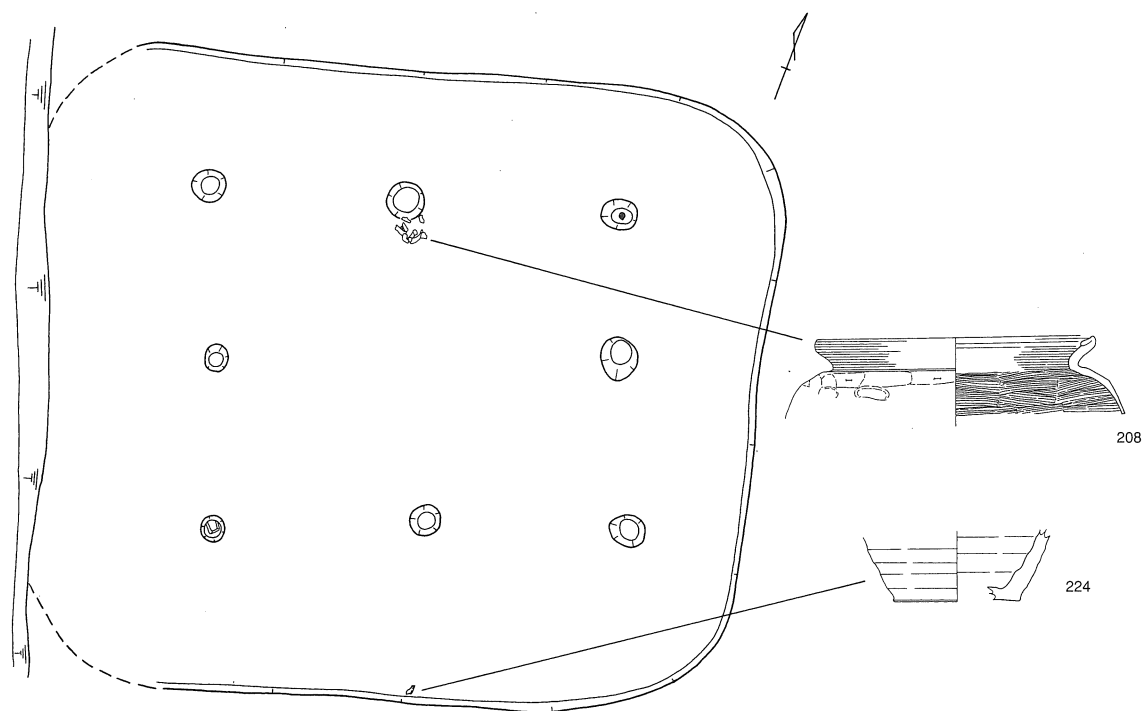


図20 溝2主要遺物出土状態 (二・ホ区)



住居1

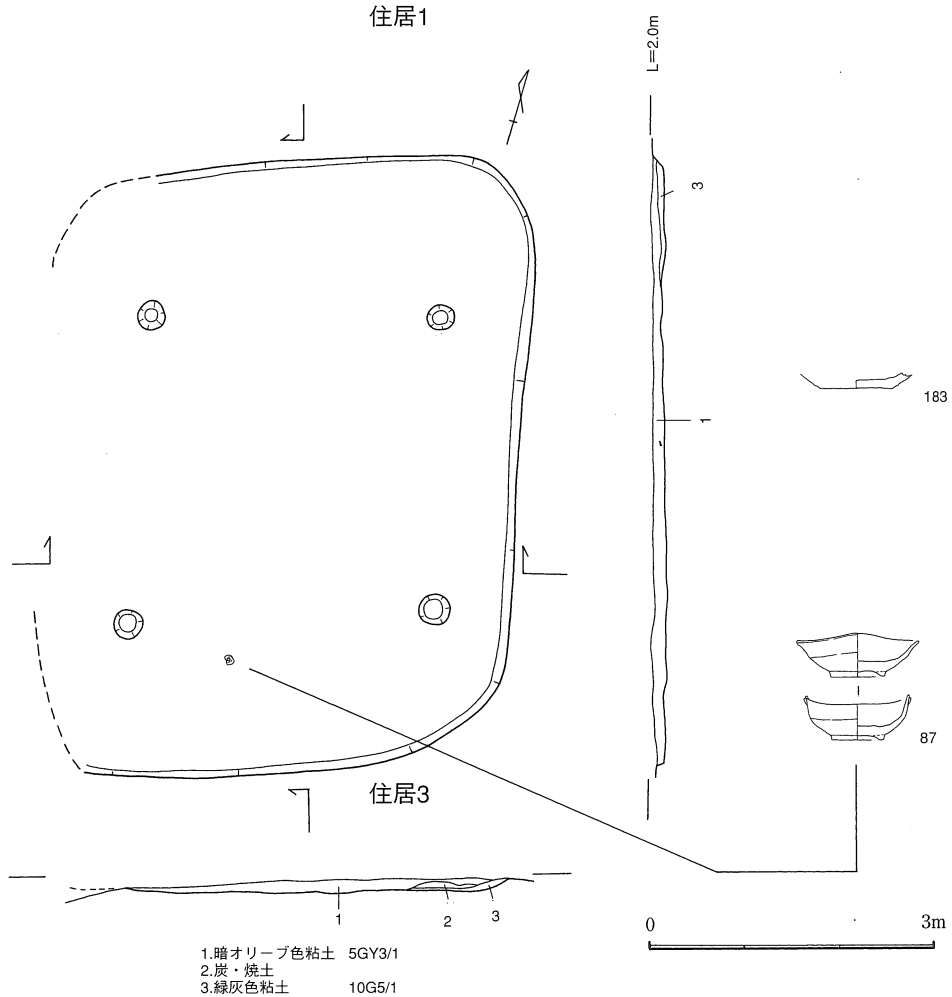
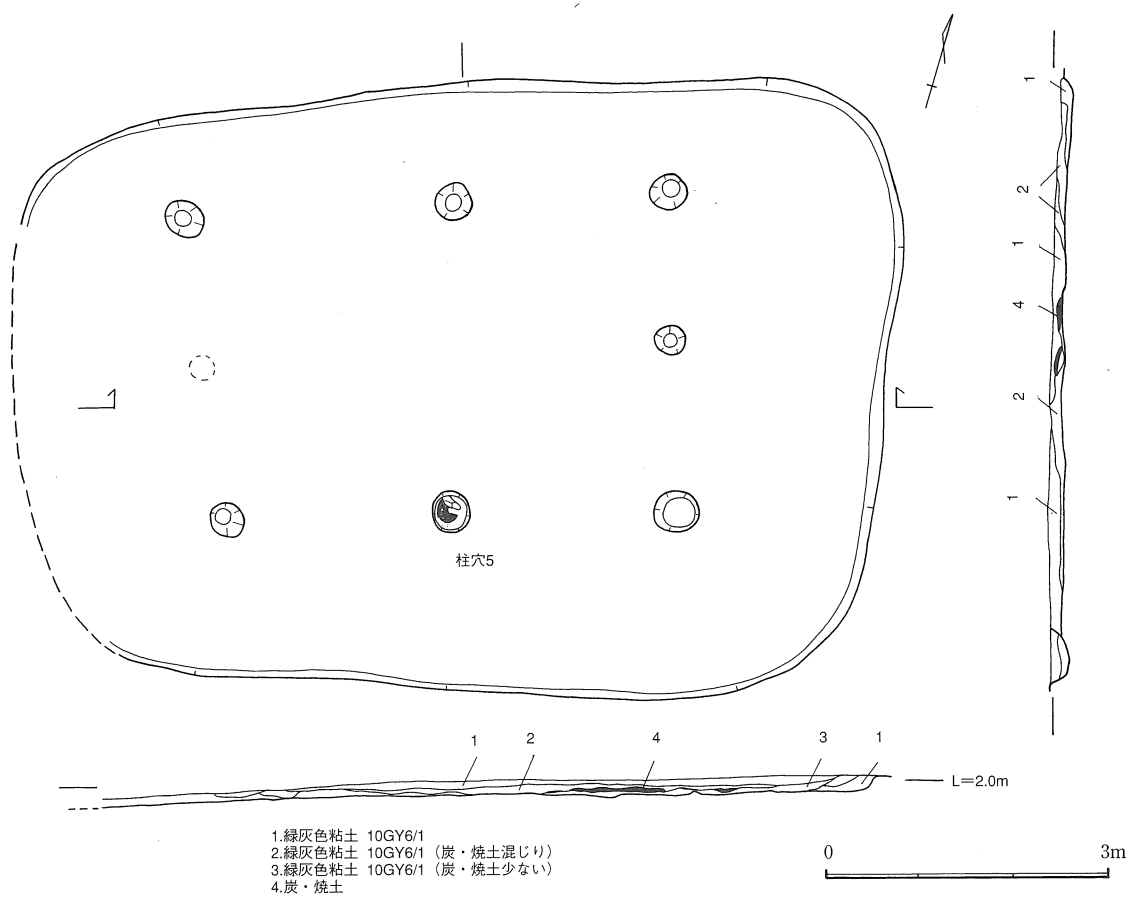
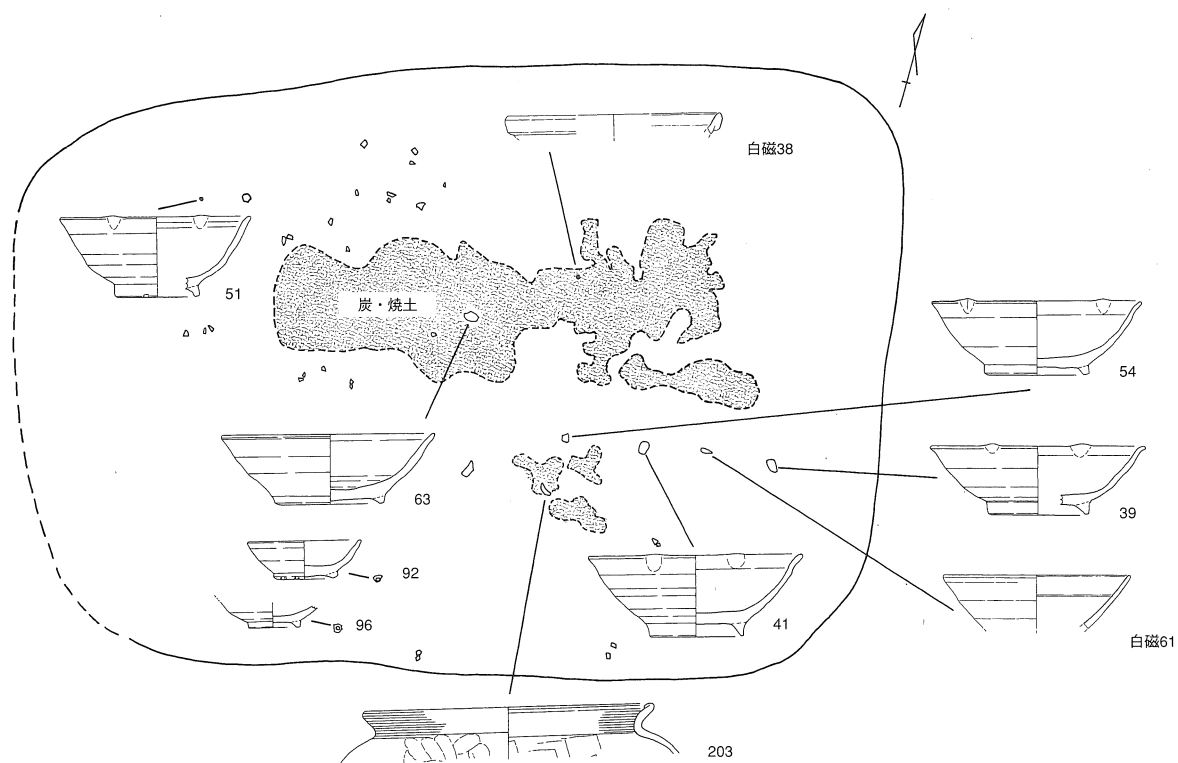


図21 住居1・3実測図



- 1.緑灰色粘土 10GY6/1
- 2.緑灰色粘土 10GY6/1 (炭・焼土混じり)
- 3.緑灰色粘土 10GY6/1 (炭・焼土少ない)
- 4.炭・焼土

0 3m

図22 住居2実測図

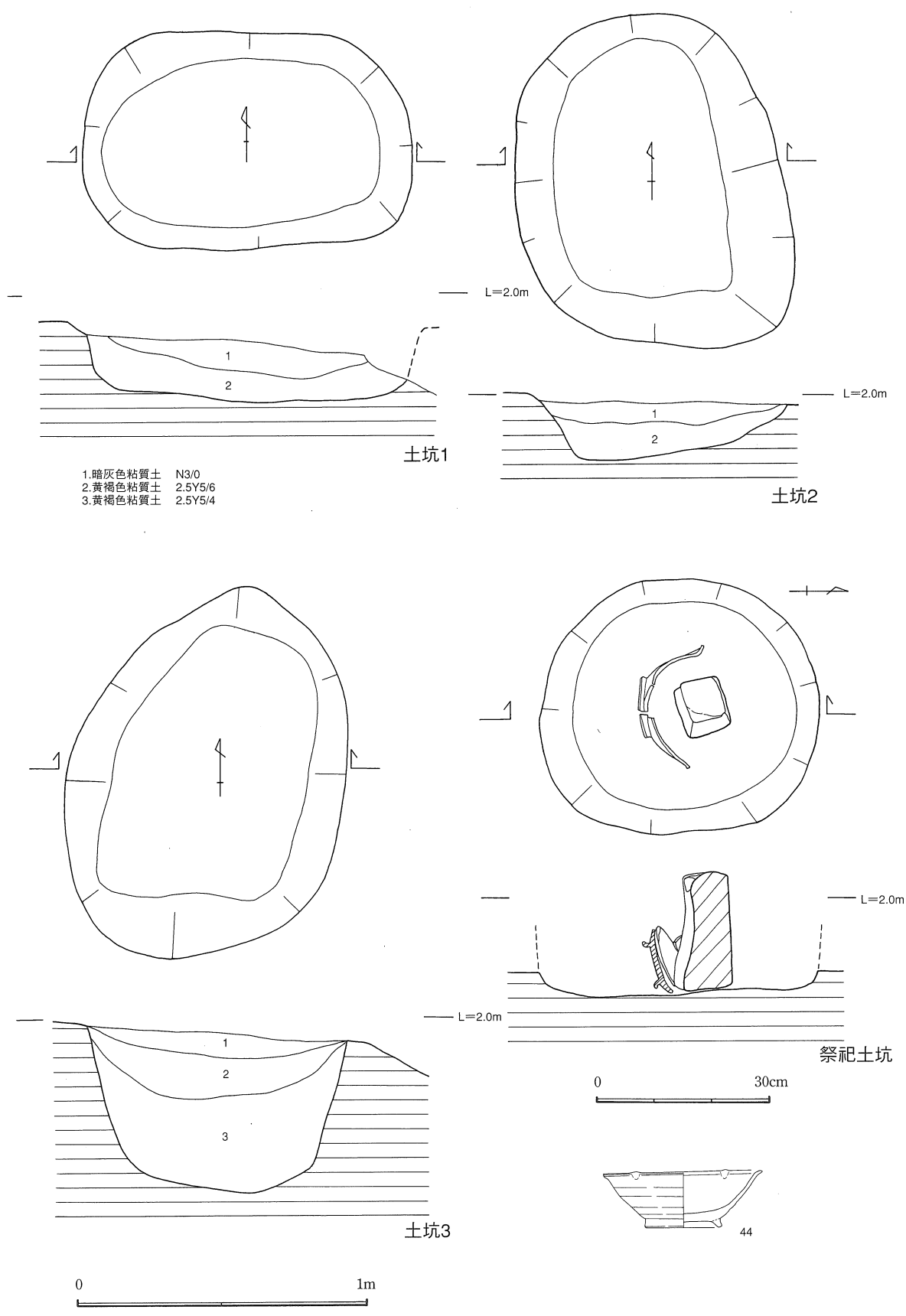


图23 主要土坑集成图

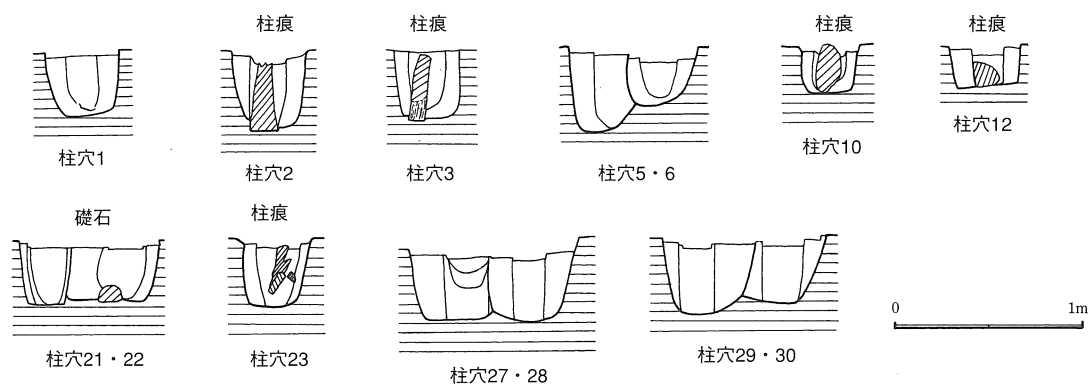
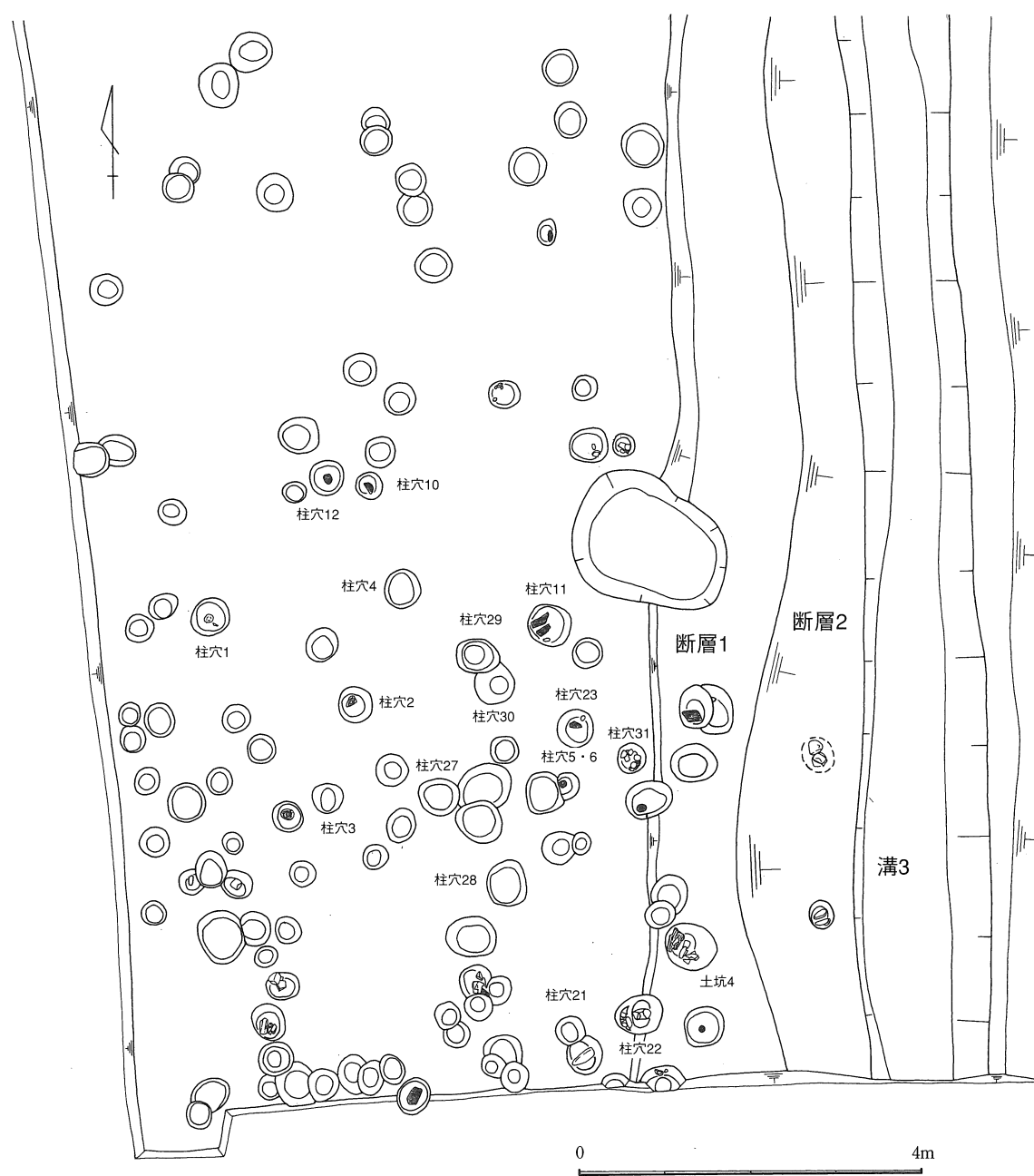


图24 調查区南柱穴密集地区实测图

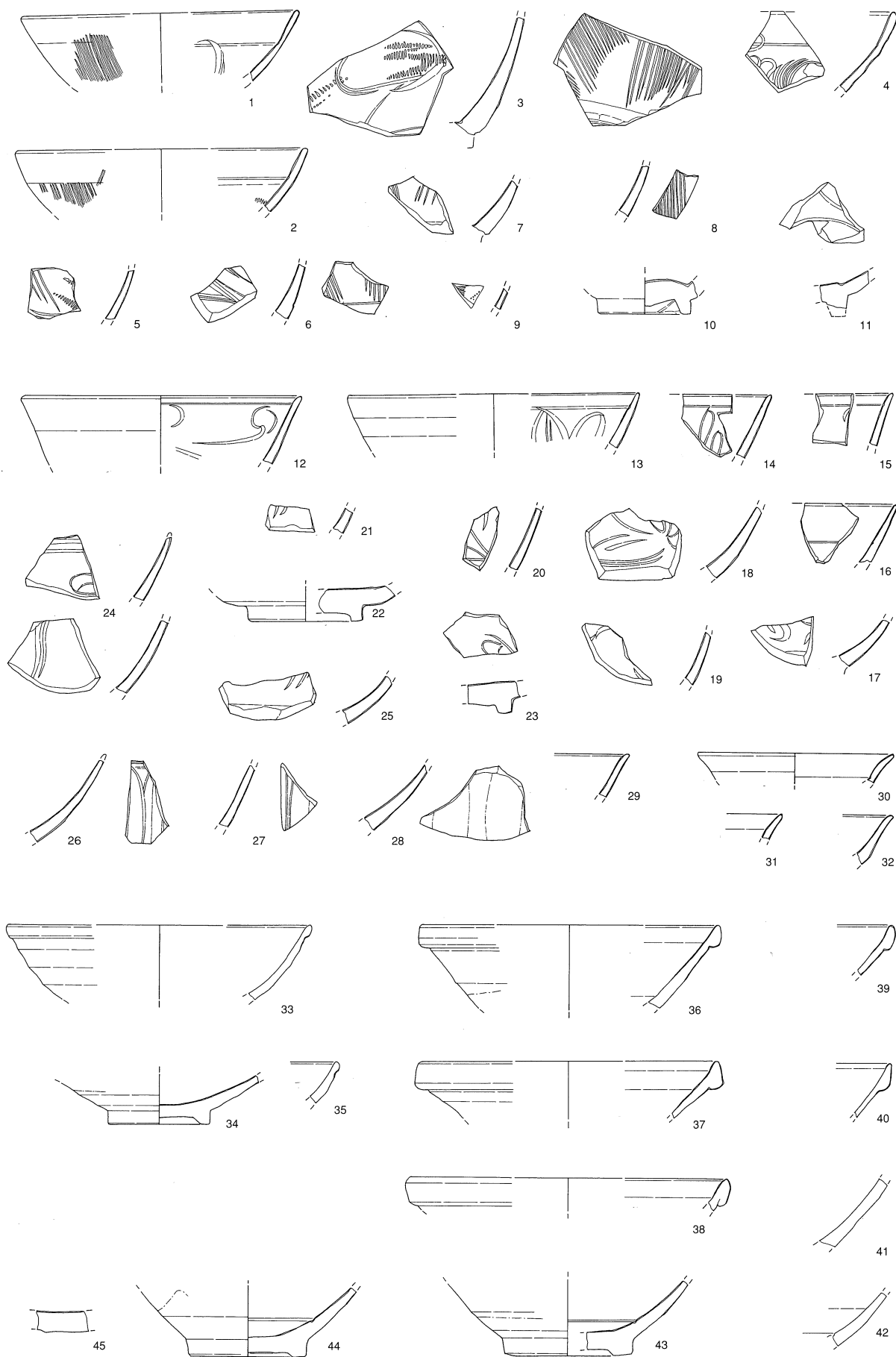


図25 中島遺跡出土遺物1 (船載陶磁器)

0 15cm

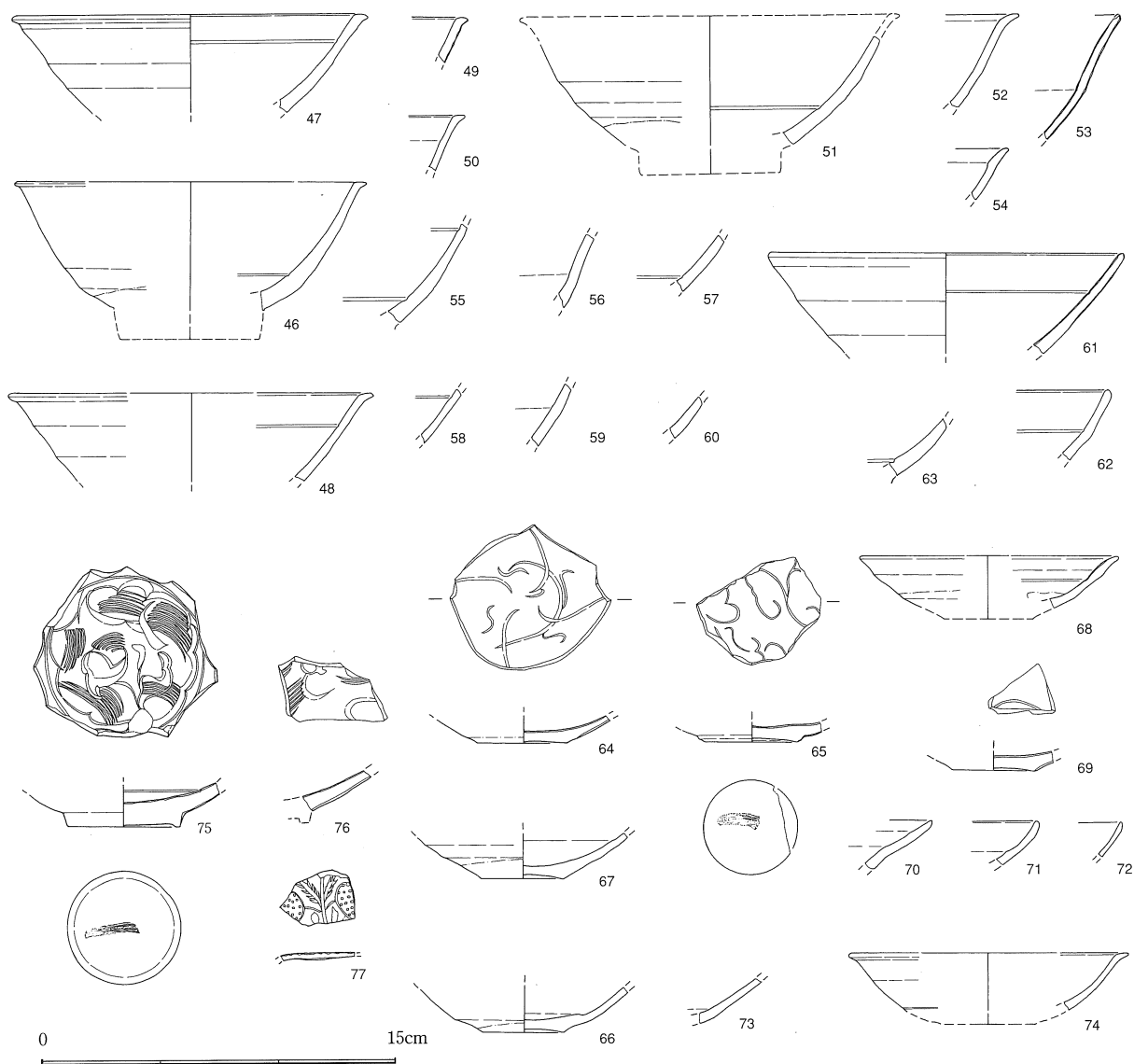


図26 中島遺跡出土遺物2（舶載陶磁器）

3 遺物

今回の調査でポリコンテナ30箱分の遺物が出土している。遺物は、包含層と溝からの出土が殆どで残りは住居跡、土坑、柱穴からである。その内訳は、中国産の舶載陶磁器、中世陶器、土師質土器、石製品、古銭などである。特に山茶碗や小皿などの中世陶器が、かなりの割合を占めている。

時期は12世紀前葉から13世紀中葉頃までの遺物がみられる。出土量は、12世紀前葉から少量出土し始め、12世紀後半の遺物が大半を占める。次に13世紀前葉の遺物が一定量みられ、13世紀中葉で若干認められるものの、それ以降の遺物はほとんどみられなくなる。以下、それらの遺物について記述する。舶載陶磁器の記述は、原 廣志氏にお願いした。その他の山茶碗類の編年については、松井氏、藤沢氏の編年に従い、南伊勢系鍋の編年については、伊藤氏の編年に従った。

舶載陶磁器

中島遺跡出土の中国産舶載陶磁器は、青磁・白磁の碗・皿類を中心として少量ではあるが青白磁も出土した。その総数は破片数で88点、個体数にして総計77点を数える。この中で各遺物の特徴と概要を観察表に、その種類と器種の分類別出土数を表1～5にそれぞれを示した。

青磁・白磁については、基本的に横田賢次郎・森田 勉氏（横田・森田 1978）の分類を継承し、これ以後に修正・追加した資料も含んでいる（大宰府市教委 1983・4）。なお、遺跡から出土した舶載陶磁器は殆んどが小破片であるため、図27には主な型式の代表的な作例を参考資料として図示した（鈴木・市村ほか 1982、馬淵1985）。

1. 舶載陶磁器の概要

青磁（図25-1～32、図版1～2）

青磁は、同安窯系の碗11点と龍泉窯系の碗29点・皿3点が認められた。

1～11の一群は、概ね灰～灰白色の胎土、黄色味をおびた灰～灰緑色のほとんど失透しない釉薬が薄くかけられているが、外面体部下半は施釉されず露胎となっている。施文に際しては、篋や櫛歯状の工具を用いて内面に手早く簡略な文様を彫った碗の類で外面にも櫛描文を施したのが特徴的である。これらの資料は従前から、福建省同安県にある窯址の名をとって「同安窯系青磁」の分類名称で呼ばれていたが、近年の中国古窯址の調査成果から福建省内の南安县、浦田県（ほでんけん）などでも類似の青磁を生産した窯址が数多く発見されている。

12～32の一群は、所謂「龍泉窯系青磁」（浙江省西南地域）と呼称される資料である。これらの一群は灰～灰白色の胎土で、青味や黄味がかかった灰緑色の釉薬がかかり、碗では内面と外面の高台脇まで施され、畳付から高台内は露胎となっている。12～25は内面に片切り彫りで蓮花文や飛雲文などが表された劃花文碗（Ⅰ-2・4類）である。30～32は体部中程で屈曲した皿である。遺存部には文様が認められないが釉薬や胎土からみて、見込に片切り彫りで劃花文や魚文の文様が表わされた一群の皿（Ⅰ類）と思われる。

26～28は鎬蓮弁文碗（Ⅰ-5類）である。体部の外面に片切り彫りの手法で蓮弁文を表わしており、蓮弁の中央に鎬と呼ばれる陵のたったものである。29のように無文碗のタイプ（Ⅰ-1類）もみられた。

白磁（図25-33～図26-74、図版3～4）

白磁は碗・皿類の器種だけで壺類は1点も出土していない。碗類のうち玉縁碗（Ⅱ・Ⅳ類）と端反碗（Ⅴ類）が各15点ずつと白磁の中で占める割合が極めて高く、皿類では平底の成形による小皿（Ⅵ類）が主な型式となっている。この手の白磁の産地は、福建省や広東省などの中国沿岸部地域と考えられている。

33～45は口縁部が肥厚して玉縁を呈する白磁碗である。これらには、口縁部があまり肥厚せず丸みを持って立ち上がるタイプ（33～35）と、玉縁の形状に若干の差を認めるがよく発達した玉縁をもつタイプ（36～45）の二者に大別されるが、両者ともに共通した諸特徴を備えている。後者の肥厚した玉縁の断面は、折り返すことで体部に続く部分に明瞭な稜線を作り出している。底部を残す資料では高台内を浅く削り出したやや幅広の低めの高台をもち、高台脇から直に延びた体部へとつづき、器壁は体部に比べて底部が厚く成形されている。見込周囲には一条沈線による円圈が認められる。胎土は灰白～黄灰色を呈し、焼成も堅緻な例からやや粉質なものまで個体差がみられるが、釉薬は体部外面の中位～下位以下が露胎となっており、施釉は「ずぶがけ」によるとみられる。露胎部に成形時の回転削りによる飛びカンナの痕跡が認められた資料もある。

46～60は口縁端部が外方へ引き出されたように反る形をもつ端反碗である。見込周囲と口縁下に一条の沈線を巡らしている。今回の調査では底部を残す資料は出土していないが、同一型式の例をみると高台は高く直立したタイプである。胎土はやや粗く黒色微粒を含み灰～灰白色で、釉薬は灰白色に緑・黄色味をおびたもので体部外面の下位から底部にかけては施釉されていない。

61・62は体部から直に口縁部につづき端部が丸みをもって納まるタイプである。口縁下に一条沈線がみられ、釉薬は前二者と同様に体部下半が露胎となっている。森田分類による白磁碗Ⅷ類に属する資料と考えられる。Ⅲ類は平底の64～73のⅥ類系と74のⅤ類と思われる端反皿であった。

青白磁（図26－75～77、図版4）

青白磁は影青（インチン）の名で呼ばれるように青味をおびた白磁の一種で、中国の江西省、福建省、広東省など中国南部一帯での生産が知られている。75・76は見込に劃花文と櫛描文を施した低い高台をもつ碗である。77は平型の合子の蓋であり、型作り成形で蓋表に草花文を配している。

以上のように中島遺跡出土の舶載陶磁器の特徴として、青磁では同安窯系碗と龍泉窯系の劃花文碗の占める割合が圧倒的に高い。これに比べて13世紀の前半代から搬入されだし中頃に爆発的に増加し最も一般的な青磁となる鎬蓮弁文碗は僅かに3点出土したに過ぎない。また13世紀後半代から全盛となる高台の幅が狭く、畳付を除く全面に施釉した蓮弁文碗（Ⅲ類）が一点も出土していない。さらに中世都市鎌倉を中心にして、鎌倉時代中～後期の時期に各地の遺跡で鎬蓮弁文碗・折縁皿（Ⅰ－5・Ⅲ類など）とともに多量に認められる白磁の口元碗・皿類（Ⅸ類）の一群が一点も含まれていないことは、本遺跡出土の舶載陶磁器類の下限年代を知る上で重要な手がかりとなろう。次に出土比率をみると、碗類の占める割合が皿類に比べて極めて高いことが指摘でき、さらに青磁の同安窯系櫛描文碗や龍泉窯系劃花文碗・皿に比べて、白磁玉縁・端反碗、皿類の方が高い出土比率を示していたことが遺跡の特徴であろう。

ところで中世都市鎌倉の12世紀末～13世紀前葉における時期の舶載陶磁器類の様相をみると、大倉幕府周辺や鶴岡八幡宮に近い若宮大路周辺の遺跡（有力御家人の屋敷や幕府などの中枢域）の中世地山面上の遺構に伴って出土する組み合わせは、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ類、白磁皿Ⅳ・Ⅷ類と同安窯系青磁櫛描文碗・皿、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－2・4類、青磁皿Ⅰ類などで本遺跡の組成と類似した器種・型式が認められているが、青磁類の占める割合が白磁類に比べてかなり高い割合を示す点が大きく異なっている。さらに注目すべき点は、本遺跡から白磁碗Ⅱ類や皿Ⅵ類が出土したことである。

これらは主体を12世紀前半におき後半まで若干残るものであるが、鎌倉では出土していない資料である。したがって、本遺跡出土の舶載陶磁器の上限年代は鎌倉よりも早い時期から搬入され、下限年代を推測する資料として鎌倉では最も多いはずの鎬蓮弁文碗類が数点しか出土しておらず、しかも白磁口元碗・皿類が皆無であったことは、本遺跡の舶載陶磁器の主体が概ね12世紀後半～13世紀前葉に位置付けられるものであろう。

最後になりましたが、舶載陶磁器の分類および年代観については、国立歴史民俗博物館小野正敏氏に御指導、御助言をいただき、常日頃より御指導をいただいている鎌倉考古学研究所の手塚直樹・馬淵和雄の両氏より貴重な御教示を賜った。各氏に文末を借りて厚く御礼申し上げます。

（原 廣志）

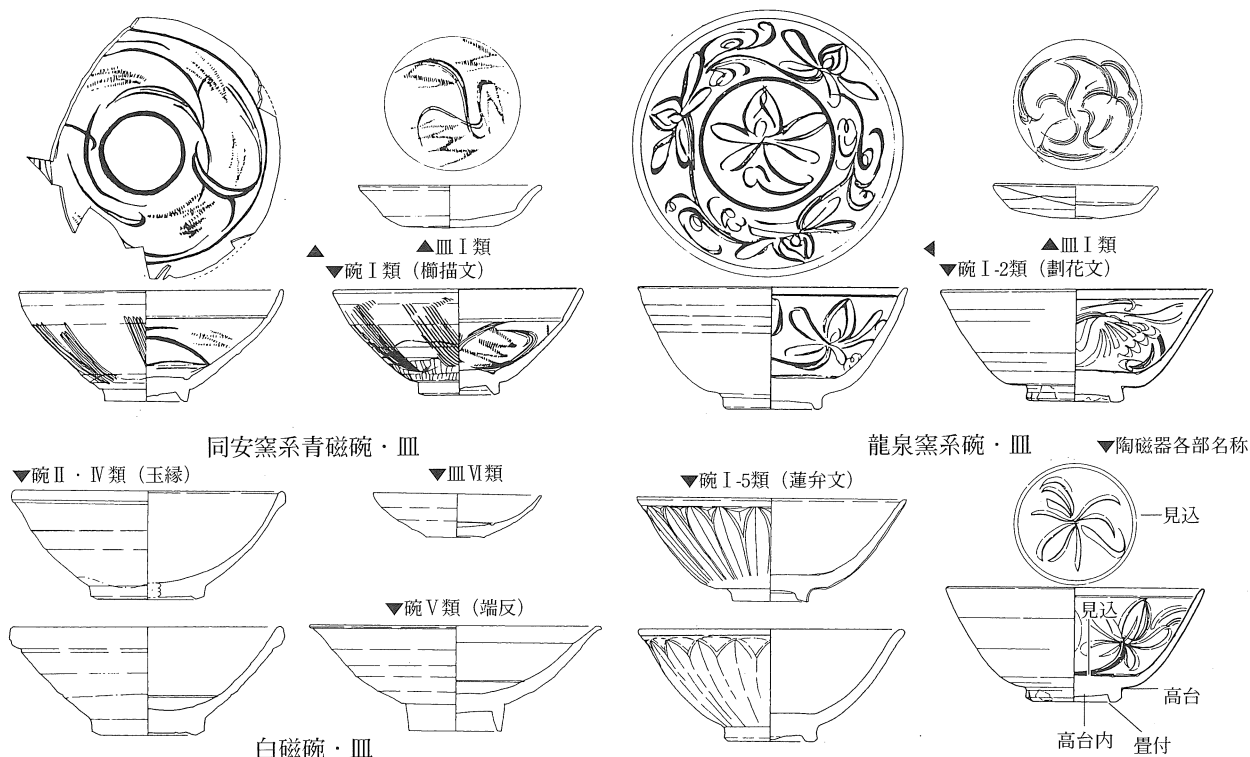


図27 碗・皿主型式参考図

[参考・引用文献]

- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
- 森田 勉 1981 「鎌倉出土の中国陶磁器に関して」『貿易陶磁研究』No.1 日本貿易陶磁研究会
- 鈴木重治・市村高規ほか 1982 「福田天神遺跡—国道2号太子・龍野バイパス建設工事に伴う発掘調査—」
『龍野市文化財調査報告書』Ⅳ 龍野市教育委員会
- 太宰府市教育委員会 1983 「大宰府条坊跡Ⅱ」『大宰府町の文化財』7
- 太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」『大宰府町の文化財』8
- 手塚直樹 1983 「鎌倉出土の輸入陶磁器」『佐久間重男先生退休記念中国史・陶磁史論集』
- 手塚直樹 1984 「鎌倉出土の陶磁器について」『貿易陶磁研究』No.4 日本貿易陶磁研究会
- 馬淵和雄ほか 1985 『一鎌倉市二階堂— 向荏柄遺跡発掘調査報告書』 鎌倉市教育委員会
- 服部実喜 1985 「関東地方出土の輸入陶磁器について」『神奈川考古』20 神奈川考古同人会
- 山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁」 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 長谷部楽爾・今井 敦 1995 「日本出土の中国陶磁」『中国の陶磁』⑫ 平凡社
- 展示会図録 1996 『蘇る鎌倉—遺跡発掘の成果と伝世の名品』根津美術館
- 菊川町教育委員会 1999 『静岡県指定史跡 横地城跡—総合調査報告書—』静岡県菊川町教育委員会

舶載陶磁器分類・観察表

図番号	出土地点	種 類	型 式	a.法量・部位 b.成形 c.文様 d.素地 e.釉薬 f.備考
1	包含層	青磁櫛描文碗	同安窯系碗Ⅰ類	a.口径14.7cm b.ロクロ c.内面劃花文・口縁下沈線、外面櫛描文 d.灰色やや粗胎、黒色微粒 e.淡黄緑色透明 f.12C中頃～後半
2	大溝2 ホー11	青磁櫛描文碗	同安窯系碗Ⅰ類	a.口径15.3cm b.ロクロ c.内面櫛描文・口縁下沈線、外面櫛描文 d.灰白色良胎 e.淡黄緑色透明、細かな貫入多 f.12C中頃～後半
3	祭祀土坑	青磁櫛描文碗	同安窯系碗Ⅰ類	a.体部 b.ロクロ c.内面劃花・点綴文・見込周囲沈線、外面櫛描文 d.灰白色良胎、緻密 e.淡黄灰色透明、体部下位～外底露胎 f.12C中頃～後半
4	包含層	青磁櫛描文碗	同安窯系碗Ⅰ類	a.口縁部 b.ロクロ c.内面櫛描・劃花文・口縁下沈線 d.淡黄白色焼成不良 e.淡黄灰色不透明、細かな貫入多 f.12C中頃～後半
5	大溝3	青磁櫛描文碗	同安窯系碗Ⅰ類	a.体部 b.ロクロ c.内面櫛描・点綴文、外面櫛描文 d.灰白色良胎、黒色微粒 e.淡灰緑色透明、貫入あり f.12C中頃～後半
6	包含層	青磁櫛描文碗	同安窯系碗Ⅰ類	a.体部 b.ロクロ c.内面劃花文、外面櫛描文・沈線 d.灰色精良胎 e.淡灰緑色透明、沈線以下露胎 f.12C中頃～後半
7	包含層 3・4区	青磁櫛描文碗	同安窯系碗Ⅰ類	a.体部 b.ロクロ c.内面櫛描文 d.灰白色良胎、緻密 e.淡黄灰色半透明、体部下位～外底露胎 f.12C中頃～後半
8	包含層 3・4区	青磁櫛描文碗	同安窯系碗Ⅰ類	a.体部 b.ロクロ c.内面点綴文、外面櫛描文 d.灰白色良胎、黒色微粒 e.灰緑色透明 f.12C中頃～後半
9	大溝2 ホー12	青磁櫛描文碗	同安窯系碗Ⅰ類	a.体部 b.ロクロ c.内面櫛描・点綴文、外面櫛描文 d.灰色良胎 e.淡灰色透明 f.12C中頃～後半
10	柱穴5	青磁櫛描文碗	同安窯系碗Ⅰ類	a.底径4.9cm b.ロクロ、削出高台 c.見込周囲沈線状 d.灰色良胎 e.灰緑色半透明、体部下位～外底露胎 f.12C中頃～後半
11	包含層 3・4区	青磁櫛描文碗	同安窯系碗Ⅰ類	a.底部 b.ロクロ、削出高台 c.内面劃花文、見込周囲沈線状 d.灰色良胎 e.淡黄緑色透明、体部下位～外底露胎 f.12C中頃～後半
12	包含層 3・4区	青磁劃花文碗	龍泉窯系碗Ⅰ-2類	a.口径14.8cm b.ロクロ c.内面劃花文、口縁下沈線 d.灰色良胎、黒色微粒 e.灰緑色半透明、小気泡 f.12C中頃～後半
13	包含層 3・4区	青磁劃花文碗	龍泉窯系碗Ⅰ-2類	a.口径15.4cm b.ロクロ c.内面劃花文、口縁下沈線 d.灰色良胎 e.淡灰緑色半透明、小気泡多し f.12C中頃～後半
14	包含層 3・4区	青磁劃花文碗	龍泉窯系碗Ⅰ-2類	a.口縁部 b.ロクロ c.内面劃花文、口縁下沈線 d.灰色やや粗胎、黒色微粒 e.淡灰緑色半透明、貫入多し f.12C中頃～後半
15	包含層 3・4区	青磁劃花文碗	龍泉窯系碗Ⅰ-2類	a.口縁部 b.ロクロ c.内面劃花文、口縁下沈線 d.灰白色粗胎 e.灰緑色不透明、小気泡多し f.12C中頃～後半
16	包含層 3・4区	青磁劃花文碗	龍泉窯系碗Ⅰ-2類	a.口縁部 b.ロクロ c.内面口縁下沈線 d.灰色やや粗胎、黒色微粒 e.灰白色不透明、二次焼成か表面白濁 f.12C中頃～後半
17	包含層 3・4区	青磁劃花文碗	龍泉窯系碗Ⅰ-2類	a.体部 b.ロクロ c.内面劃花文 d.灰色良胎、黒色微粒 e.灰緑透明、小気泡少ない f.12C中頃～後半
18	包含層	青磁劃花文碗	龍泉窯系碗Ⅰ-2類	a.体部 b.ロクロ c.内面劃花文 d.灰色やや粗胎、黒色微粒 e.灰緑色透明、貫入多し f.12C中頃～後半
19	包含層 3・4区	青磁劃花文碗	龍泉窯系碗Ⅰ-2類	a.口縁部 b.ロクロ c.内面劃花文 d.灰色良胎、黒色微粒 e.灰緑色半透明、小気泡多し f.12C中頃～後半
20	包含層 3・4区	青磁劃花文碗	龍泉窯系碗Ⅰ-2類	a.口縁部 b.ロクロ c.内面劃花文 d.灰色やや粗胎、黒色微粒 e.淡青緑色透明、貫入あり f.12C中頃～後半
21	包含層	青磁劃花文碗	龍泉窯系碗Ⅰ-2類	a.口縁部 b.ロクロ c.内面口縁下沈線 d.灰色やや粗胎、黒色微粒 e.青緑色半透明、小気泡多く貫入あり f.12C中頃～後半
22	包含層 3・4区	青磁劃花文碗	龍泉窯系碗Ⅰ-2類	a.高台径5.4cm b.ロクロ、削出高台 d.灰色やや粗胎、黒色微粒 e.淡灰緑色透明、貫入あり、畳付～高台内露胎 f.12C中頃～後半

図番号	出土地点	種 類	型 式	a.法量・部位 b.成形 c.文様 d.素地 e.釉薬 f.備考
23	包含層 1区	青磁劃 花文碗	龍泉窯系 碗Ⅰ-2類	a.底部 b.ロクロ、削出高台 c.見込劃花文 d.灰色やや良胎、黒色微粒 e.淡灰緑色半透明、畳付～高台内露胎 f.12C中頃～後半
24	包含層 1区、 3・4区	青磁劃 花文碗	龍泉窯系 碗Ⅰ-4類	a.体部～口縁部 b.ロクロ c.内面に口縁下と縦位分割の2条沈線飛雲文 d.灰色やや粗胎、黒色微粒多し e.淡緑黄色透明、粗い貫入 f.2点は同一固体だが接合不可、12C中頃～後半
25	包含層 3・4区	青磁劃 花文碗	龍泉窯系 碗Ⅰ-4類	a.体部 b.ロクロ c.内面縦位分割の2条沈線 d.灰色良胎、黒色微粒少 e.灰緑色不透明、二次焼成で表面白濁 f.12C中頃～後半
26	包含層 1区	青磁鎬蓮 弁文碗	龍泉窯系 碗Ⅰ-5類	a.口縁部 b.ロクロ c.外面に鎬蓮弁文を削出 d.灰色良胎、黒色微粒 e.緑灰色半透明、細かな貫入多し f.13C前～後半
27	包含層 3・4区	青磁鎬蓮 弁文碗	龍泉窯系 碗Ⅰ-5類	a.口縁部 b.ロクロ c.外面に鎬蓮弁文を削出 d.灰色良胎、黒色微粒 e.緑灰色半透明、小気泡多し f.13C前～後半
28	包含層 3・4区	青磁鎬蓮 弁文碗	龍泉窯系 碗Ⅰ-5類	a.口縁部 b.ロクロ c.外面に鎬蓮弁文 d.灰色やや粗胎、黒色微粒多し e.緑灰色半透明、細かな貫入多し f.13C前～後半
29	包含層 3・4区	青磁無文碗	龍泉窯系 碗Ⅰ-1類	a.口縁部 b.ロクロ c.無文 d.灰色良胎、やや緻密 e.緑白色不透明、二次焼成で表面白濁 f.13C前～後半
30	包含層 3・4区	青磁劃 花文皿	龍泉窯系 皿Ⅰ類	a.口縁部 b.ロクロ、体部中位～口縁外反 d.灰色良胎、黒色微粒やや緻密 e.淡灰緑色、二次焼成で白濁失透 f.12C中頃～後半
31	包含層	青磁劃 花文皿	龍泉窯系 皿Ⅰ類	a.口縁部 b.ロクロ、口縁外反 d.灰色やや良胎 e.淡灰緑色透明 f.12C中頃～後半
32	包含層 3・4区	青磁劃 花文皿	龍泉窯系 皿Ⅰ類	a.口縁部 b.ロクロ、体部中位～口縁外反 d.灰白色良胎 e.緑灰色透明、貫入多し f.12C中頃～後半
33	大溝1 イ-26	白磁玉縁碗	白磁碗 Ⅱ類	a.口径16.2cm b.ロクロ、口縁部小さな玉縁 d.灰白色やや粗胎 e.黄味灰白色半透明、細かな貫入多し f.12C前半
34	包含層 4区	白磁玉縁碗	白磁碗 Ⅱ類	a.高台径5.4cm b.ロクロ、やや低い削出し高台 d.灰白色やや粗胎 e.黄味灰白色半透明、体部下位～外底露胎 f.12C前半
35	大溝2 イ黒色土	白磁玉縁碗	白磁碗 Ⅱ類	a.口縁部 b.ロクロ、口縁部小さな玉縁 d.灰白色粗胎、やや粉質状 e.黄味灰白色半透明、表面白濁部分あり f.12C前半
36	大溝1 ロ-127	白磁玉縁碗	白磁碗 Ⅱ類	a.口径15.9cm b.ロクロ、口縁部大きな玉縁 d.灰白色良胎、緻密 e.緑味灰白色不透明、体部中位以下露胎 f.12C中頃～後半
37	大溝1 ロ-12	白磁玉縁碗	白磁碗 Ⅳ類	a.口径15.7cm b.ロクロ、口縁部大きな玉縁、体部中位以下薄い器壁 d.灰白色良胎、やや緻密 e.灰白色透明 f.12C中頃～後半
38	住居2 P-122	白磁玉縁碗	白磁碗 Ⅳ類	a.口径16.8cm b.ロクロ、口縁部大きな玉縁 d.灰白色粗胎、やや粉質状 e.黄味灰白色透明、細かな貫入多し f.12C中頃～後半
39	大溝3	白磁玉縁碗	白磁碗 Ⅳ類	a.口縁部 b.ロクロ、口縁部大きな玉縁 d.灰白色良胎、やや緻密 e.黄味灰白色半透明、貫入あり f.45と同一固体か、12C中頃～後半
40	大溝2 ロ炭層	白磁玉縁碗	白磁碗 Ⅳ類	a.口縁部 b.ロクロ、口縁部大きな玉縁、薄い器壁 d.灰白色やや粗胎 e.灰白色濁り不透明 f.12C中頃～後半
41	大溝2 イ-5	白磁玉縁碗	白磁碗 Ⅳ類	a.体部 b.ロクロ d.灰白色良胎、緻密 e.灰白色透明、体部中位以下露胎 f.12C中頃～後半
42	包含層 3・4区	白磁玉縁碗	白磁碗 Ⅳ類	a.体部 b.ロクロ、外面体部下位飛びカンナ痕 c.内面体部下位一条沈線 d.灰白色良胎、やや緻密 e.灰白色不透明 f.12C中頃～後半
43	大溝2 ロ-5	白磁玉縁碗	白磁碗 Ⅳ類	a.高台径6.6cm b.ロクロ、外面体部下位飛びカンナ痕、低い削出し高台 c.内面体部下位一条沈線 d.黄味灰白色粗胎、粉質状 e.灰白色不透明、白濁し貫入多し、体部下位～外底露胎 f.12C中頃～後半

図番号	出土地点	種 類	型 式	a.法量・部位 b.成形 c.文様 d.素地 e.釉薬 f.備考
44	包含層	白磁玉縁碗	白磁碗 Ⅳ類	a.高台径6.2cm b.ロクロ、外面体部下位飛びカンナ痕、低い削出し高台 c.内面体部下位一条沈線 d.灰白色良胎、やや緻密 e.黄味灰白色透明、貫入あり、体部中位～外底露胎 f.12C中頃～後半
45	包含層 3・4区	白磁玉縁碗	白磁碗 Ⅳ類	a.底部 b.ロクロ d.灰色良胎、やや緻密 e.灰白色濁り不透明 外底露胎 f.12C中頃～後半
46	包含層 3・4区	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.口径15.0cm b.ロクロ、口縁端外方へ反る c.内面体部下位一条沈線 d.灰白色やや粗胎 e.黄味灰白色不透明、細かな貫入多し f.12C後半～13C初頭
47	大溝2 ホー41	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.口径15.1cm b.ロクロ、口縁端外方へ反る c.内面口縁下一条沈線 d.灰白色良胎、やや緻密 e.灰白色半透明、ピンホールあり f.12C後半～13C初頭
48	大溝2 ホー19	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.口径15.5cm b.ロクロ、口縁端外方へ反る c.内面口縁下一条沈線 d.灰白色やや粗胎 e.黄味灰白色不透明、細かな貫入多し f.12C後半～13C初頭
49	包含層 3・4区	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.口縁部 b.ロクロ、口縁端外方へ反る d.灰白色やや粗胎 e.灰白色半透明 f.12C後半～13C初頭
50	包含層 3・4区	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.口縁部 b.ロクロ、口縁端外方へ反る d.灰白色良胎、緻密 e.灰白色透明 f.12C後半～13C初頭
51	大溝2ロ ー11、大 溝3炭層	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.体部 b.ロクロ c.内面体部下位一条沈線 d.灰色良胎、やや緻密 e.灰色不透明、ピンホールあり、外面体部下位以下露胎 f.12C後半～13C初頭
52	大溝1、 2	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.口縁部～体部 b.ロクロ、口縁端部外反 d.灰色やや粗胎 e.黄味灰白色透明 f.12C後半～13C初頭
53	包含層 3・4区	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.口縁～体部 b.ロクロ、口縁部外反気味 c.内面体部中位弱い一条沈線 d.灰白色緻密 e.緑味灰白色不透明、気泡多し f.12C後半～13C初頭
54	大溝2 イー21	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.口縁部 b.ロクロ、口縁部外反気味 d.灰色やや粗胎 e.緑味灰白色透明 f.12C後半～13C初頭
55	大溝2 ロー17	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.体部 b.ロクロ c.内面口縁下・体部下位に一条沈線 d.灰白色やや粗胎 e.青味灰白色濁り不透明、ピンホールあり f.12C後半～13C初頭
56	大溝2 ハー11	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.体部 b.ロクロ d.灰色良胎、緻密 e.灰白色半透明 f.12C後半～13C初頭
57	包含層 3・4区	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.体部 b.ロクロ c.内面体部下位一条沈線 d.灰白色良胎、緻密 e.灰白色不透明 f.12C後半～13C初頭
58	包含層 3・4区	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.体部 b.ロクロ c.内面口縁下一条沈線 d.灰白色良胎、緻密 e.緑味灰白色不透明 f.12C後半～13C初頭
59	大溝1 イー15	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.体部 b.ロクロ d.灰白色やや粗胎 e.黄味灰白色透明 f.12C後半～13C初頭
60	大溝2 ハ	白磁端反碗	白磁碗 Ⅴ類	a.体部 b.ロクロ c.無文 d.灰色粗胎 e.灰白色不透明、ピンホール多し f.12C後半～13C初頭
61	住居2 十字ベルト	白磁碗	白磁碗 Ⅷ類	a.口径15.0cm b.ロクロ、口縁部直線気味 c.内面口縁下一条沈線 d.灰色良胎、緻密 e.緑味灰白色半透明、体部中位以下露胎、ピンホールあり f.12C後半～13C初頭

図番号	出土地点	種 類	型 式	a.法量・部位 b.成形 c.文様 d.素地 e.釉薬 f.備考
62	大溝1 イ-7	白磁碗	白磁碗 Ⅷ類	a.口縁部 b.ロクロ c.内面口縁下一条沈線 d.灰白色良胎、やや粉質状で焼成不良か e.緑味灰白色濁り不透明 f.12C後半～13C初頭
63	包含層 北トレ	白磁碗	白磁碗 Ⅷ類	a.体部 b.ロクロ c.内面口縁下一条沈線 d.灰白色良胎、やや緻密 e.黄味灰白色透明、体部中位以下露胎 f.12C後半
64	包含層 3・4区	白磁皿	白磁皿 Ⅵ類	a.底径3.8cm b.ロクロ c.内面劃花文風のへら描き文様 d.灰色良胎、緻密 e.青味白色透明、小気泡多し、外底～基底部付近掻き落し露胎 f.12C中頃～後半
65	大溝1 イ-3	白磁皿	白磁皿 Ⅵ類	a.底径4.0cm b.ロクロ c.内面劃花文風の線描き文様 d.黄白色良胎、やや粉質状 e.黄味灰白色半透明、細かな貫入多し f.高台内に不鮮明な墨書痕跡あり、12C中頃～後半
66	柱穴T	白磁皿	白磁皿 Ⅵ類	a.底径3.4cm b.ロクロ、見込周囲に沈線状の段あり c.見込線描文らしきものあり d.灰白色良胎、緻密 e.黄味灰白色濁り不透明、体部下位～外底露胎 f.高台内に不鮮明な墨書痕跡あり、12C中～後半
67	大溝2 ハ下層	白磁皿	白磁皿 Ⅵ類	a.底径3.5cm b.ロクロ、体部中位に沈線状の段あり d.灰白色良胎、緻密 e.黄味灰白色半透明、部分的に白濁、体部下位～外底露胎 f.12C中頃～後半
68	大溝2 ホ-12	白磁皿	白磁皿 Ⅵ類	a.口径10.9cm b.ロクロ、口縁部外反気味、体部中位に沈線状の段あり d.灰白色良胎、緻密 e.灰白色濁り不透明、ピンホールあり、内外面体部下位以下露胎 f.12C中頃～後半
69	大溝2 ロ炭層	白磁皿	白磁皿 Ⅵ類	a.底径3.6cm b.ロクロ c.見込線描文あり d.灰白色良胎、やや粉質状 e.黄味灰白色半透明、貫入多し、外底露胎 f.12C中頃～後半
70	大溝3 炭層	白磁皿	白磁皿 Ⅵ類	a.口縁部 b.ロクロ、体部中位～口縁外反気味 d.灰白色粗胎、気孔多い e.灰白色濁り不透明、ピンホール多し f.12C中頃～後半
71	大溝2 ハ黒色土	白磁皿	白磁皿 Ⅵ類	a.口縁部 b.ロクロ、口縁内湾気味、口縁下沈線状の段あり d.灰白色良胎やや粉質状 e.黄味灰白色半透明、細かな貫入多し f.12C中頃～後半
72	大溝2 ホ-21	白磁皿	白磁皿 Ⅵ類	a.口縁部 b.ロクロ、口縁内湾気味 d.白色良胎、緻密 e.灰白色透明、小気泡多し f.12C中頃～後半
73	柱穴K	白磁皿	白磁皿 Ⅵ類	a.体部 b.ロクロ d.灰白色良胎、緻密 e.黄味白色不透明 f.12C中頃～後半
74	大溝2 ホ-13	白磁皿	白磁皿 Ⅴ類か	a.口径10.8cm b.ロクロ、端反碗様に口縁端外方へ反る d.白色良胎、緻密 e.青味白色透明 f.12C前半
75	包含層 3区	青白磁櫛描 劃花文碗	青白磁碗	a.底径4.8cm b.ロクロ、低い削出し高台 c.見込櫛描・劃花文と周囲一条沈線 d.白色良胎、緻密 e.緑味白色透明、粗密貫入多し、畳付～外底露胎 f.高台内に薄れているが「一」と覚しき墨書痕あり f.12C中頃～後半か
76	包含層 3区	青白磁櫛描 劃花文碗	青白磁碗	a.体部下位 b.ロクロ c.内面櫛描・劃花文 d.白色良胎、緻密、劃花文碗 e.青味白色透明、粗密貫入多し f.12C中頃～後半か
77	包含層	青白磁合子	青白磁 合子蓋	a.蓋部上面 b.型作り c.上面に不明瞭ながら蓮花唐草文風の型捺し文様あり d.白色良胎、緻密 e.青味白色濁り不透明 f.12C後半～13C前半

表1 舶載陶磁器の型式別出土点数

個体数77…(破片数88点)

青 磁	小計	I-4類(劃花文)	2	白 磁	小計	V類(平底)	10
同安窯系		I-5類(蓮弁文)	3	碗Ⅱ類(玉縁)	3	合 計	42
碗Ⅱ類(櫛描文)	11	龍泉窯系		Ⅳ類(玉縁)	10	青 白 磁	小計
龍泉窯系		ⅢⅠ類(劃花文系)	3	V類(端反)	15	碗(櫛描・劃花文)	2
碗Ⅰ-1類(無文)	1	合 計	32	Ⅷ類(直口)	3	合子	1
I-2類(劃花文)	12			ⅢⅤ類(平底端反)	1	合 計	3

表2 舶載陶磁器の種類別点数

器種 種類	碗	Ⅲ	合子	計
青 磁	29	3	0	32
白 磁	31	11	0	42
青白磁	2	0	1	3
合 計	62	14	1	77

表3 碗・Ⅲ類の種類別百分比(個体数77点)

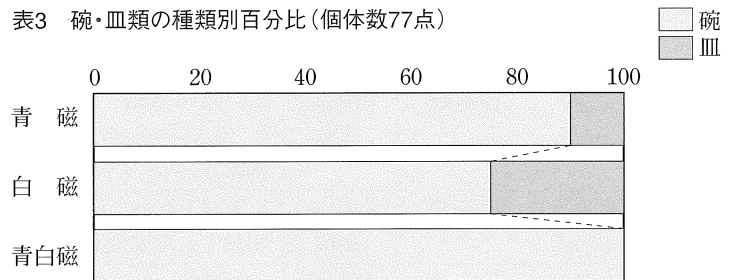


表4 青磁碗型式別百分比(個体数29点)

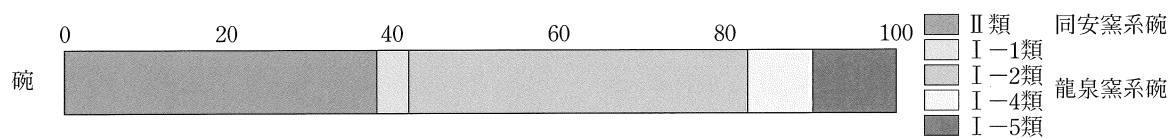
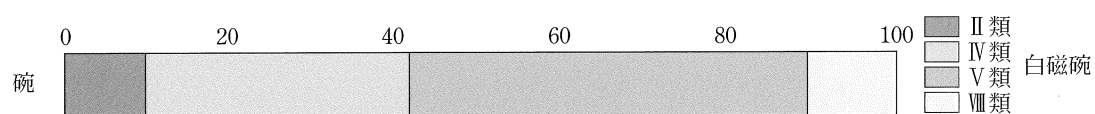


表5 白磁碗型式別百分比(個体数31点)



輪花碗

39～53は、渥美・湖西窯産で、輪花の作り出しは、篋押さえと指押さえがみられ、施釉は漬け掛け灰釉技法である。残存率が低い個体が多く輪花と施釉の方向が分かる程の破片が少ないため、はっきりしたことは言えないが4方向と思われるものが含まれる。時期については、39～52がⅠ期段階と思われ、53はⅡ期段階と思われる。54は尾張型で、4型式のものである。

山茶碗

渥美・湖西型が大半を占め、残りは尾張型、東遠型、東濃型の順で出土している。55～73は渥美・湖西窯産で、55～58は高台が比較的高く体部が内湾、もしくは直線的で口縁部が外反するもので、Ⅰ期－1段階と思われる。59～64は高台が潰れたように低くなり、口縁部の外反が弱くなり、Ⅰ期－2段階と思われる。65～66・71は高台が潰れ、口縁部の外反が鈍いことから、Ⅱ期段階と思われる。67～70は底部で全てⅠ期段階と思われる。72は高台がさらに潰れ、器壁も厚くなり、口縁部の外反も鈍いことから、Ⅲ期－1段階と思われる。73は高台が無いもので、Ⅲ期－2段階のものと思われる。74～83は尾張型の知多（常滑）・猿投窯産で、6～7型式である。84～86は東遠型で、色調は須恵器のような灰青色をし、器壁は薄手に作られ、体部は丸味を帯び、三角形の高台を有する。

墨書土器

墨書土器は、山茶碗、輪花碗、小碗、小皿に限定され、39点分が確認できた。産地は渥美・湖西窯産が34点、知多（常滑）・猿投窯産が4点、東濃型が1点である。時期については、Ⅰ期段階からⅢ期－2段階までみられる。墨書の部位は100の小碗体部に書かれたものを除き、残りはすべて底部外面で、その内容は、文字、数字、記号、まじないに伴うものがみられた。文字は5・6・25・37「大」、3「そ」？、14「の」、17「ち」、16「しお」、数字は35「一」、13「七」、33「九」、記号は○×が多く、8は丸？、1は二重丸？、11・12は三重丸、7は四重丸、2・4・15・19・28・29・32が「×」で、十の字の可能性も考えたが、筆の運びから全て×の字にした。まじないに伴うものは、9が九字の一部と思われる。10は、ヒト？の目から涙を流している絵が描かれており、その左下に漢字で「律□」と書かれていた。律の字は容易に判読できたが、令の字は薄く読みにくいがへという筆の運びが読み取れるので「急々如律令」を省略したものと理解した。

耳皿

87は尾張型で、口縁部を指で押さえ耳を作り出している。4型式でも古手のものであろう。

小碗

88は尾張型で4型式に位置付けられる。89～100は渥美・湖西窯産で体部は内湾し口縁部が外反気味のもの、体部から口縁部にかけて直線的なものがみられる。口径は7.6cm～9.45cm、器高は2.35cm～3.0cmで、すべてⅠ期－2段階のものと思われる。

小皿

101～151は渥美・湖西窯産で、102～108は体部が内湾するもので、口径は7.4cm～9.2cm、器高は2.1cm～2.8cm、101・109～137は体部が直線的なもので、口径は7.7cm～9.0cm、器高は2.1cm～3.1cmで、時期的にはⅡ期段階のものと思われる。138～151は全般的に扁平化している。口径は7.8cm～9.4cm、器高は1.6cm～2.3cmで、Ⅲ期－1段階のものと思われる。152～162は知多（常滑）・猿投窯産で口縁端部を平らに仕上げているものがみられる。6型式のものと思われる。

瓦器碗

163～165は畿内産の瓦器碗で楠葉型である。出土場所は全て大溝2からで、破片数としては7点出土し、個体数としては3点である。163は緩やかに内湾する体部で口縁部は直立気味で、器壁は薄く、

内面の口縁端部付近に沈線が巡る。体部の内外面に、棒状のヘラミガキによる暗文が認められ、体部外面の上半部に隙間の目立つヘラミガキ、内面には比較的密な圈線ミガキが施される。見込みに楕円状の暗文の一部が認められる。164は形態的特徴が163に近似し、調整は体部外面に間隔をあけた粗雑なヘラミガキ、内面は163に比べて隙間が目立つ圈線ミガキが施されている。165も形態的特徴は163に近似し、調整は体部外面に粗雑なヘラミガキがわずかにみられる。内面は比較的密な圈線ミガキが施されている。3点共、一型式の中に収まるものと思われる。時期的には12世紀後半のものであろう。

土師質の碗

166は土師質の碗で口縁部を外反させている。口径は16.0cmを測る。

かわらけ

167～186はロクロ成形のかわらけである。187～198は手づくね、型押しによる非ロクロ成形のかわらけである。

小型鍋

199は小型鍋で口縁部はやや開き気味に立ちあがる。口径は8.4cmを測る。

羽釜

200は口縁部が内傾し、端部は欠損している。鏝部の端部は角張り、断面が長方形である。201は口縁部が内傾し、端部を内側に小さく折り曲げて、端面を有する。これらの羽釜は、13世紀に比定される。

伊勢型鍋

202～208は伊勢型鍋で、口縁部は短く少し外反し、口縁端部は丸く肥厚し内側に折り返して直立する段を有するものや、口縁部は外反し、口縁端部の折り返しの幅が広くなり内側が窪んだものなどもみられる。南伊勢系鍋が成立する以前の（仮）A段階から、成立した第1段階までのものがみられる。時期的には、およそ12世紀中葉から13世紀前半であろう。

常滑産の陶器

209は片口碗で5型式平行のものである。210は片口鉢で、三角形の高台をつけ、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部を肥厚させる。211～212はこね鉢で、211は高台がハの字になり、体部は直線的で、口縁端部を肥厚させ沈線がみられる。213は壺で口縁端部を外側に折り返している。215～218は甕の破片で押印文が施されている。

渥美産の陶器

219・224は壺で、219は口縁端部を外反させ、丸く収めている。220～223は広口瓶で口縁を受口状にしている。225～227は甕の口縁部である。228～229は甕の体部の破片で押印文が施されている。230は器種不明だが取手の部分と思われる。231はこね鉢の底部で、高台は断面が台形で靱痕がみられる。

石製品

石製品としては、232～241の砥石が出土している。すべて凝灰岩である。小型の大きさの232～238・240・241、中型の大きさで柱状の239は、祭祀土坑から出土しており、表面に火を受けている痕跡がみられた。

古銭

242～246は古銭である。古銭の種類・枚数では、古い順から、242の開元通寶（初鑄年621年）1枚、243の至道元寶（初鑄年995年）1枚、244の皇宋通寶（初鑄年1038年）1枚、245の治平通寶（初鑄年

1064年) 1 枚、246の熙寧元寶(初鑄年1068年) 1 枚の 6 種類・各 1 枚で合計 6 枚みられた。243・244・246は調査区南側柱穴群の柱穴 5・6・23・31周辺の包含層から出土した。それらの建物に伴うものと思われる。

塚本和弘氏によって、出土土器が集計されている。それによると、山茶碗類の破片数が7419点で、89%で約 9 割を占めている。残りの約1割を土師質土器類の破片数が547点で 6 %、常滑産の陶器の破片数が172点で 2 %、渥美・湖西産の破片数が138点で1.7%、中国産舶載陶磁器の破片数が88点で 1.1%、その他の項目の瓦器は破片数が 7 点で0.2%で占められていた。

文末になりましたが、特に塚本和弘氏には委細にわたって、御指導、御教示下さいまして誠にありがとうございました。懇切丁寧に教えていただいたにもかかわらず、筆者の力量不足でほとんど生かすことができませんでした。深くお詫び申し上げます。

(木曾昌司)

[参考・引用文献]

- 袋井市教育委員会 1995『坂尻遺跡 一遺物・総括編一』
菊川町教育委員会 1995『横地城南遺跡群発掘調査報告書』
菊川町教育委員会 1999『林光寺遺跡発掘調査報告書』
松井一明 1993「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25 静岡県考古学会
藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第 3 号 三重県埋蔵文化財センター
伊藤裕偉 1990「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol. 1
伊藤裕偉 1992「中世南伊勢系の土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要』第 1 号 三重県埋蔵文化財センター

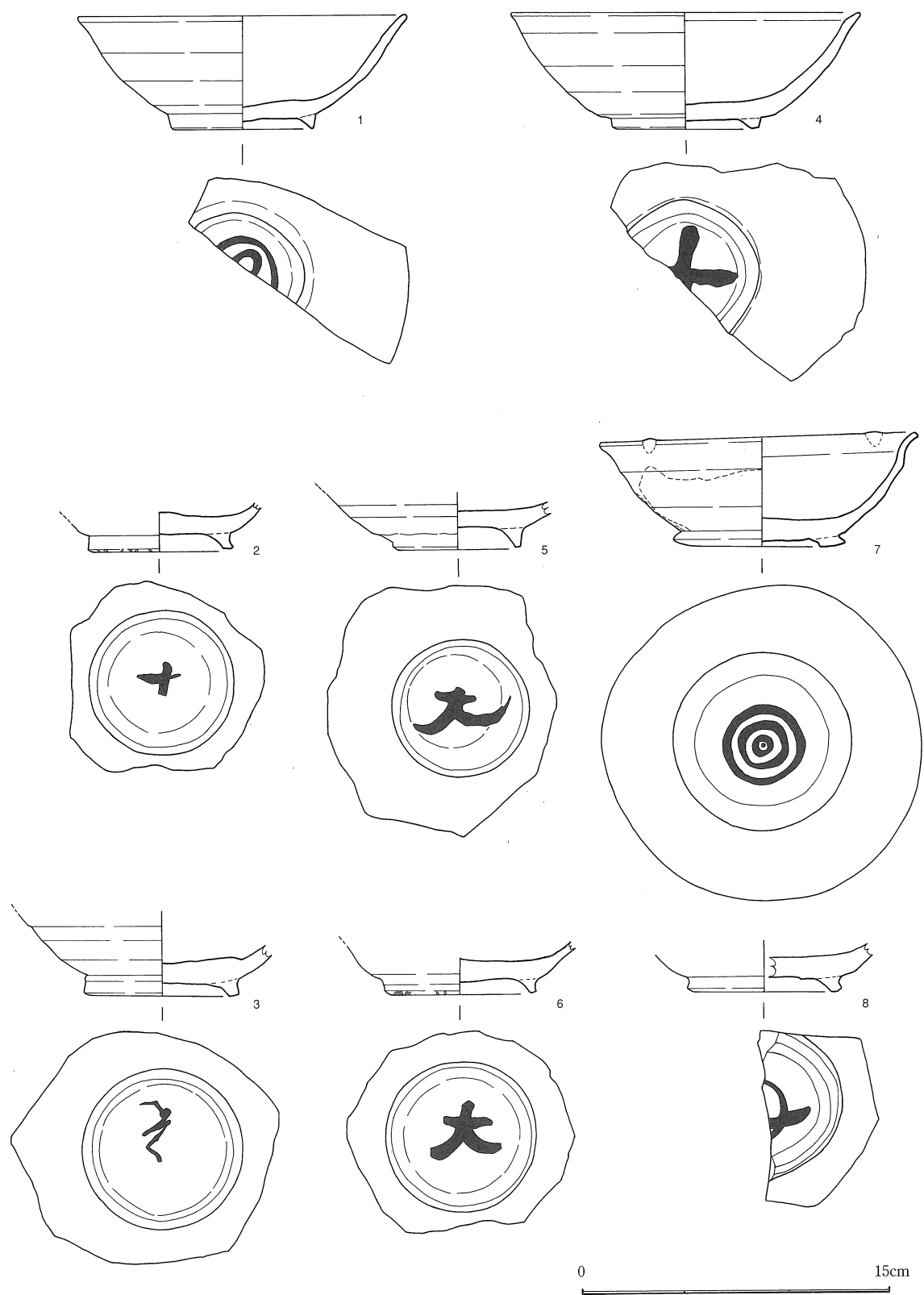


図28 中島遺跡出土遺物3（墨書土器）

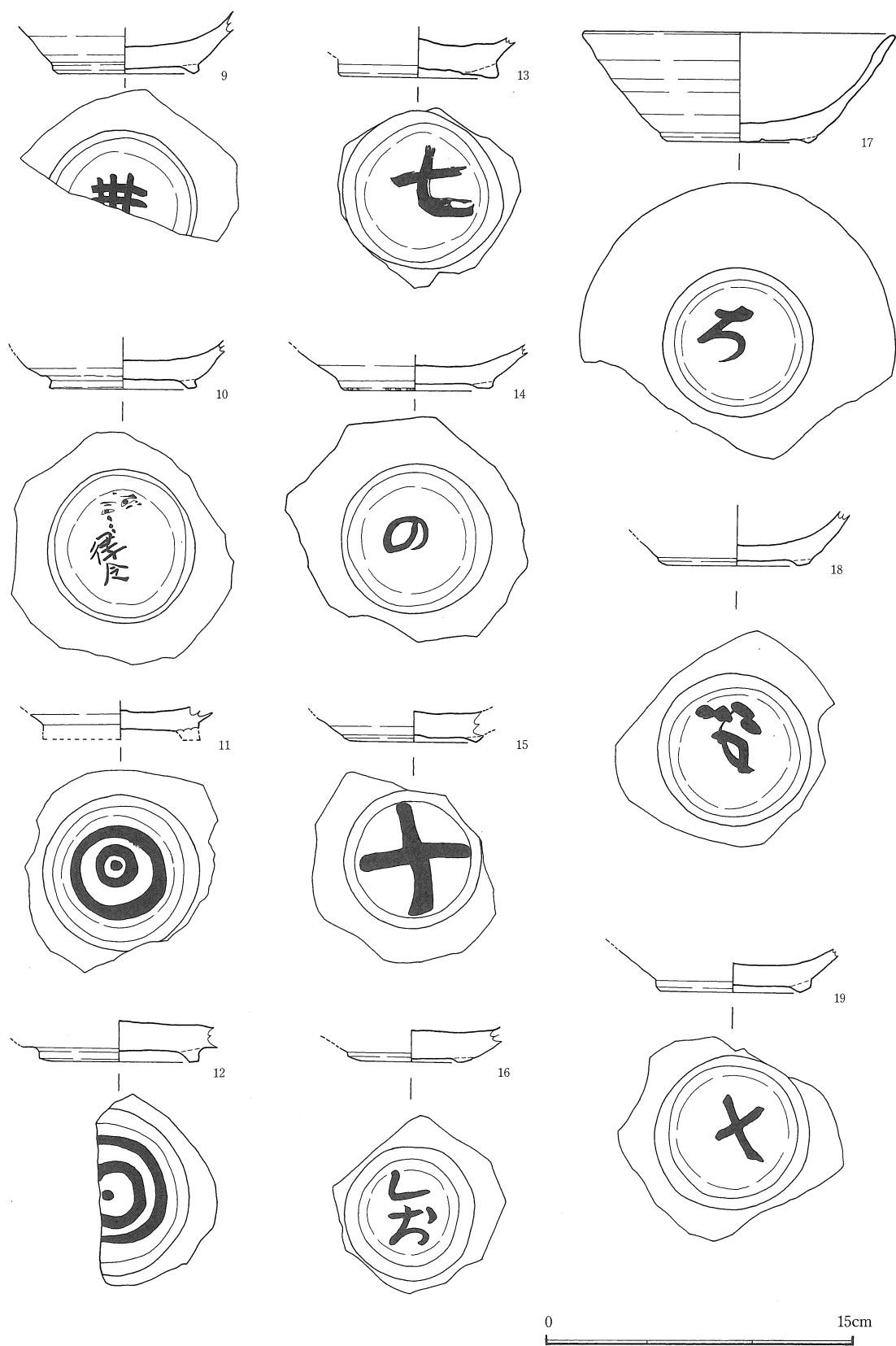


図29 中島遺跡出土遺物4（墨書土器）

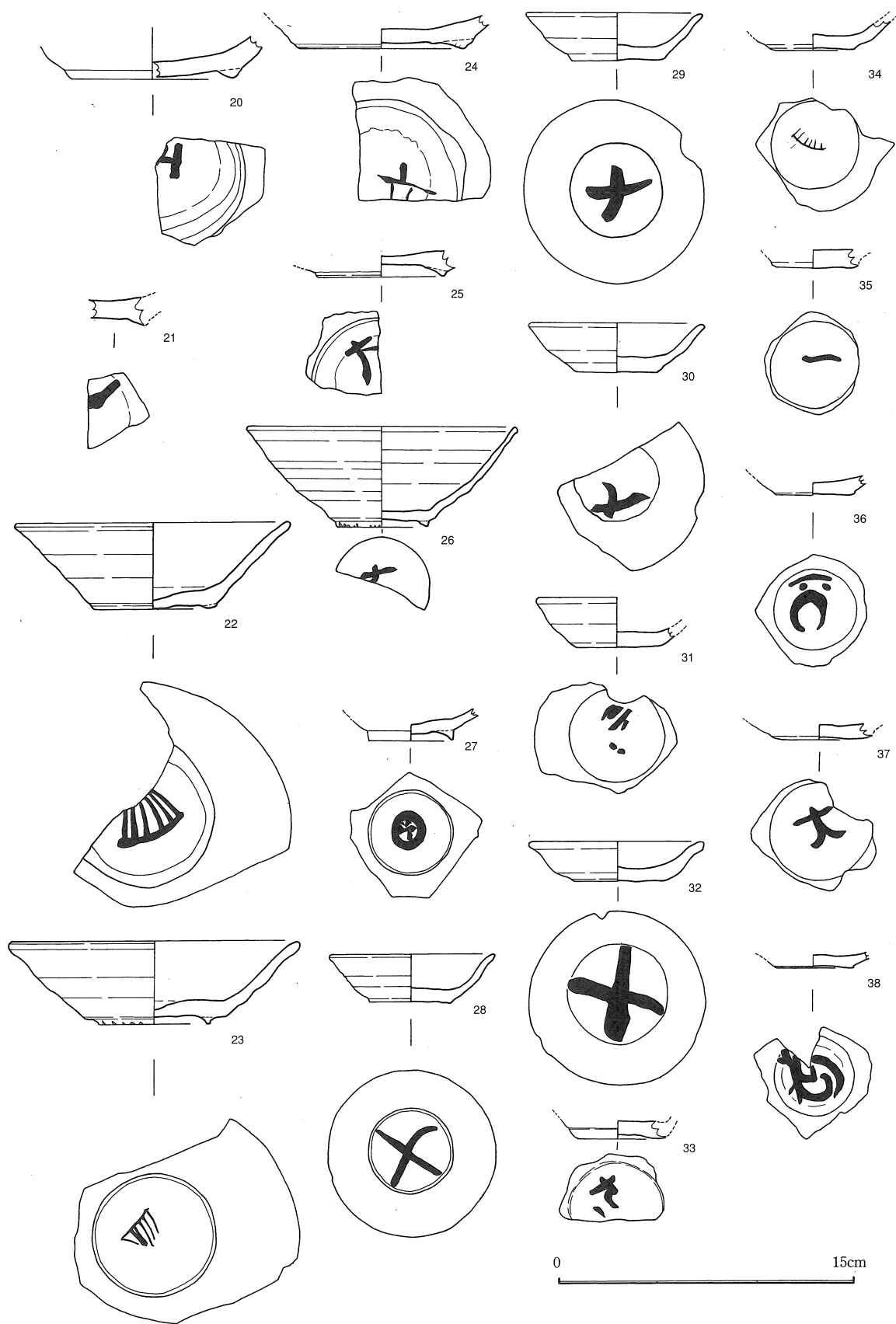


図30 中島遺跡出土遺物5（墨書土器）

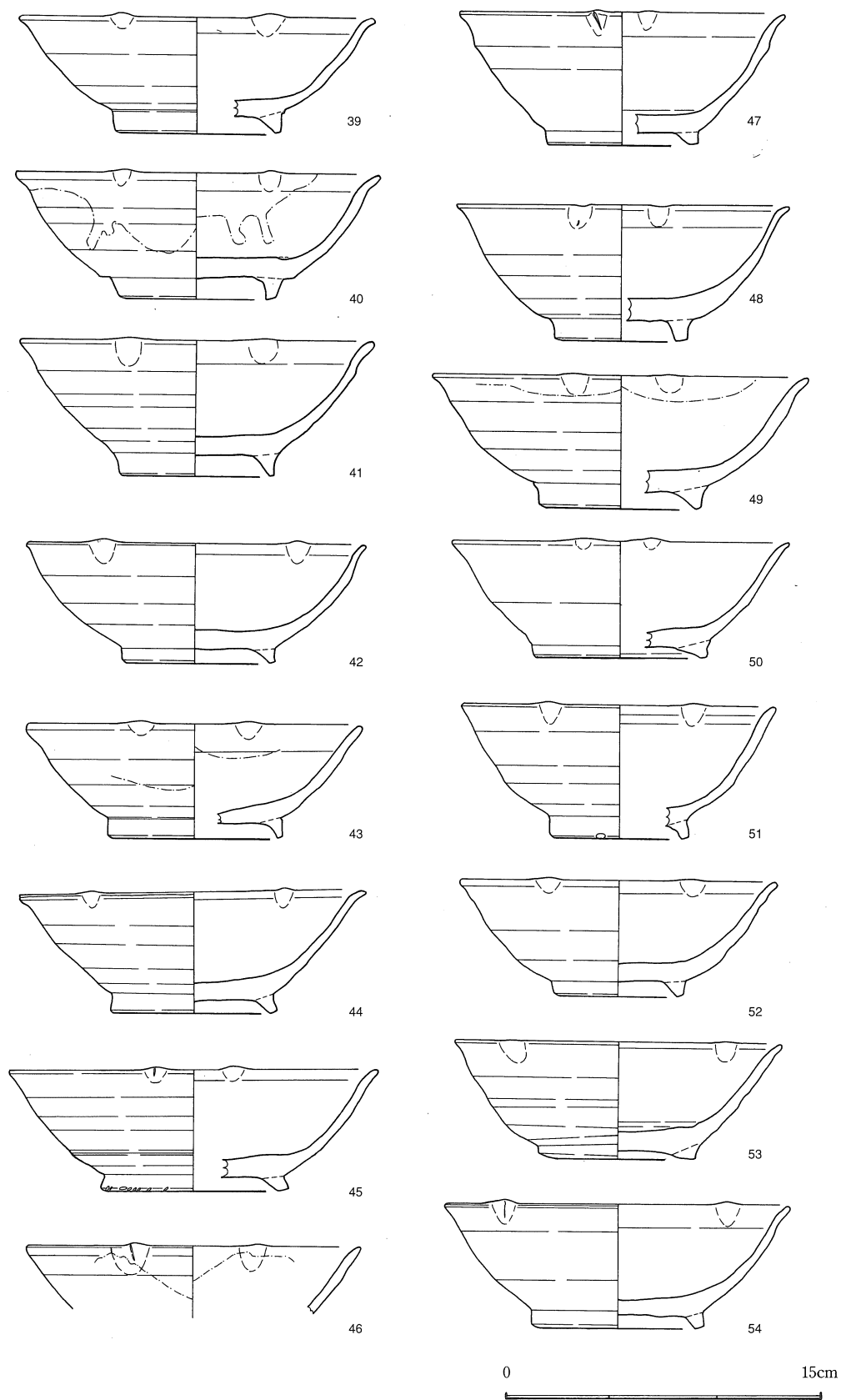


図31 中島遺跡出土遺物6 (山茶碗)

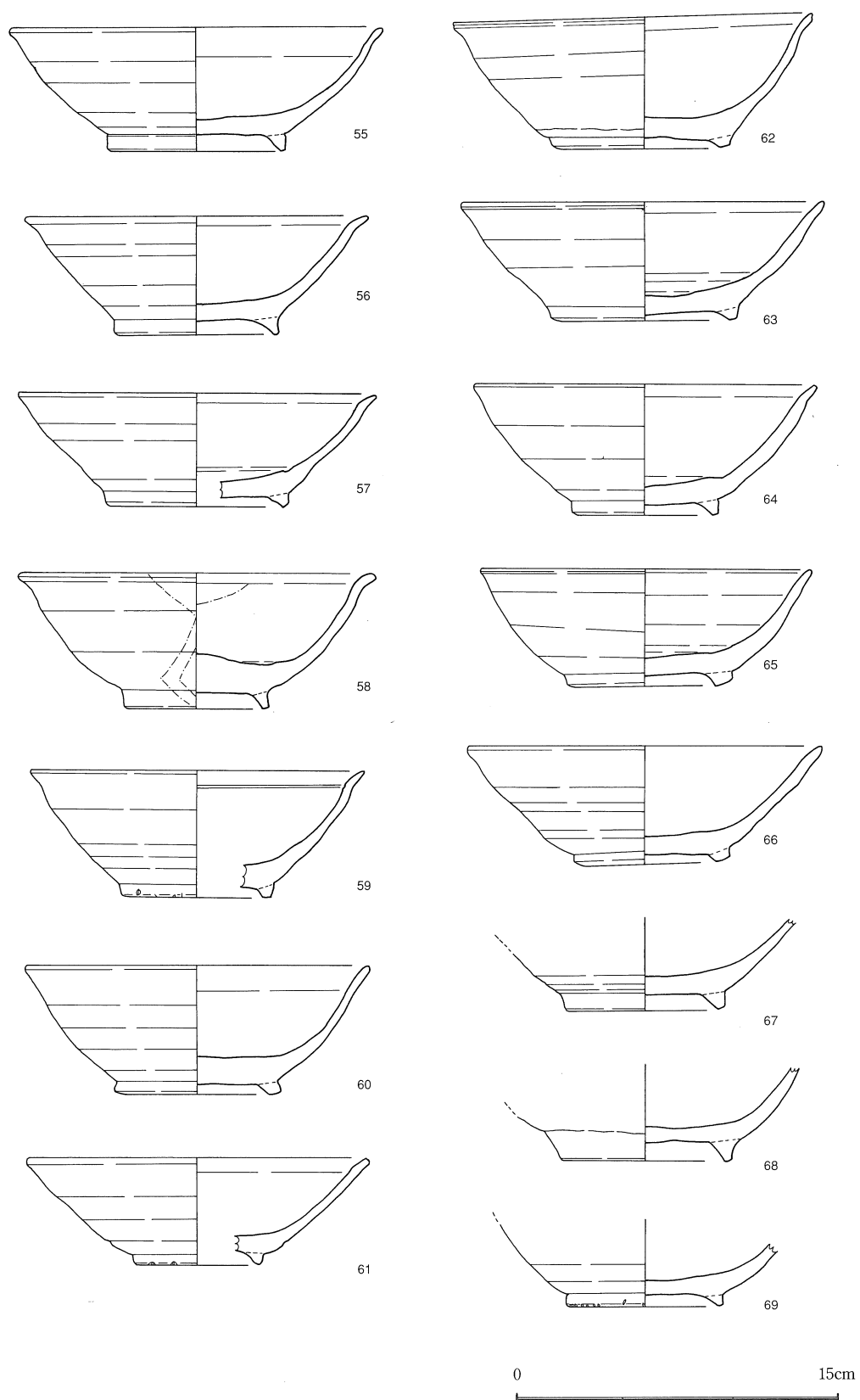


図32 中島遺跡出土遺物7 (山茶碗)

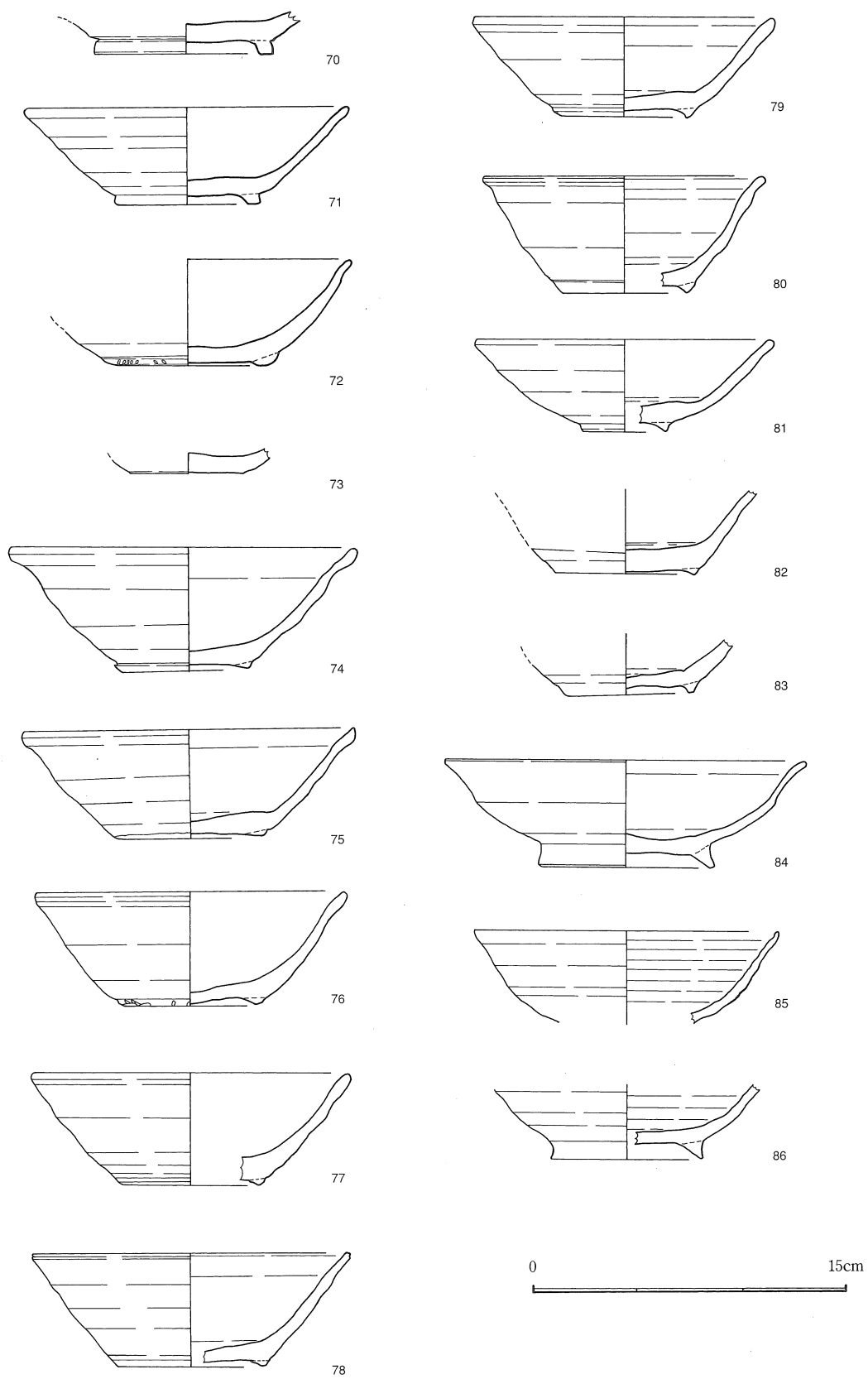


図33 中島遺跡出土遺物8 (山茶碗)

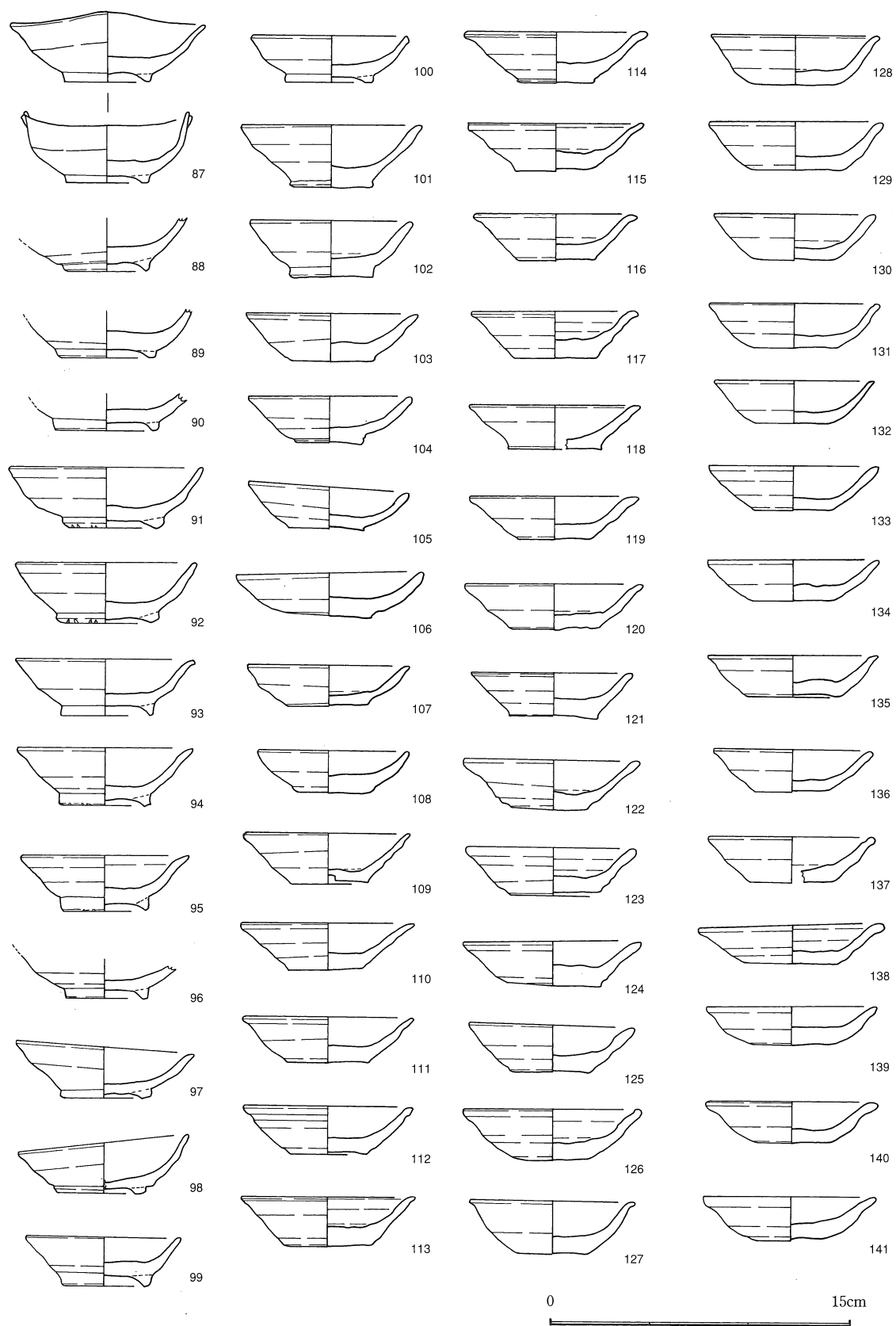


図34 中島遺跡出土遺物9 (小碗・小皿)

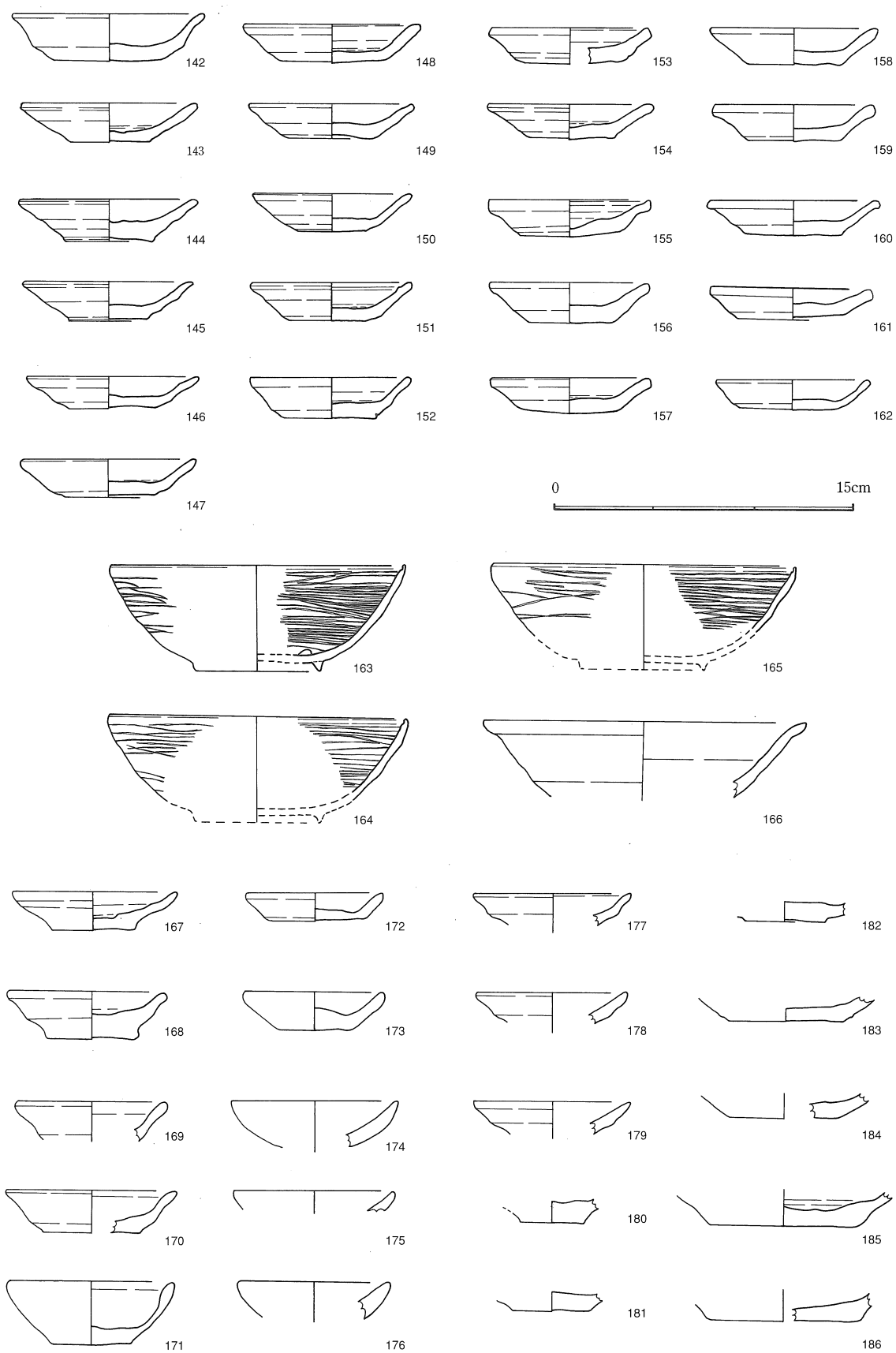


図35 中島遺跡出土遺物10 (小皿・瓦器碗・かわらけ)

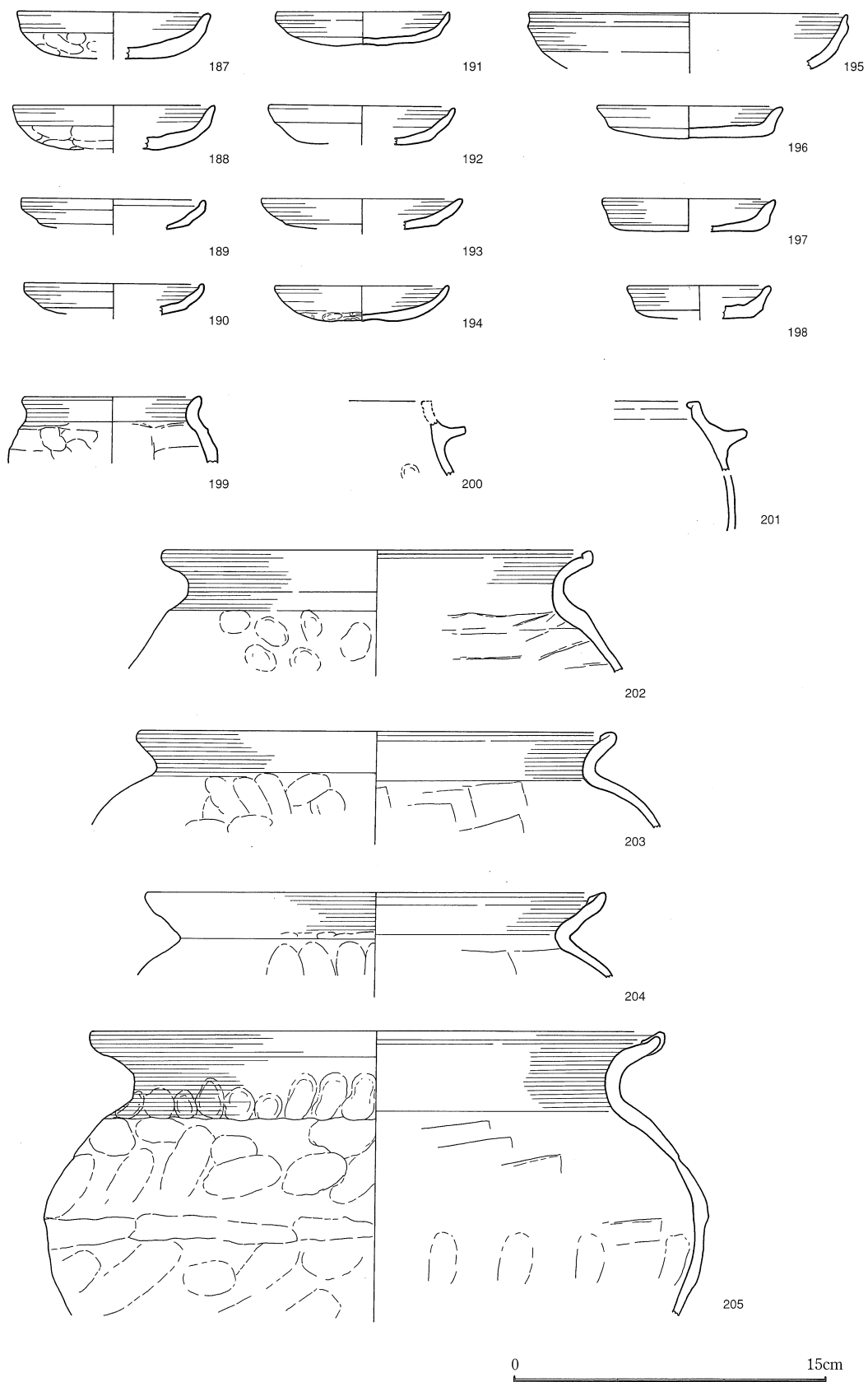


図36 中島遺跡出土遺物11（かわらけ・小型鍋・伊勢型鍋）

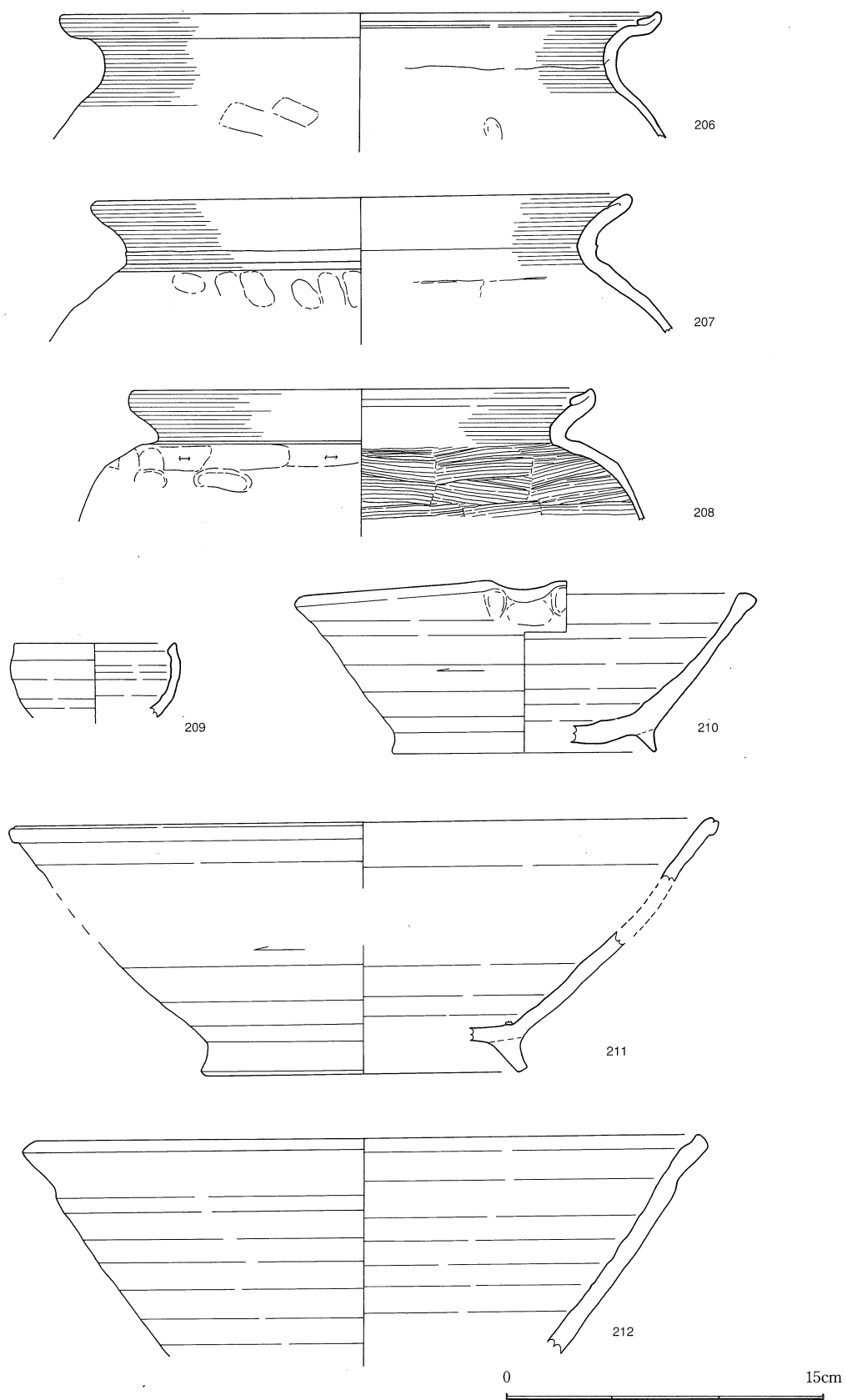


図37 中島遺跡出土遺物12 (伊勢型鍋・常滑)

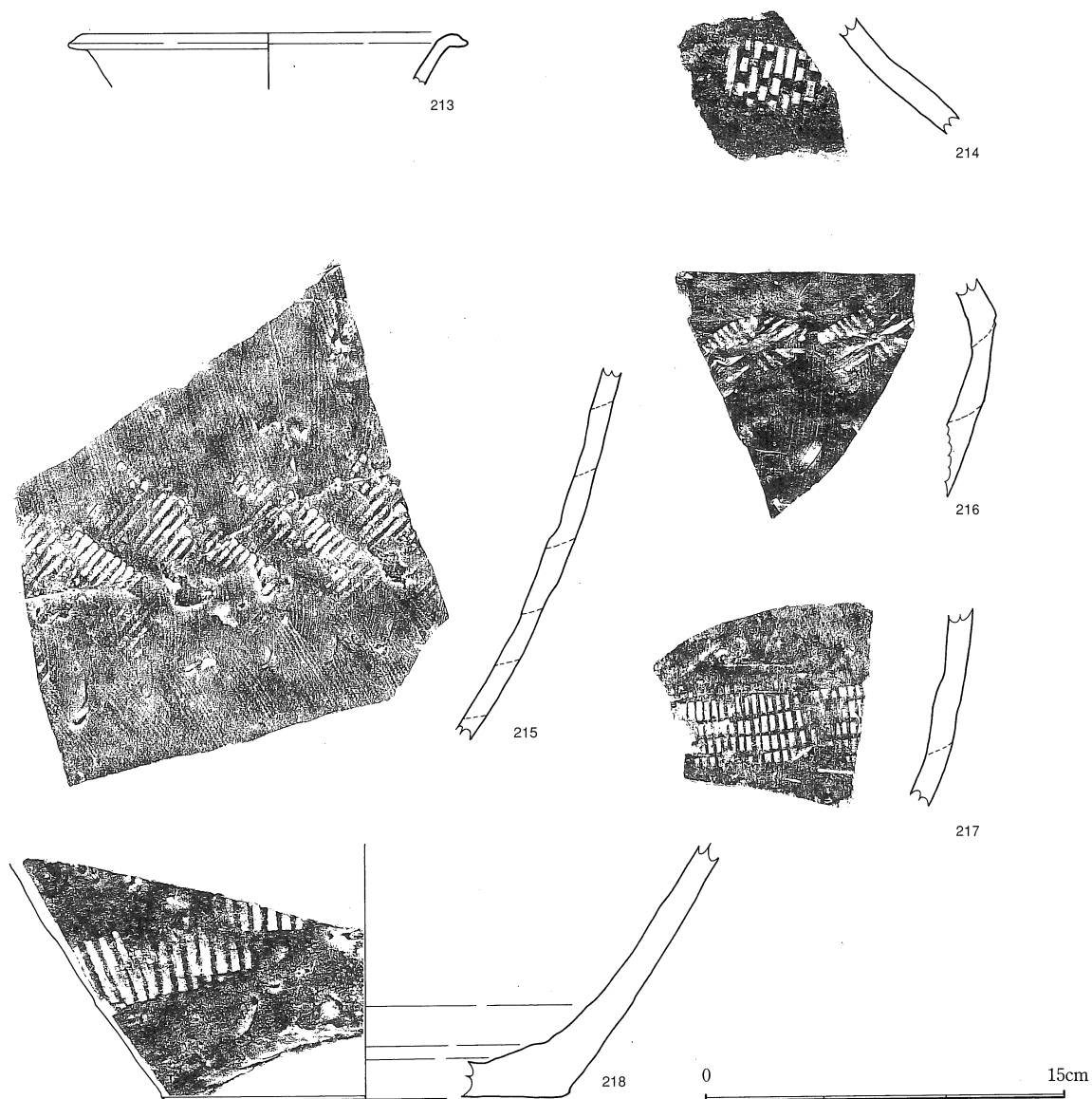


図38 中島遺跡出土遺物13 (常滑)

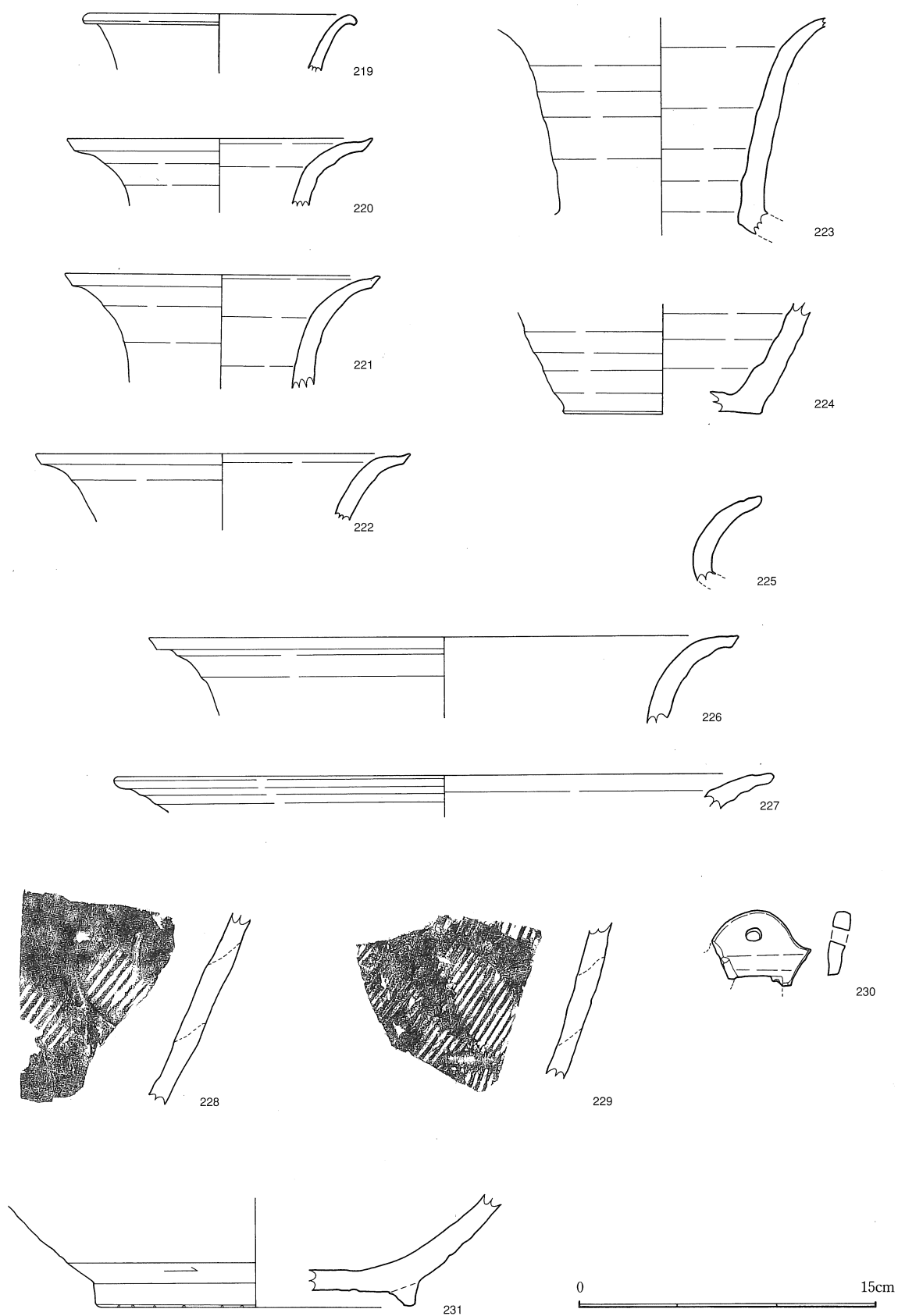


図39 中島遺跡出土遺物14（渥美）

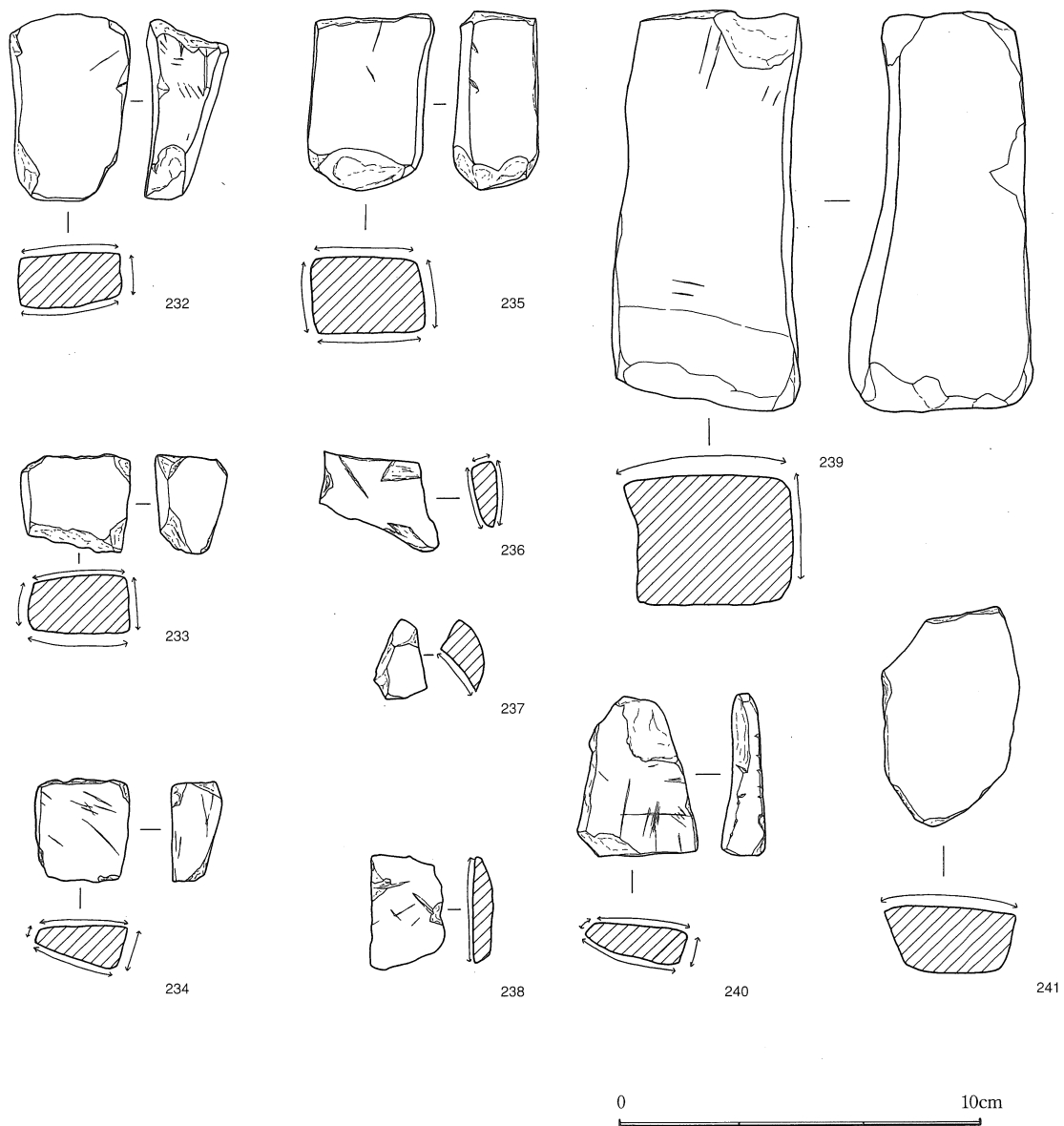


図40 中島遺跡出土遺物12 (砥石・古銭)

出土遺物計測表

遺物 番号	出土場所	器種	残存 率%	法 量(cm)				焼成	色 調	胎土	その他
				口径	器高	底径	高台高				
1	溝4	山茶碗	20	15.9	5.6	6.8	0.5	良好	灰色	密	反転 墨書「×」砂目
2	溝2ホー60	山茶碗	25			6.6	0.8	良好	灰白色	密	墨書「×」粉痕
3	溝2ロー1	山茶碗	30			6.8	0.6	良好	灰色	密	墨書 砂目
4	溝1ロー31	山茶碗	35	16.9	5.7	6.5	0.4	良好	灰白色	密	反転 墨書「×」粉痕→ミガキ
5	溝2ロー炭層	山茶碗	40			5.8	1.0	良好	灰色	密	墨書「大」粉痕
6	包含層	山茶碗	25			6.9	0.7	良好	灰白色	密	墨書「大」粉痕
7	溝3口灰色粘土	山茶碗	80	15.2	5.3	6.2	0.4	良好	灰白色	密	墨書 漬け掛け 輪花4方向?
8	溝1	輪花碗	15			7.0	0.75	良好	灰色	密	反転 墨書
9	包含層	山茶碗	15			6.6	0.35	良好	灰青色	密	墨書 ミガキ
10	柱穴39	山茶碗	25			6.1	0.5	良好	灰色	密	墨書
11	溝2イー1	山茶碗	25					良好	灰色	密	墨書
12	包含層	山茶碗	15			7.0	0.5	良好	暗灰色	密	墨書
13	溝2イー25	山茶碗	20			6.7	0.1	良好	灰白色	密	墨書「七」ミガキ
14	包含層2区	山茶碗	30			7.0	0.3	良好	灰色	密	墨書「の」粉痕
15	包含層	山茶碗	20			6.0	0.2	良好	灰色	密	墨書「×」ミガキ
16	溝1ロー138	山茶碗	20			4.8	0.15	良好	灰青色	密	墨書「しお」ミガキ
17	溝1ロー117	山茶碗	70	15.0	5.3	6.3	0.1	良好	灰色	密	反転 墨書「ち」ミガキ
18	溝2ニー38	山茶碗	25			6.4	0.25	良好	灰色	密	墨書
19	溝1ロー147	山茶碗	25			6.7	0.3	良好	灰色	密	墨書「×」ミガキ
20	溝1ロー149	山茶碗	10			8.2	0.3	良好	灰色	密	反転 墨書
21	包含層	山茶碗	5					良好	灰色	密	墨書
22	柱穴40	山茶碗	35	13.8	4.4	5.7	0.2	良好	灰色	密	墨書 知多(常滑)・猿投
23	柱穴40	山茶碗	30	14.1	4.2	5.5	0.4	良好	灰色	密	墨書 粉痕 知多(常滑)・猿投
24	溝2イ炭層	山茶碗	15			8.2	0.3	良好	灰色	密	反転 墨書 知多(常滑)・猿投
25	包含層	山茶碗	5			6.4	0.7	良好	灰色	密	反転 墨書 知多(常滑)・猿投
26	包含層3・4区	山茶碗	15	13.3	5.1	4.6	0.3	良好	灰白色	密	反転 墨書 東濃
27	北ト暗灰色粘土	小碗	30			4.1	0.4	良好	灰白色	密	墨書 砂目
28	溝2イー2	小皿	98	8.2	2.5	4.3		良好	灰色	密	墨書「×」
29	溝3炭層	小皿	98	8.8	2.4	4.1		良好	灰色	密	墨書「×」
30	包含層2区	小皿	45	8.1	2.5	4.2		良好	灰色	密	反転 墨書「大」か
31	溝2ーハ下層	小皿	40	8.0	2.55	4.3		良好	灰色	密	墨書
32	溝1ロー95	小皿	95	8.6	2.05	4.7		良好	灰色	密	墨書「×」
33	包含層	小皿	10			4.5		良好	灰色	密	墨書
34	包含層1区	小皿	30			4.2		良好	灰色	密	墨書
35	包含層1区	小皿	25			4.1		良好	灰色	密	反転 墨書「一」
36	溝2ホー5	小皿	20			3.9		良好	灰色	密	墨書
37	包含層	小皿	25			4.2		良好	灰色	密	墨書「大」
38	溝2ハニ断面	小皿	20			3.9		良好	灰色	密	墨書
39	住居2P45	輪花碗	30	16.6	5.5	7.4	0.8	良好	灰色	密	輪花4方向?
40	住居2焼土・炭塊	輪花碗	55	17.3	6.0	6.5	1.1	良好	灰色	密	反転 漬け掛け
41	住居2P91P97	輪花碗	30	16.6	6.4	7.0	1.0	良好	灰色	密	反転 粉痕
42	溝1イー22	輪花碗	50	15.8	5.65	6.9	0.6	良好	灰色	密	反転
43	包含層2区	輪花碗	20	15.7	5.4	7.8	0.7	良好	灰色	密	反転 漬け掛け
44	祭祀土坑	輪花碗	85	16.5	5.9	7.4	0.6	良好	灰色	密	輪花4方向? 砂目
45	溝1イー2	輪花碗	25	17.3	5.75	8.0	0.6	良好	灰色	密	反転 粉痕
46	溝1イー2	輪花碗	20	16.0				良好	灰色	密	反転 漬け掛け
47	溝2ホー43	輪花碗	25	15.2	6.2	6.3	0.5	良好	灰色	密	反転 粉痕
48	溝2ニー42	輪花碗	35	15.8	6.5	5.2	1.0	良好	暗灰色	密	反転
49	溝2イー15	輪花碗	30	17.8	6.3	7.1	0.8	良好	灰白色	密	反転 漬け掛け 輪花4方向?
50	溝1ロー140	輪花碗	30	15.8	5.5	7.8	0.5	良好	灰白色	密	反転
51	住居2P202	輪花碗	20	14.7	6.3	6.0	0.6	良好	灰青色	密	反転 砂目
52	包含層	輪花碗	35	14.9	5.5	5.5	0.4	良好	灰色	密	反転 ミガキ
53	溝2ロー8	輪花碗	80	15.6	5.6	5.9	0.1	良好	灰色	密	粉痕
54	住居2十字ベルト	輪花碗	55	16.1	5.75	7.4	0.6	良好	暗灰褐色	密	尾張
55	住居2P276	山茶碗	35	17.3	5.85	7.8	0.8	良好	灰色	密	

遺物 番号	出土場所	器種	残存 率%	法 量 (cm)				焼成	色 調	胎土	その他
				口径	器高	底径	高台高				
56	住居2イ-23	山茶碗	35	15.8	5.55	7.2	0.65	良好	灰色	密	
57	溝1ロー111	山茶碗	30	16.7	5.8	8.0	0.5	良好	灰色	密	反転
58	溝2イ-22	山茶碗	35	16.7	6.4	6.2	0.8	良好	灰白色	密	反転 漬け掛け 粉痕
59	溝2ロー26	山茶碗	25	15.6	5.9	6.1	0.4	良好	灰色	密	反転 粉痕
60	柱穴S	山茶碗	55	16.0	6.0	6.6	0.5	良好	明灰白色	密	反転 砂目
61	溝1ロー98・116・140	山茶碗	25	16.1	5.0	5.7	0.6	良好	灰色	密	反転 粉痕
62	溝2ロー31	山茶碗	70	16.5	6.1	7.2	0.5	良好	灰色	密	
63	住居2炭・焼土層	山茶碗	70	16.9	5.6	7.7	0.4	良好	灰色	密	粉痕
64	溝2ニ-2	山茶碗	60	15.7	6.1	6.2	0.55	良好	灰色	密	
65	溝2ロー16	山茶碗	65	15.3	5.5	6.4	0.5	良好	灰色	密	
66	溝2ハ-7	山茶碗	65	16.5	5.1	6.0	0.4	良好	灰色	密	粉痕
67	溝1ロー38	山茶碗	45			7.0	0.8	良好	灰色	密	重ね焼痕 砂目
68	包含層2区	山茶碗	60			7.4	0.9	良好	灰色	密	
69	溝1ロー38・121	山茶碗	55			6.9	0.5	良好	灰色	密	粉痕
70	溝1イ-32	山茶碗	30			7.8	0.6	良好	灰青色	密	
71	溝2ホ-4	山茶碗	40	15.2	4.65	5.8	0.3	良好	灰色	密	反転
72	包含層2・3区	山茶碗	65	15.6	5.1	6.4	0.1	良好	灰色	密	
73	溝1イ-11	山茶碗	20			5.3		良好	灰白色	密	
74	包含層4区	山茶碗	90	16.3	6.0	5.8	0.3	良好	灰茶褐色	密	二次的な火を受けている 知多(常滑)・猿投
75	包含層4区	山茶碗	75	15.8	5.2	6.6	0.2	良好	灰色	密	重ね焼痕 粉痕 知多(常滑)・猿投
76	溝3	山茶碗	45	14.6	5.45	6.2	0.1	良好	灰色	密	反転 粉痕 知多(常滑)・猿投
77	溝3	山茶碗	40	15.0	5.4	6.5	0.2	良好	灰白色	密	反転 粉痕 知多(常滑)・猿投
78	土坑4	山茶碗	35	15.2	5.5	7.0	0.3	良好	暗灰色	密	反転 知多(常滑)・猿投
79	溝3炭層	山茶碗	25	14.2	4.7	6.0	0.4	良好	灰白色	密	反転 知多(常滑)・猿投
80	溝3	山茶碗	35	13.2	5.5	5.9	0.3	良好	灰色	密	反転 知多(常滑)・猿投
81	包含層	山茶碗	30	13.9	4.4	3.8	0.4	良好	灰色	密	反転 粉痕 知多(常滑)・猿投
82	柱穴44	山茶碗	20			6.6	0.2	良好	灰色	密	知多(常滑)・猿投
83	包含層	山茶碗	15			5.4	0.1	良好	灰青色	密	知多(常滑)・猿投
84	住居2P168	山茶碗	60	17.0	5.1	8.0	1.4	良好	灰青色	密	ミガキ 東遠
85	溝2	山茶碗	17	14.4				良好	灰青色	密	反転 東遠
86	住居2十字ベルト	山茶碗	33			7.2	0.85	良好	灰青色	密	東遠
87	住居3有機質土	耳皿	80	9.6	3.45	3.5	0.3	良好	淡黄褐色	密	砂目 尾張
88	溝2イ-14	小碗	40			3.8	0.3	良好	淡黄褐色	密	尾張
89	溝2ホ-35	小碗	40			4.4	0.4	良好	灰色	密	
90	北トレ緑色粘土	小碗	20			4.3	0.4	良好	灰色	密	
91	包含層3区	小碗	50	9.45	3.05	4.3	0.3	良好	灰色	密	反転 粉痕
92	住居2P232	小碗	50	8.9	3.0	4.3	0.2	良好	灰色	密	反転 粉痕
93	溝2ニ	小碗	75	8.7	3.8	4.3	0.5	良好	灰色	密	
94	溝1イ-11	小碗	30	8.6	2.8	4.0	0.3	良好	灰色	密	反転 粉痕
95	溝1イ-21	小碗	50	8.1	2.8	4.0	0.3	良好	灰色	密	反転 粉痕
96	住居2P236	小碗	65			3.6	0.4	良好	灰白色	密	砂目
97	包含層2区	小碗	70	8.7	2.5	3.8	0.2	良好	にぶ灰青色	密	粉痕
98	包含層2区	小碗	55	8.4	2.5	3.6	0.2	良好	灰色	密	
99	溝2ロー14	小碗	60	7.6	2.45	4.0	0.5	良好	灰白色	密	
100	包含層	小碗	55	7.6	2.35	4.0	0.3	良好	灰色	密	反転 墨書
101	溝1ロー25	小皿	55	9.0	3.1	3.9		良好	灰色	密	反転
102	包含層	小皿	70	8.0	2.8	4.1		良好	灰色	密	
103	溝2ロー13	小皿	55	8.6	2.4	4.1		良好	灰色	密	
104	溝2ロー13	小皿	70	8.1	2.4	3.2		良好	灰青色	密	
105	溝2ハ炭層	小皿	60	8.0	2.1	3.8		良好	灰色	密	
106	包含層3・4区	小皿	85	9.2	2.2	4.3		良好	灰色	密	
107	溝2ロー24	小皿	90	8.0	2.1	4.0		良好	灰色	密	
108	包含層	小皿	60	7.4	2.6	3.7		良好	淡褐色	密	反転
109	溝2ロー18	小皿	98	8.1	2.5	3.9		良好	灰色	密	
110	溝2ロー23	小皿	99	8.6	2.4	3.7		良好	灰色	密	
111	溝2ロー21	小皿	65	8.3	2.3	4.2		良好	灰色	密	反転 見込み炭付着
112	北トレ黒色粘土	小皿	60	8.4	2.4	3.9		良好	灰色	密	反転
113	溝2イ炭層	小皿	70	8.7	2.5	4.2		良好	灰色	密	反転

遺物 番号	出土場所	器種	残存 率%	法 量 (cm)				焼成	色 調	胎土	その他
				口径	器高	底径	高台高				
114	溝2ロー炭層	小皿	60	8.8	2.6	3.6		良好	灰色	密	反転
115	溝2ハー3	小皿	85	8.7	2.4	4.1		良好	灰色	密	
116	溝2イー9	小皿	65	7.8	2.3	3.9		良好	灰色	密	反転
117	溝2ロー2	小皿	75	8.2	2.3	4.1		良好	灰白色	密	
118	北トレ黒色粘土	小皿	30	8.5	2.2	4.7		良好	灰色	密	反転
119	溝2イー9	小皿	70	8.3	2.2	3.6		良好	灰色	密	反転
120	溝2ロー37	小皿	50	8.7	2.3	4.4		良好	灰白色	密	反転
121	溝2ロー20	小皿	80	7.9	2.1	4.4		良好	灰色	密	
122	溝2ロー9	小皿	80	8.5	2.5	3.8		良好	灰色	密	
123	溝2ロー19	小皿	98	8.2	2.4	4.5		良好	灰色	密	
124	溝1ロー35	小皿	98	8.8	2.2	4.7		良好	灰色	密	
125	溝1イー21	小皿	85	8.2	2.5	3.6		良好	灰色	密	
126	溝2ロー37	小皿	50	8.7	2.7	3.5		良好	灰色	密	反転
127	溝1ロー35	小皿	55	8.0	2.7	3.1		良好	灰白色	密	
128	包含層	小皿	55	8.1	2.5	4.4		良好	灰色	密	反転
129	溝2ロー4	小皿	60	8.1	2.4	4.2		良好	灰色	密	反転
130	包含層2区	小皿	60	8.1	2.3	4.0		良好	灰色	密	反転
131	溝2ハー4	小皿	55	8.3	2.3	4.1		良好	灰色	密	
132	溝2ハー下層	小皿	20	7.8	2.1	3.9		良好	灰色	密	
133	溝1ロー30	小皿	45	8.1	2.1	3.9		良好	灰色	密	
134	溝1ロー67・123	小皿	60	8.5	2.1	4.0		良好	灰色	密	反転
135	溝1イー29	小皿	60	8.3	2.1	4.4		良好	灰色	密	反転
136	溝1イー11	小皿	65	7.7	2.1	3.6		良好	灰色	密	
137	包含層1区	小皿	25	8.0	2.2	4.0		良好	灰青色	密	反転
138	溝2イー4	小皿	100	8.8	1.9	4.5		良好	灰青色	密	
139	包含層3・4区	小皿	55	8.5	1.9	4.3		良好	灰色	密	反転
140	溝2イー19・29	小皿	60	8.1	2.1	3.9		良好	灰青色	密	
141	溝1ロー142	小皿	80	8.5	2.1	3.5		良好	灰色	密	
142	溝1	小皿	45	9.4	2.3	5.3		良好	灰色	密	反転
143	溝2ニー32・49	小皿	40	8.5	2.0	4.0		良好	灰色	密	
144	溝2イー27	小皿	60	8.7	2.1	4.3		良好	灰青色	密	反転
145	溝1ロー122	小皿	85	8.2	2.0	4.0		良好	灰色	密	内面墨付着
146	溝1ロー7	小皿	40	8.5	1.6	4.5		不良	明白色	密	反転
147	溝3	小皿	70	8.4	1.9	4.3		良好	灰白色	密	
148	溝2ハー1	小皿	40	8.8	2.0	5.2		良好	灰青色	密	反転
149	溝4	小皿	45	8.0	1.7	4.2		良好	灰白色	密	反転
150	溝2ホー47	小皿	40	7.8	1.9	3.2		良好	灰色	密	反転
151	包含層2区	小皿	40	7.8	1.9	4.1		良好	灰色	密	反転
152	包含層4区	小皿	85	7.8	2.1	4.6		良好	灰青色	密	知多(常滑)・猿投
153	包含層1区	小皿	30	7.9	1.8	5.0		良好	灰色	密	反転 知多(常滑)・猿投
154	包含層	小皿	55	8.2	1.8	4.3		良好	灰色	密	知多(常滑)・猿投
155	包含層	小皿	85	8.1	1.9	5.1		良好	灰青色	密	知多(常滑)・猿投
156	溝2ロー30	小皿	40	7.9	2.0	4.3		良好	灰色	密	反転 知多(常滑)・猿投
157	溝3	小皿	75	7.8	1.9	5.0		良好	灰色	密	知多(常滑)・猿投
158	溝3	小皿	40	8.2	1.8	4.6		良好	灰色	密	反転 知多(常滑)・猿投
159	溝3炭層	小皿	40	7.8	1.8	4.7		良好	灰色	密	反転 知多(常滑)・猿投
160	溝3	小皿	65	8.1	1.7	4.8		良好	灰色	密	知多(常滑)・猿投
161	溝3	小皿	99	8.0	1.6	5.4		良好	灰色	密	知多(常滑)・猿投
162	溝3	小皿	80	7.5	1.5	4.8		良好	灰色	密	知多(常滑)・猿投
163	溝2ニー10・30	瓦器碗	20	14.7	5.7	6.3	0.4	良好	淡灰白色	密	楠葉型
164	溝2	瓦器碗	5	14.8				良好	淡灰白色	密	楠葉型
165	溝2	瓦器碗	5	15.0				良好	淡灰白色	密	楠葉型
166	溝2イー24	土師質の碗	5	16.0				良好	暗茶褐色	雲母	
167	溝1イー9	かわらけ	66	8.0	1.9	4.1		良好	茶色	雲母少量	
168	柱穴34	かわらけ	95	7.6	2.4	4.6		良好	赤茶褐色	雲母	
169	包含層1区	かわらけ	17	7.2				良好	茶褐色	密	反転
170	柱穴34	かわらけ	17	8.3	2.1	4.8		良好	赤茶褐色	雲母少量	反転
171	包含層2区	かわらけ	25	8.0	(3.2)	3.9		良好	明乳茶褐色	小粒赤雲母	反転

遺物 番号	出土場所	器種	残存 率%	法 量 (cm)				焼成	色 調	胎土	その他	
				口径	器高	底径	高台高					
172	溝2ロー32	かわらけ	25	6.6	1.4	5.2		普通	赤茶褐色	赤色酸化土	反転	
173	包含層3・4区	かわらけ	14	6.8	1.9	3.5		良好	赤褐色	密	反転	
174	包含層2区	かわらけ	15	8.2				良好	乳灰茶褐色	小粒砂	反転	
175	溝2ロー34	かわらけ	17	7.8				良好	赤褐色	密	反転	
176	柱穴34	かわらけ	17	7.2				良好	赤褐色	密	反転	
177	包含層3区	かわらけ	13	7.8				良好	赤褐色	雲母	反転	
178	包含層2区	かわらけ	13	7.6				良好	赤褐色	密	反転	
179	溝3	かわらけ	13	7.8				良好	赤茶褐色	雲母	反転	
180	包含層3区断層	かわらけ	20			3.2		普通	にぶい茶褐色	赤色酸化土		
181	溝2ロー23	かわらけ	20			4.0		普通	茶褐色	密		
182	溝2ロー18・20	かわらけ	20			4.0		普通	赤褐色	赤色酸化土		
183	住居3黒褐色粘土	かわらけ	15			5.6		普通	淡茶褐色	密	反転	
184	包含層2区	かわらけ	15			5.4		普通	乳茶褐色	雲母	反転	
185	包含層2区	かわらけ	25			7.4		良好	灰色	密	反転	
186	溝2ロー20	かわらけ	25			7.8		良好	明茶色	雲母	反転	
187	南トレ灰色粘土	かわらけ	20	9.1	2.2			良好	赤茶褐色	雲母	反転	
188	南トレ灰色粘土	かわらけ	25	9.6	2.1			良好	赤茶褐色	雲母	反転	
189	溝3	かわらけ	13	8.8				良好	赤褐色	赤色酸化土	反転	
190	溝2ニホ	かわらけ	25	8.6				良好	乳茶褐色	密	反転	
191	溝2ロー17	かわらけ	50	8.2	1.6			良好	淡赤茶褐色	密		
192	南トレ灰色粘土	かわらけ	25	8.8	1.8			普通	赤褐色	赤色酸化土	反転	
193	溝2口緑色粘土	かわらけ	17	9.6				良好	淡茶褐色	雲母	反転	
194	溝2ロー34	かわらけ	30	8.3	1.7			良好	淡赤茶褐色	赤色酸化土	反転	
195	包含層	かわらけ	10	15.2				良好	乳褐色	密	反転	
196	溝2ロー3	かわらけ	50	8.7	1.6			良好	淡灰茶褐色	密		
197	包含層1区	かわらけ	15	8.2	1.6			良好	乳赤褐色	密	反転	
198	溝3	かわらけ	20	6.8	1.6			良好	赤茶褐色	赤色酸化土	反転	
199	溝1ロー133	小型鍋	17	8.4				良好	灰色	密	反転	
200	包含層3・4区	羽釜	5					良好	暗茶褐色	雲母		
201	包含層1区	羽釜	5					良好	暗茶褐色	雲母・小粒砂		
202	溝1ロー27	伊勢型鍋	10	20.2				良好	茶褐色	石炭・灰	反転	
203	住居2P79	伊勢型鍋	10	22.4				良好	にぶい赤茶褐色	石炭・灰	反転	
204	溝3炭層	伊勢型鍋	5	21.9				良好	茶褐色	密		
205	溝2ロー40	伊勢型鍋	40	27.2			最大幅31.8	良好	明灰白色	密		
206	溝3	伊勢型鍋	20	28.0				良好	茶褐色	密		
207	溝2ロー2	伊勢型鍋	15	25.0				良好	茶褐色	密		
208	住居1P-1	伊勢型鍋	25	21.6				良好	茶褐色	密		
209	包含層2区	片口碗	25	7.6				良好	赤味のある灰色	密	常滑	
210	柱穴44	片口鉢	33	21.2	7.5	12.3	1.0	良好	灰色	石炭・灰	内面溶壁付着	常滑
211	包含層3・4区	こね鉢	5	32.8		15.5	1.6	良好	暗灰色	石炭・灰	常滑	
212	包含層3・4区	こね鉢	17	31.2				良好	灰青色	石炭・灰	常滑	
213	溝2ロー16	壺	3	15.4				良好	暗灰色	密	反転	常滑
214	包含層	甕	3					良好	黒灰色	密	常滑	
215	土坑4	甕	5					良好	灰色	密	常滑	
216	包含層3・4区	甕	3					良好	赤灰色	密	常滑	
217	包含層	甕	3					良好	橙色	密	常滑	
218	包含層1区	甕	10					良好	灰色	密	常滑	
219	柱穴35	壺	5	13.3				良好	暗灰色	密	反転	渥美
220	溝2ロー23	広口瓶	10	14.4				良好	暗灰色	密	反転	渥美
221	包含層2区 住居2P-9	広口瓶	5	15.9				良好	暗灰色	密	反転	渥美
222	包含層1・2区	広口瓶	5	18.8				良好	暗灰色	密	反転	渥美
223	溝2ロー41 溝3	広口瓶	20					良好	灰色	密	渥美	
224	住居1炭・焼土層	壺	5			10.0		良好	暗灰色	密	反転	渥美
225	包含層3・4区	甕	3					良好	灰色	密	反転	渥美
226	溝1ロー78	甕	4	40.0				良好	暗灰色	密	反転	渥美
227	包含層	甕	3	43.0				良好	灰色	密	反転	渥美
228	包含層2区	甕	3					良好	暗灰色	密	反転	渥美
229	溝2ロー16	甕	3					良好	灰色	密	反転	渥美

遺物 番号	出土場所	器種	残存 率%	法 量 (cm)				焼成	色 調	胎土	その他
				口径	器高	底径	高台高				
230	包含層3・4区	不明	不明					良好	灰色	密	渥美
231	柱穴D	こね鉢	10			15.6	0.8	良好	灰色	密	反転 渥美

石製品計測表

遺物 番号	出土場所	種別	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	色 調	石 材	その他
232	溝2ハニ断面	砥石	7.7	4.3	2.2	灰黄色	凝灰岩	3面使用
233	溝3	砥石	4.3	3.6	2.5	白灰色	凝灰岩	4面使用
234	包含層	砥石	4.2	3.6	1.8	淡黄色	凝灰岩	4面使用
235	包含層3区	砥石	7.1	7.7	3.2	灰白色	凝灰岩	4面使用
236	包含層3・4区	砥石	4.3	3.1	0.9	灰白色	凝灰岩	4面使用
237	溝3	砥石	3.2	2.2	1.5	白灰色	凝灰岩	1面使用
238	包含層3・4区	砥石	4.3	2.9	0.9	暗灰色	凝灰岩	1面使用
239	祭祀土坑	砥石	16.4	6.9	5.3	灰白色	凝灰岩	2面使用
240	溝2 ニー40	砥石	6.1	4.2	1.5	灰白色	凝灰岩	4面使用
241	包含層2区	砥石	9.1	5.4	2.8	灰白色	凝灰岩	1面使用

古銭計測表

遺物 番号	出土場所	銭貨名	国・王朝	初鑄年	銭径(A)／銭径(B) mm		内径(C)／内径(D) mm		銭厚 mm
242	包含層	開元通寶	唐	621	25.31	25.32	18.71	18.61	1.03～1.15
243	包含層 柱穴5・6・23・31周辺	至道元寶	北宋	995	24.83	24.82	18.90	18.89	0.99～1.04
244	包含層 柱穴5・6・23・31周辺	皇宋通寶	北宋	1038	24.72	24.51	20.28	20.52	1.13～1.31
245	包含層	治平通寶	北宋	1064	23.81	24.02	19.01	19.02	1.31～1.39
246	包含層 柱穴5・6・23・31周辺	熙寧元寶	北宋	1068	24.32	24.13	20.69	20.32	0.98～1.15

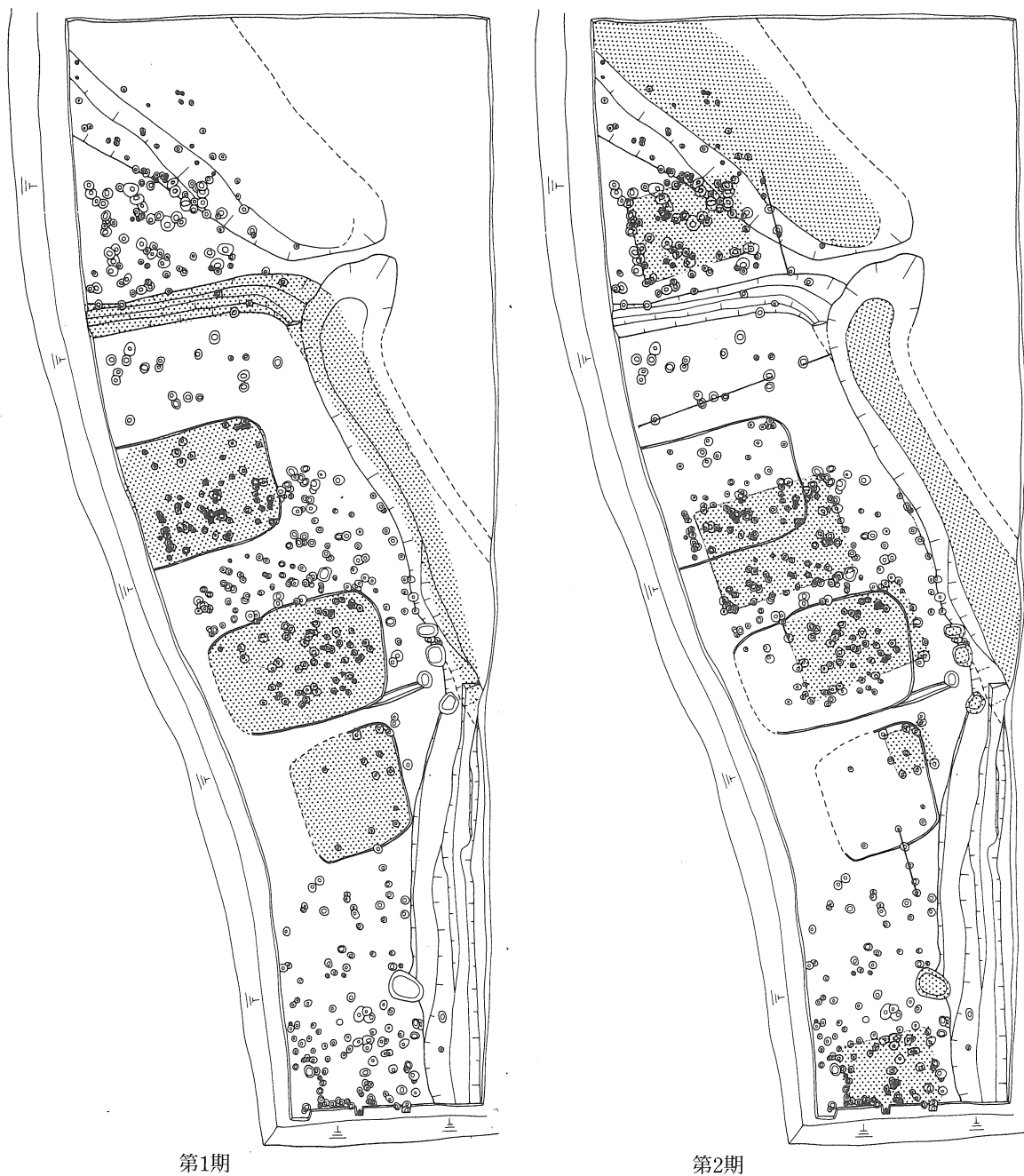


図41 中島遺跡遺構変遷図

4 総括

中島遺跡は調査の最終段階で水害に遭い、各遺構の精査及び検討ができないまま、上辺の形だけを整えて終了することになった。余りにも不十分な調査ではあったが、発掘調査を担当した者としての最低限の責務はこれで果たせたのではないだろうか。

中島遺跡は2年にわたる試掘確認調査の末、偶然に、それも諦めていた最後のトレンチで発見した新発見の遺跡であった。しかも、遺構が残存していたのは最大でも東西幅18m、南北幅70mという限られた範囲に過ぎず、トレンチを西に数mずらして設定していたならば誰にも発見されることなく、

永遠に葬り去られていた。このような所にも埋蔵文化財調査の難しさを見ることができる。

最後に、中島遺跡の持つ問題点を整理して総括に変えたい。

遺跡の存続期間 中島遺跡は出土遺物の検討から、12世紀中頃から本格的な建物が整備され、12世紀後半～13世紀初頭に最も栄え、13世紀前半の中で衰退する遺跡である。この間、百年に満たないものと考えられる。これは、原廣志氏の指摘の通り舶載陶磁器の出土傾向に顕著に現れている。

この存続期間の短さは、遺跡の立地条件が大きく影響している。中島遺跡の所在する地点は、蛇行して流れる中世の原野谷川と太田川が最も接近する場所にあたり（中島遺跡を挟んだ両河川の幅は僅か 600m）、しかも遺跡は両河川の間差点に位置している。このような立地は洪水や流路の変更という影響を受け易く、安定した土地とは言えない。12世紀中頃から13世紀前半の時期に、この地点が最も安定していたということであり、周辺状況の変化によってこのような低地の集落は常に移動する。遺構の変遷（図41）遺構を出土遺物と切り合い関係から整理し、変遷を跡付けると、概ね三段階に整理することができる。第1期は三棟の竪穴住居と、これを囲む溝4が設けられる段階。12世紀中頃～後半にかけての年代が想定される。

第2期は大振りの掘方を持つ掘立柱建物群と、これを取り囲む溝1・溝2が設けられる段階。12世紀後半～13世紀初頭にかけての年代が想定される。

第3期は小降りの掘方を持つ掘立柱建物群と、これに平行する溝3が設けられる段階。この段階に建物群の中心は南側に移動し、柱構造も柱の下に礎板や土器片を転用した礎板、あるいは礎石が入られるものが出現している。13世紀初頭～中頃にかけての年代が想定される。そして後半には廃絶し、移動したのと考えられる。

遺跡の性格 調査の段階では、原野谷川から西は鎌田御厨であるという漠然とした認識を持っており、御厨領の一部としての位置付けを考えながら遺構の検出にあたっていた。しかし、南北朝期の貞治元(1362)年に遠江国の国衙領を書き上げた『熊野速玉神社文書』の「西園寺実俊施行状」には長溝郷が国衙領であったことを明記している。

この史料は中島遺跡の年代と直接関わりを持たないが、長溝郷が御厨領から国衙領へ変化したとは考えられず、国衙領長溝郷の中心となる集落という位置付けが妥当な所ではないだろうか。鎌田御厨の中心となる遺跡は、鎌田・鉾影遺跡等の磐田原台地東南部末端に位置する遺跡であり、これらは旧太田川水系の舟運や水利を媒介とする集落群である。

これに対し、中島遺跡は旧原野谷川水系の舟運や水利を媒介とする集落であったと想定しており、御厨領とは別の水系を国衙が押さえていたのではないだろうか。中世は荘園に注目が集まるが、遠江国には依然、多数の国衙領が存在しており、しかもそれらは中遠地方の河川域に集中するという特徴がある。この特徴を考慮した場合、国衙に近い中島遺跡の位置は重要であることが分かる。

ここで参考となるのが、淀川水系を中心とする限られた範囲にしか分布しない楠葉型の瓦器碗が数点分出土していることである。森島康雄氏の研究によると、この瓦器碗は瀬戸内海沿岸部や北部九州の古代以来の官衙遺跡など京都や摂関家との繋がりが推定される遺跡に分布するのが特徴という。

しかもⅡ期の後半になると生産地から遠く離れた場所から出土することは稀で、点的な分布で一遺跡からの出土量も少なくなるという。楠葉型の瓦器碗が出土する背景は、中島遺跡を国衙による原野谷川水系の掌握拠点として位置付けることにより理解することができないだろうか。

[参考文献]

森島康雄 1995「Ⅲ土器・陶磁器 瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社



1.同安窯系統・龍泉窯系統（内面）



2.同安窯系統・龍泉窯系統（外面）



1. 龍泉窯系碗・皿（内面）



2. 龍泉窯系碗・皿（外面）



1. 白磁 (内面)



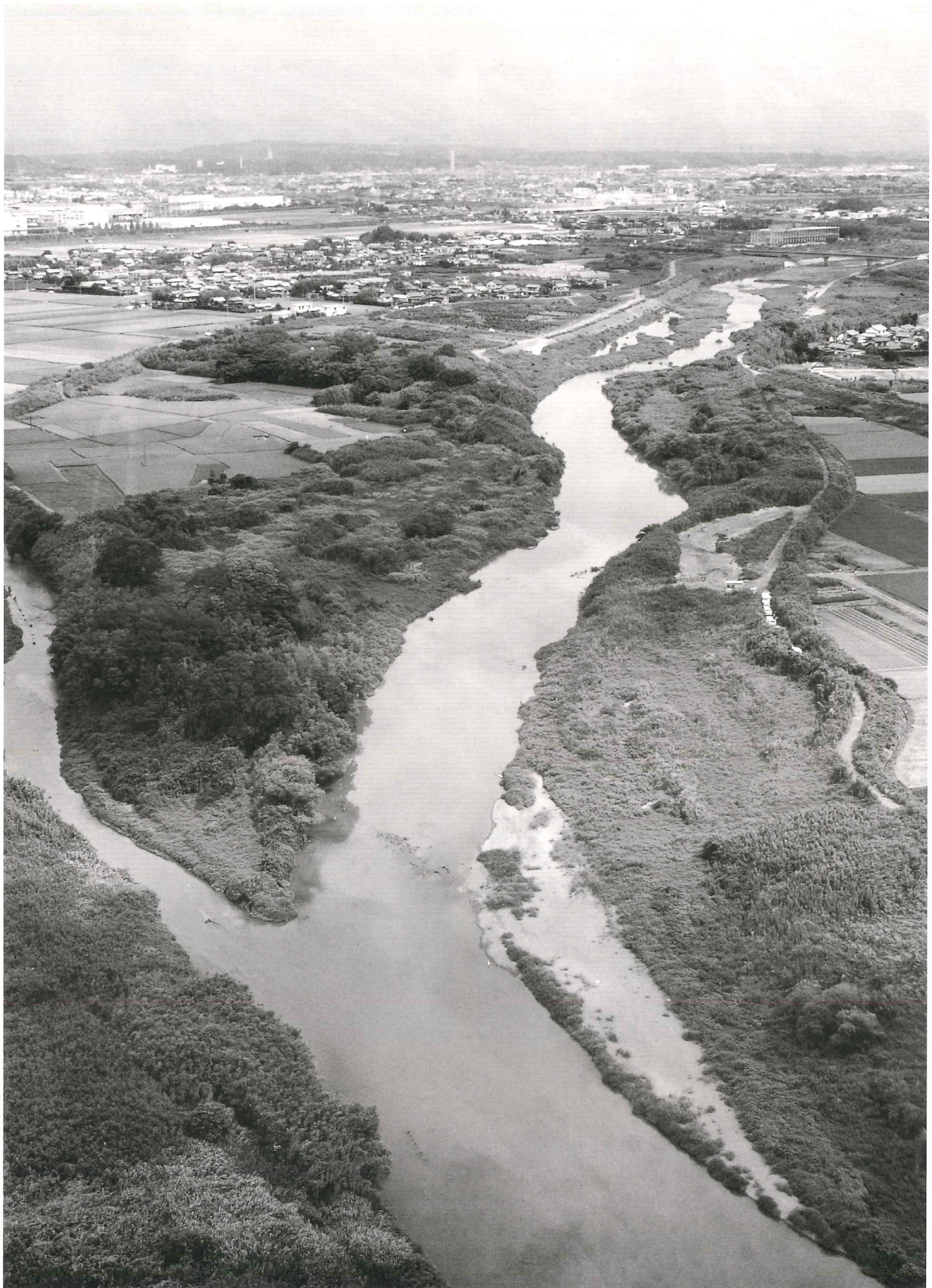
2. 白磁 (外面)



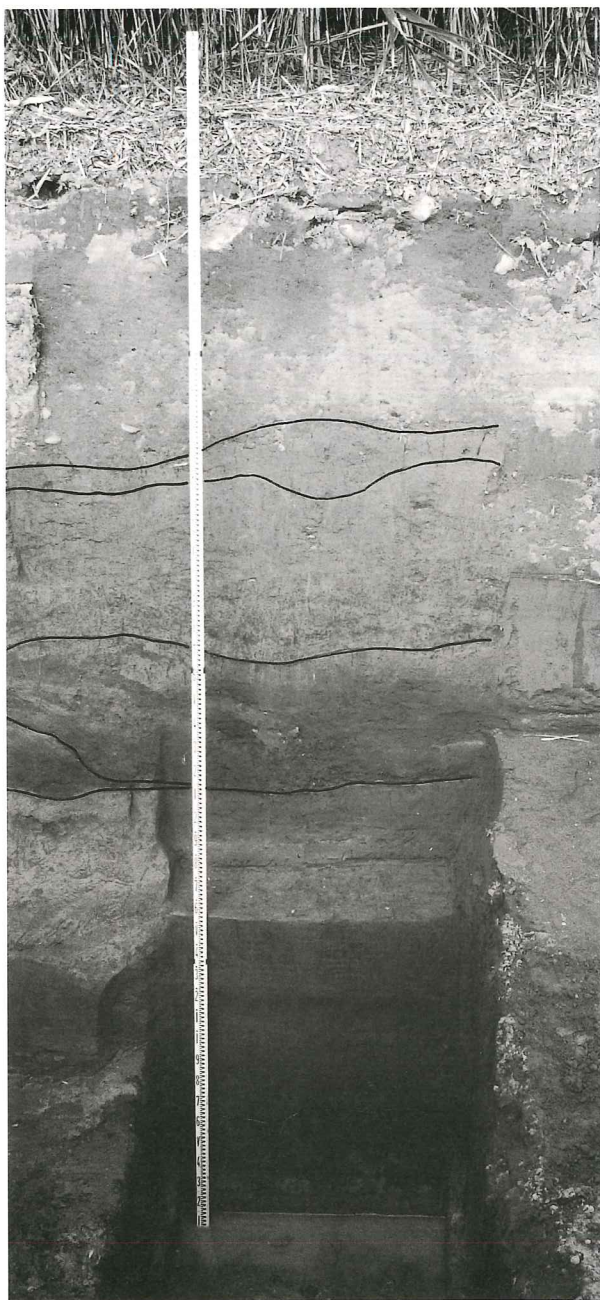
1. 白磁・青白磁 (内面)



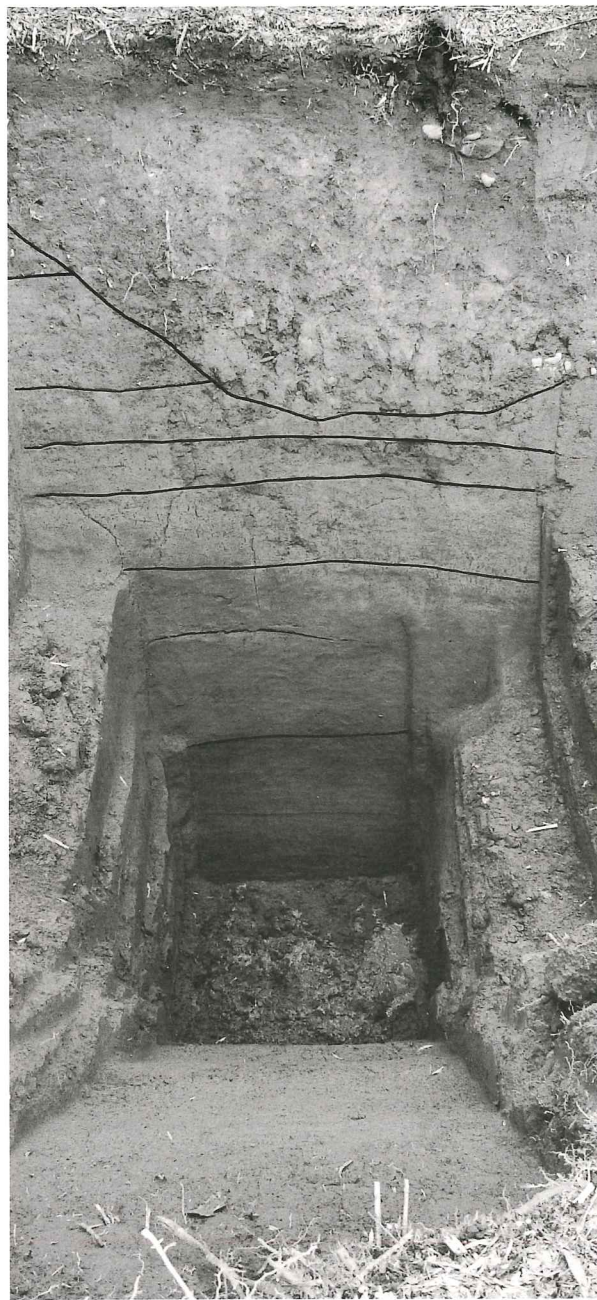
2. 白磁・青白磁 (外面)



原野谷川・蟹田川合流地点と浅羽大囲堤（背後は袋井市街）



3トレンチ



2トレンチ

試掘・確認調査トレンチ土層断面



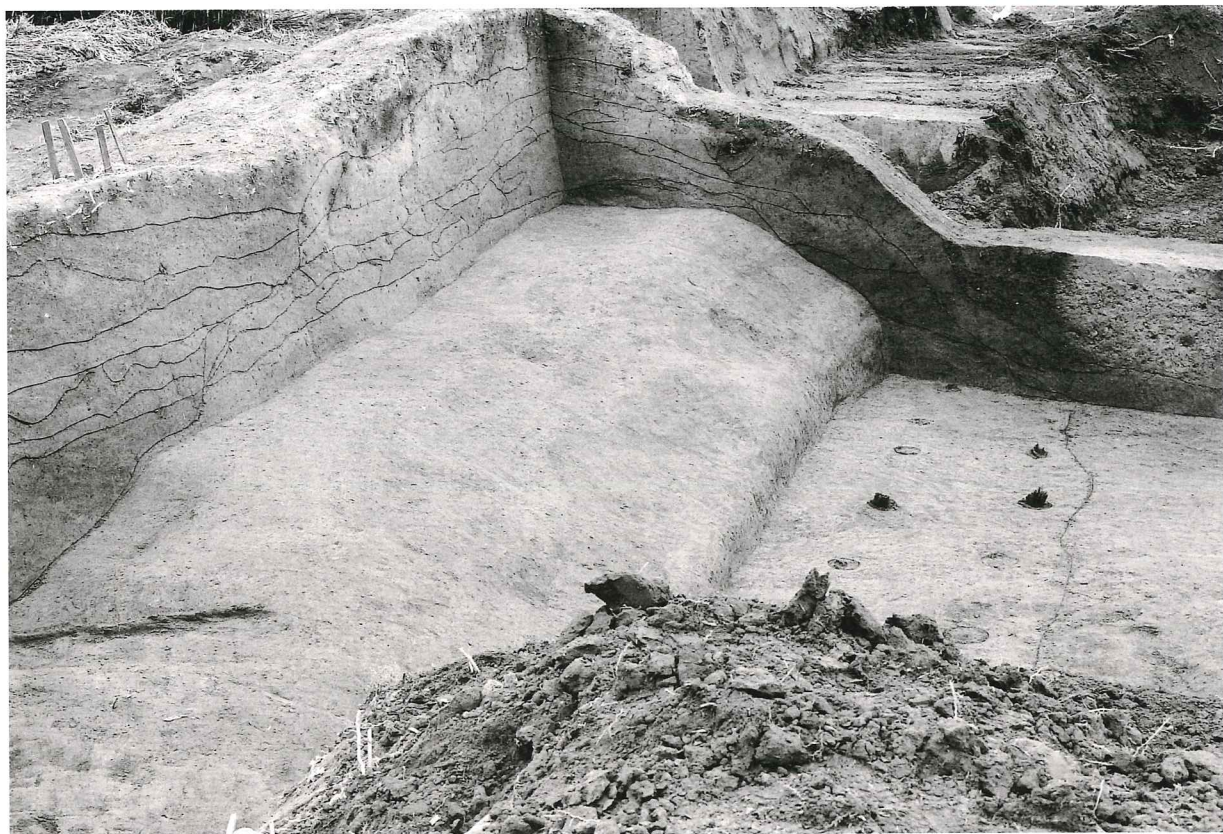
浅羽大堰全景



1. 浅羽大囲堤全景（調査前）



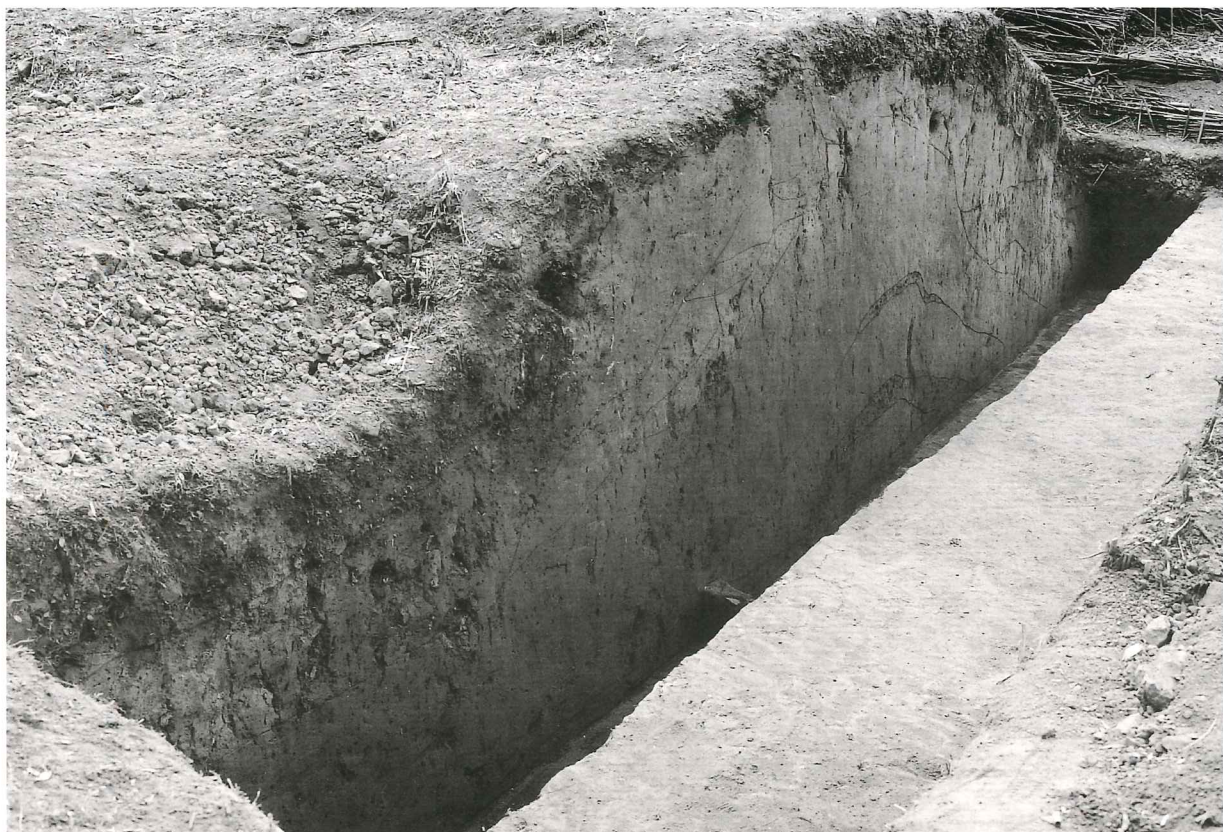
2. 大囲堤土層断面 1



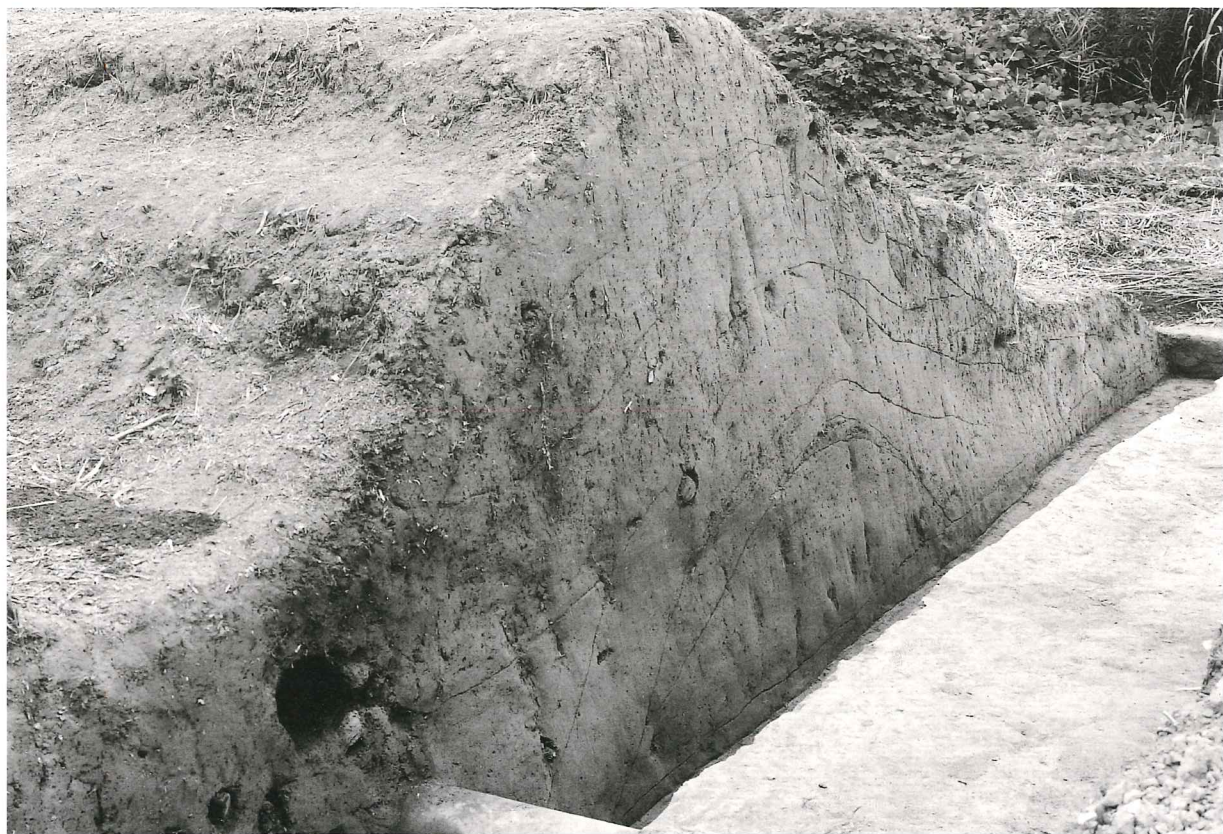
1.大圀堤A区東側調査状況



2.大圀堤A区縦断面



1.大囲堤土層断面 6



2.大囲堤土層断面 5



上空からの中島遺跡（手前は原野谷川、背後は太田川、後ろの森は鎌田神明宮）



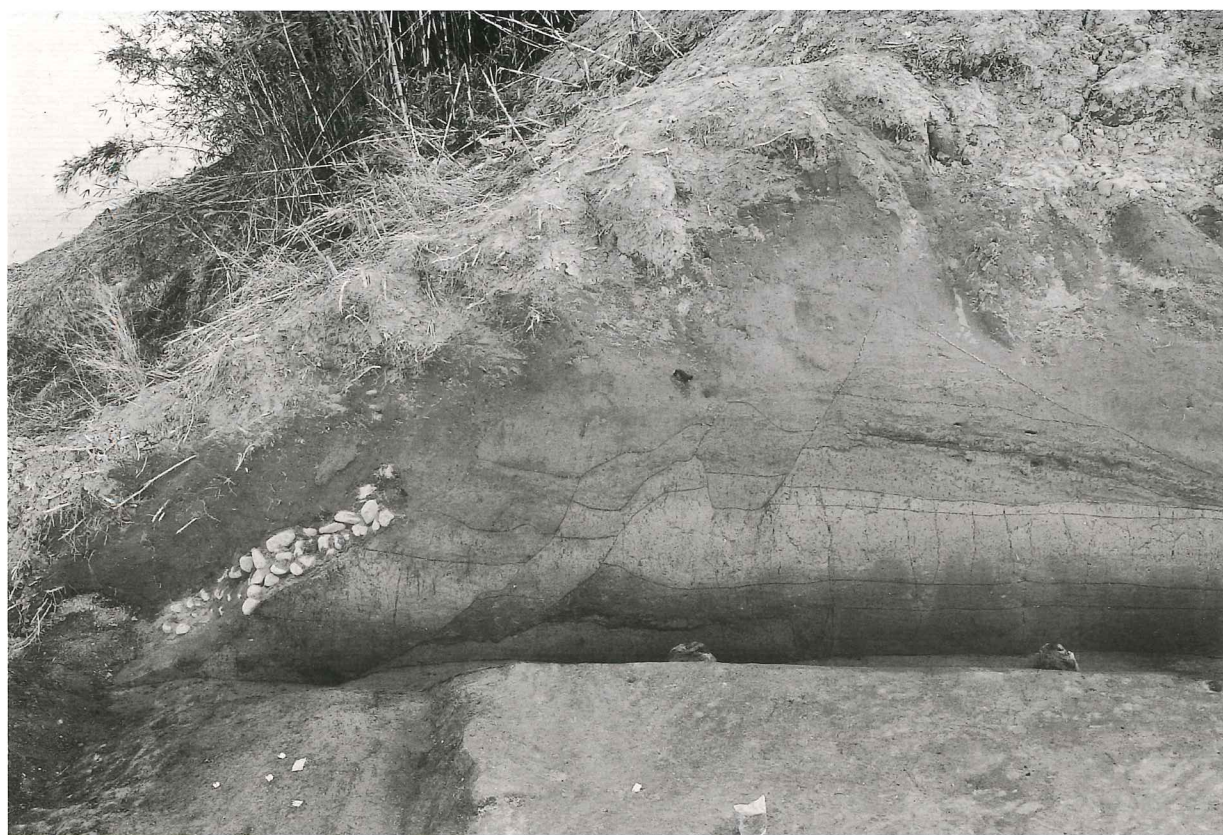
上空からの中島遺跡（遺構検出面）



1.遺物包含層からの遺物出土状況



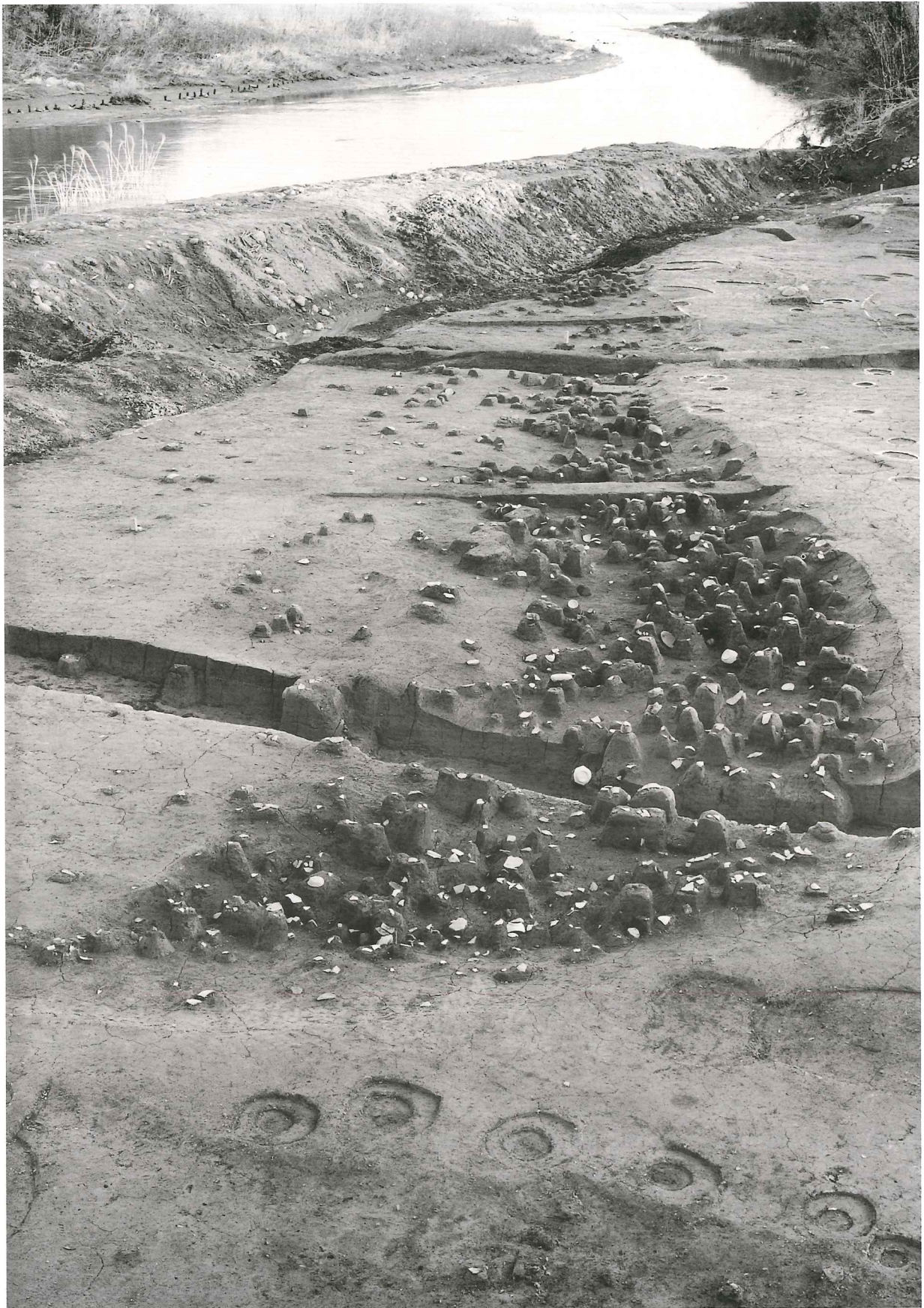
2.遺構検出面



1.南壁土層断面



2.中央部土層断面



溝2遺物出土状況（北から）



1. 溝2 水区最終面



2. 溝2 二・水区土層断面



1. 溝4全景（西から）



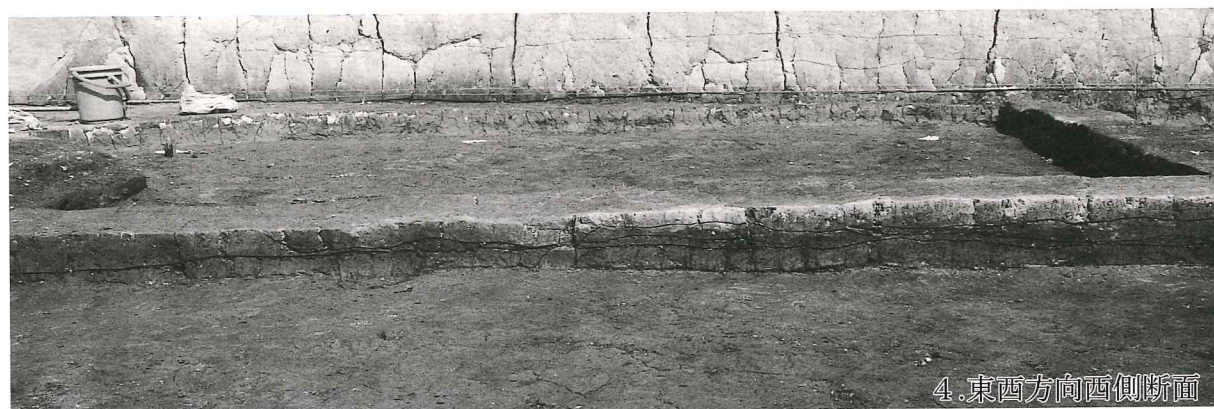
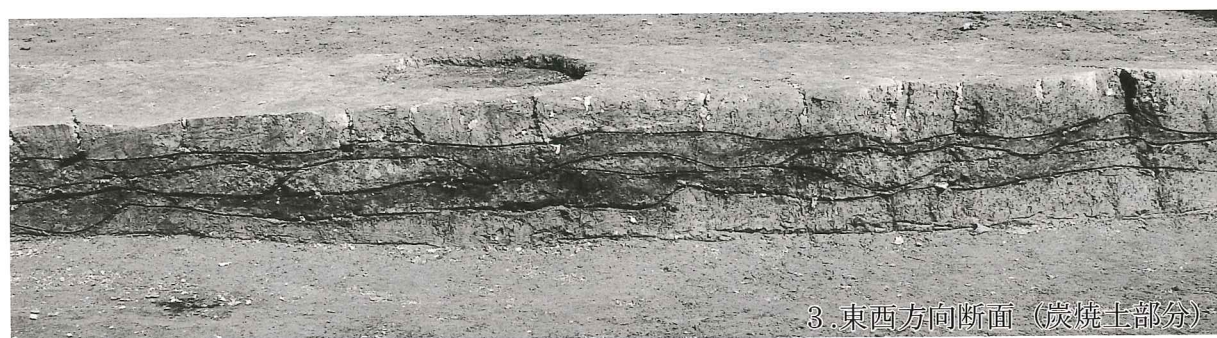
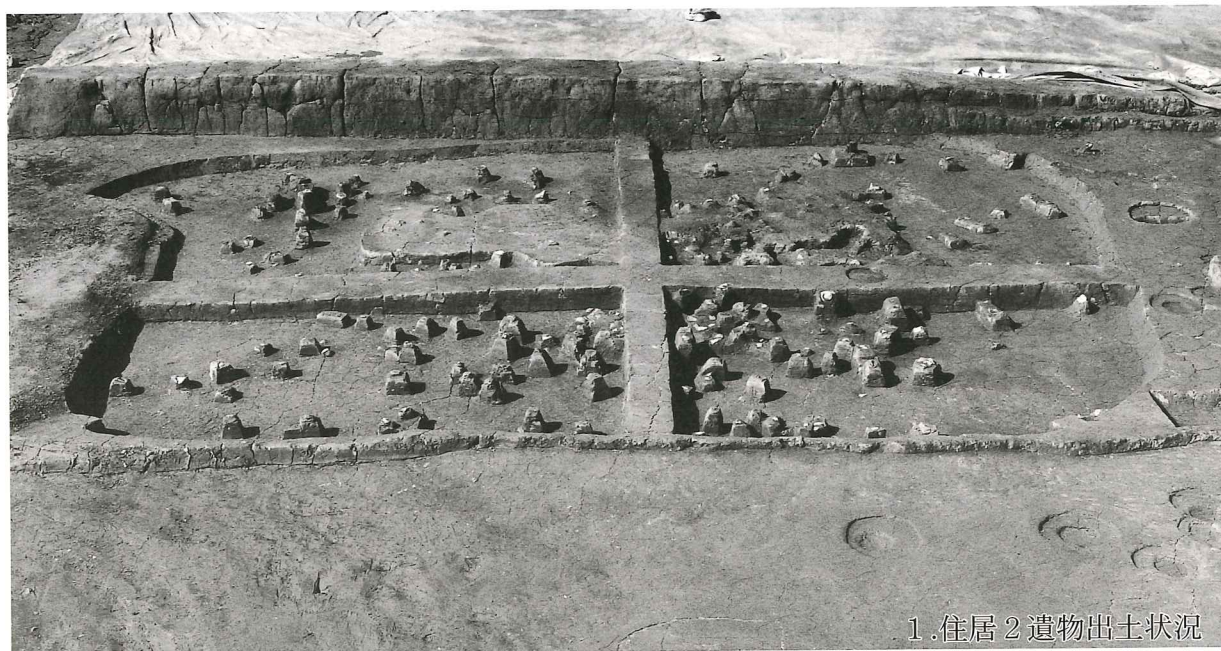
2. 溝4土層断面



1.住居1 調査状況（西から）

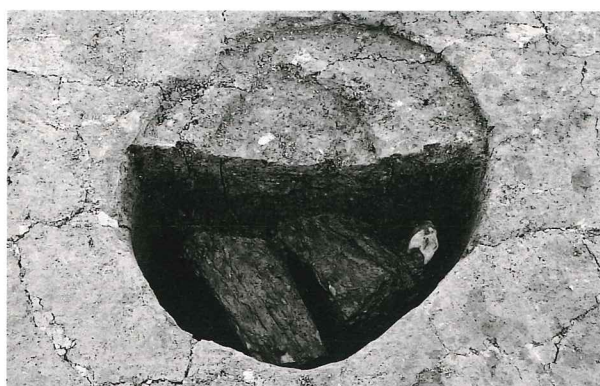


2.住居1 と周辺状況（洪水後の再調査）

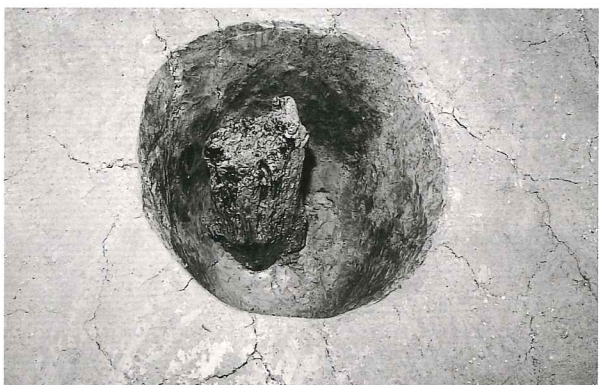




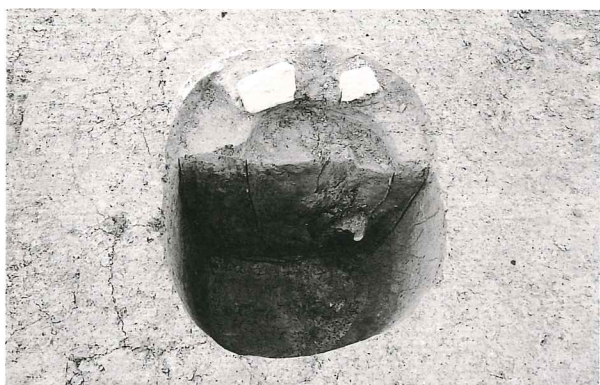
1. 柱穴 1



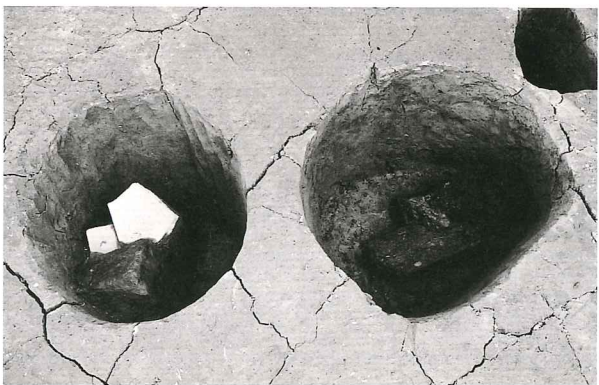
5. 柱穴 11



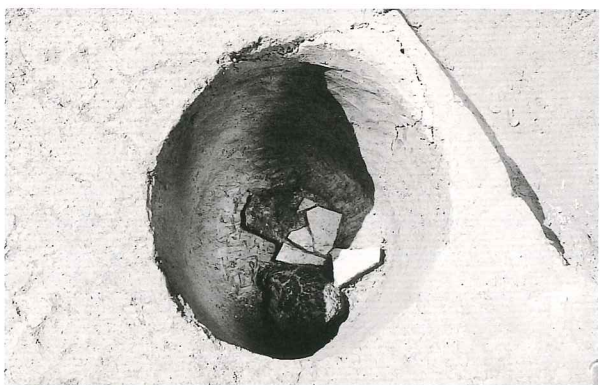
2. 柱穴 2



6. 柱穴 23



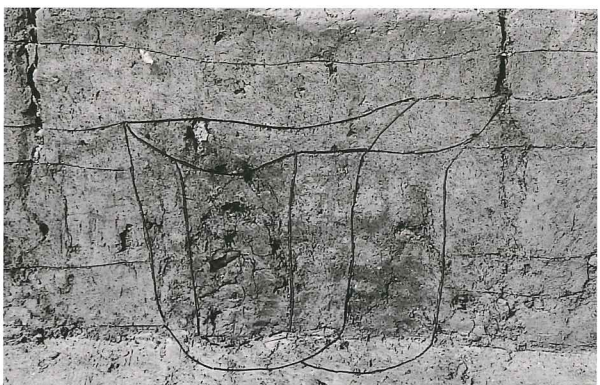
3. 柱穴 7・8



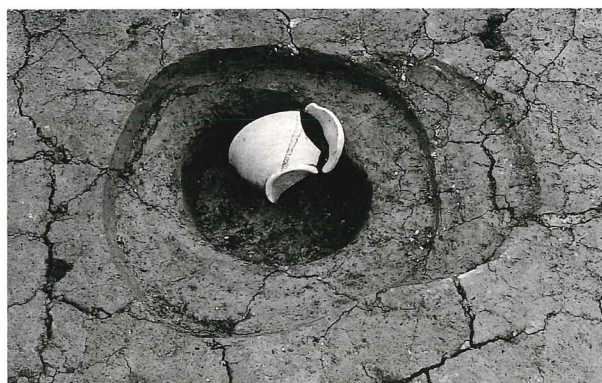
7. 柱穴 48



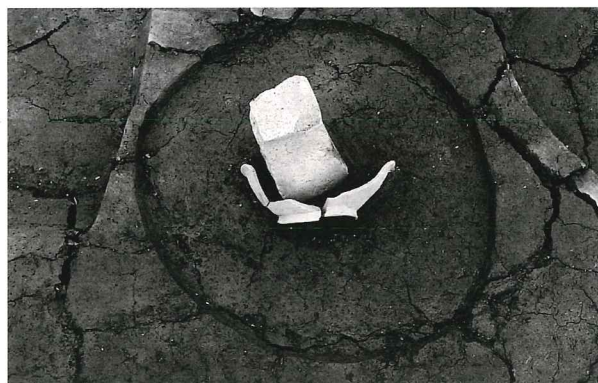
4. 柱穴 10



8. 中央断面に掛かった柱穴



1. 柱穴49



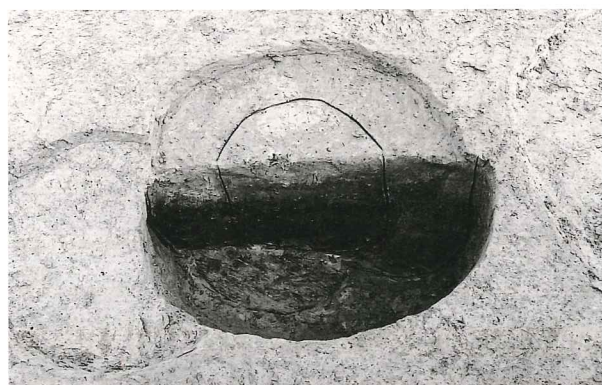
5. 祭祀土坑



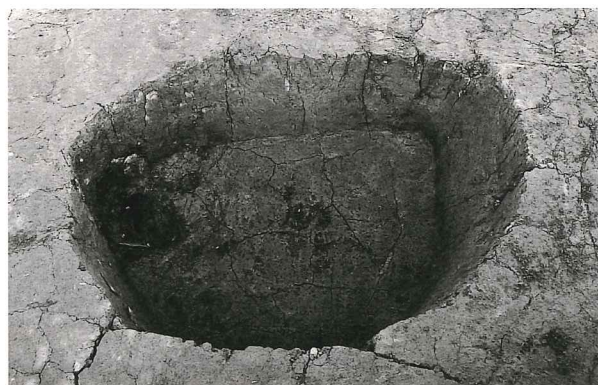
2. 住居1 伊勢型鍋出土状況



6. 土坑1



3. 住居2 柱穴5 土層断面



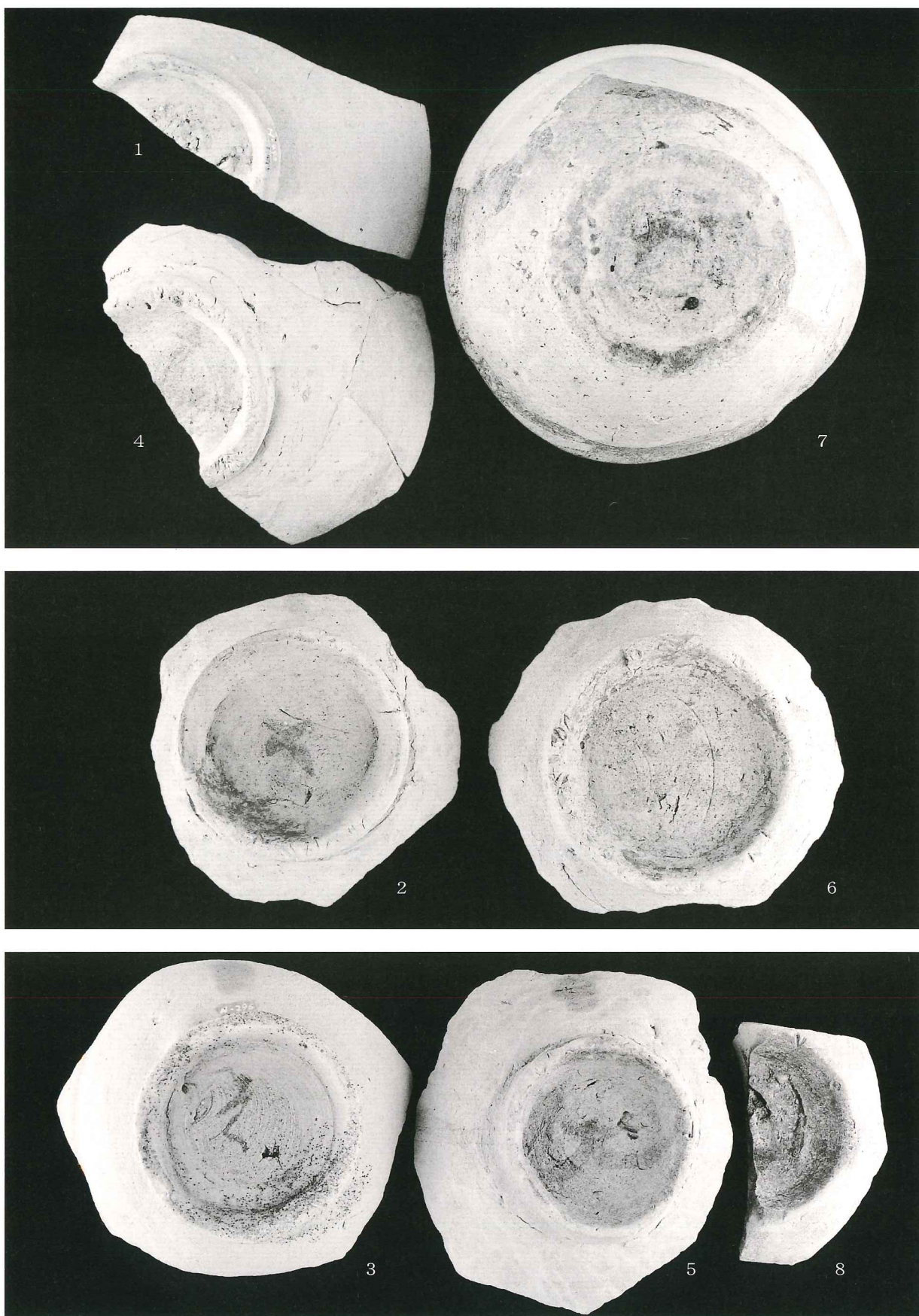
7. 土坑3



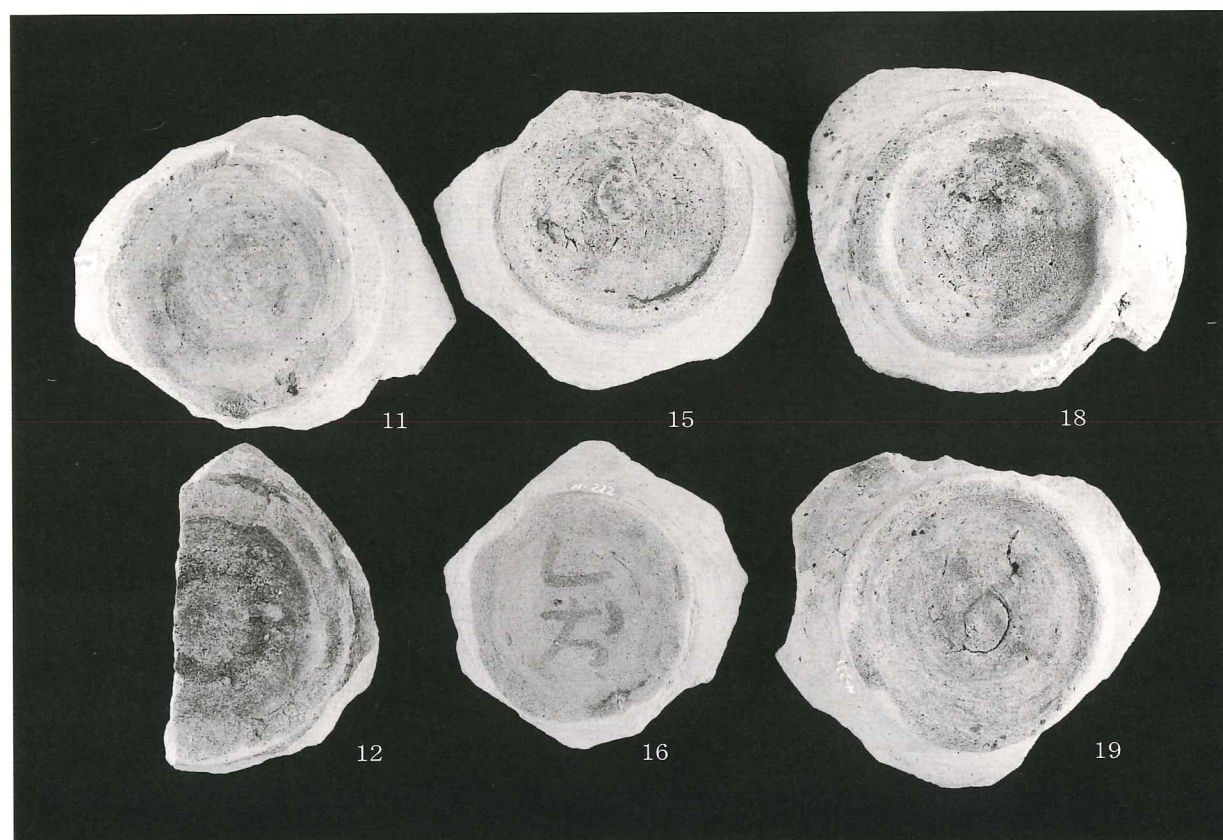
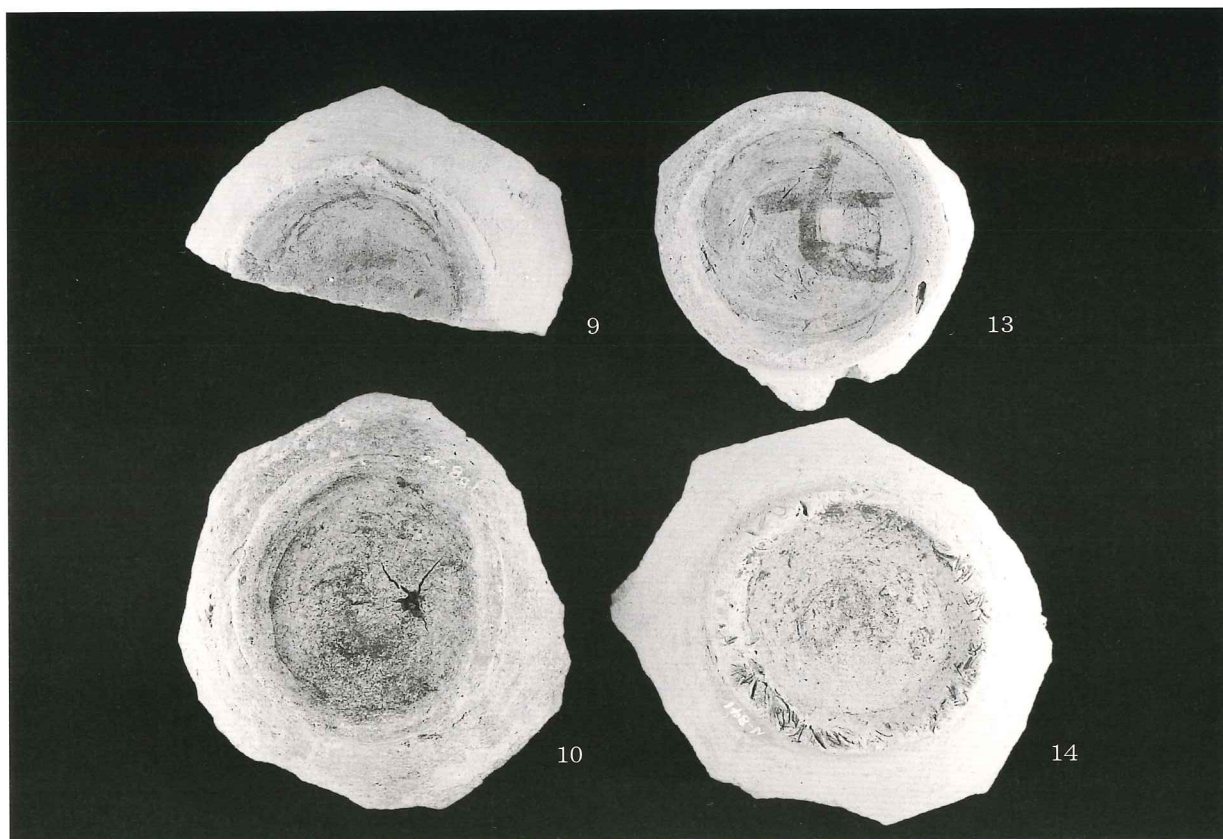
4. 住居2 柱穴5



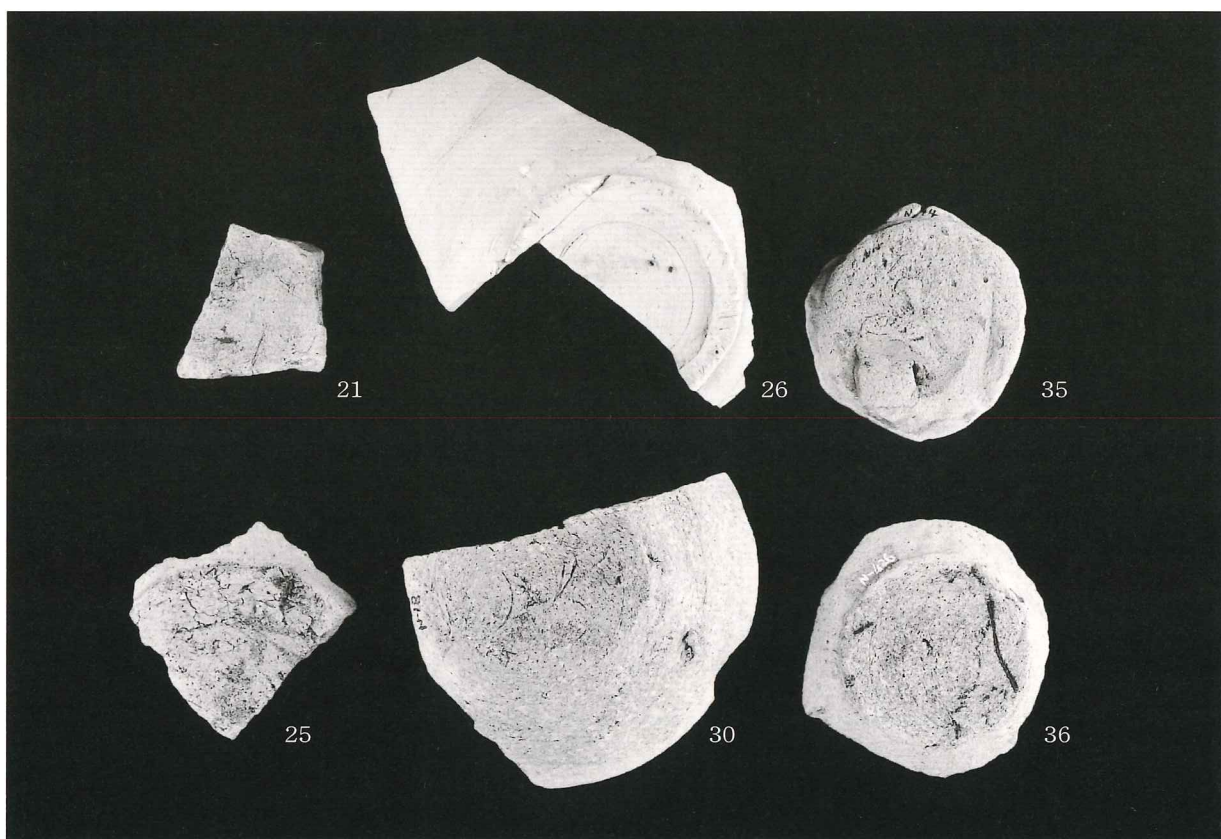
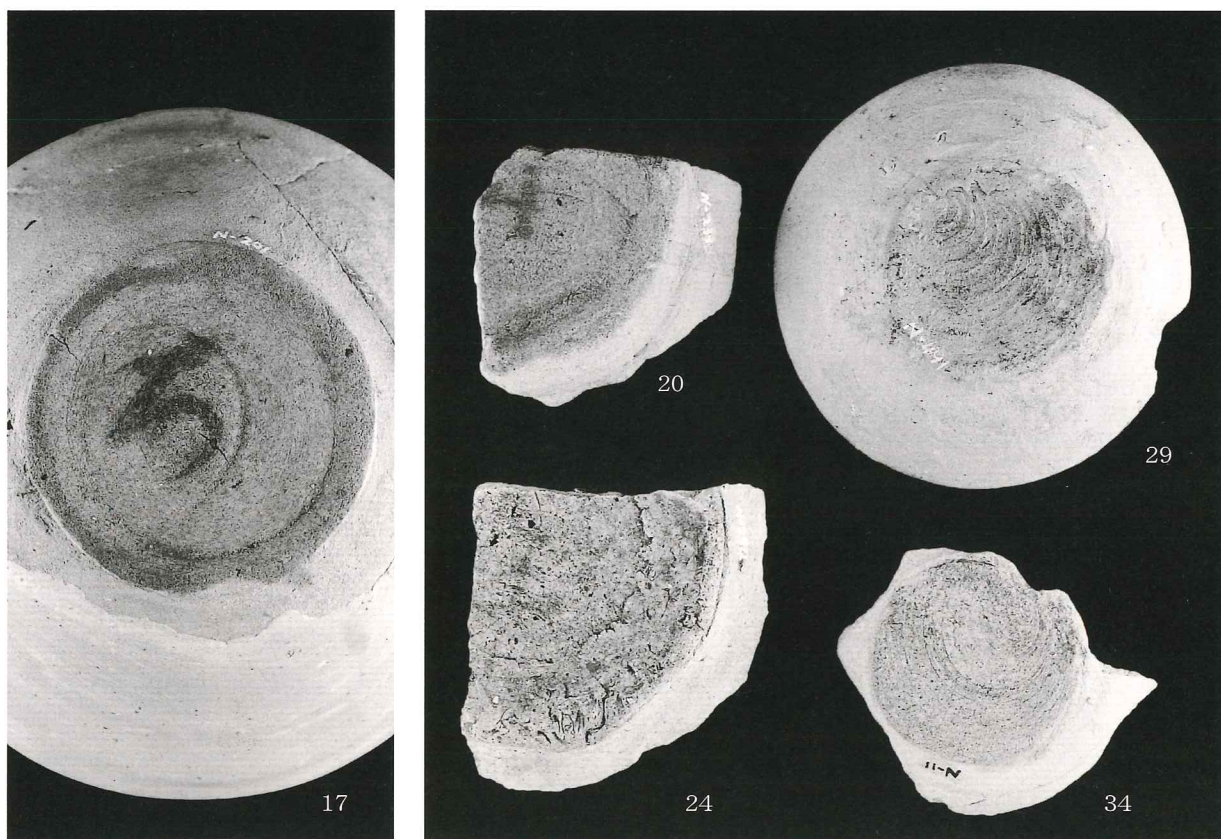
8. 土坑4



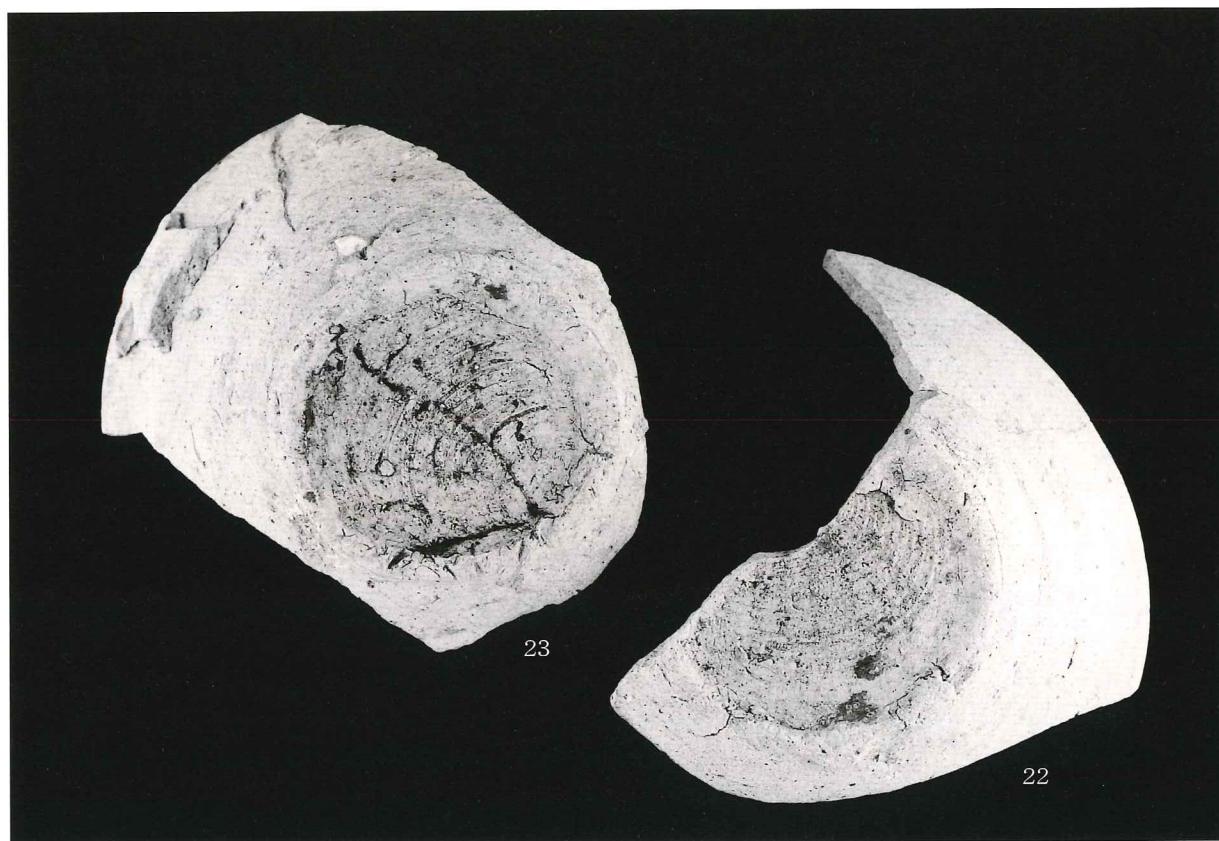
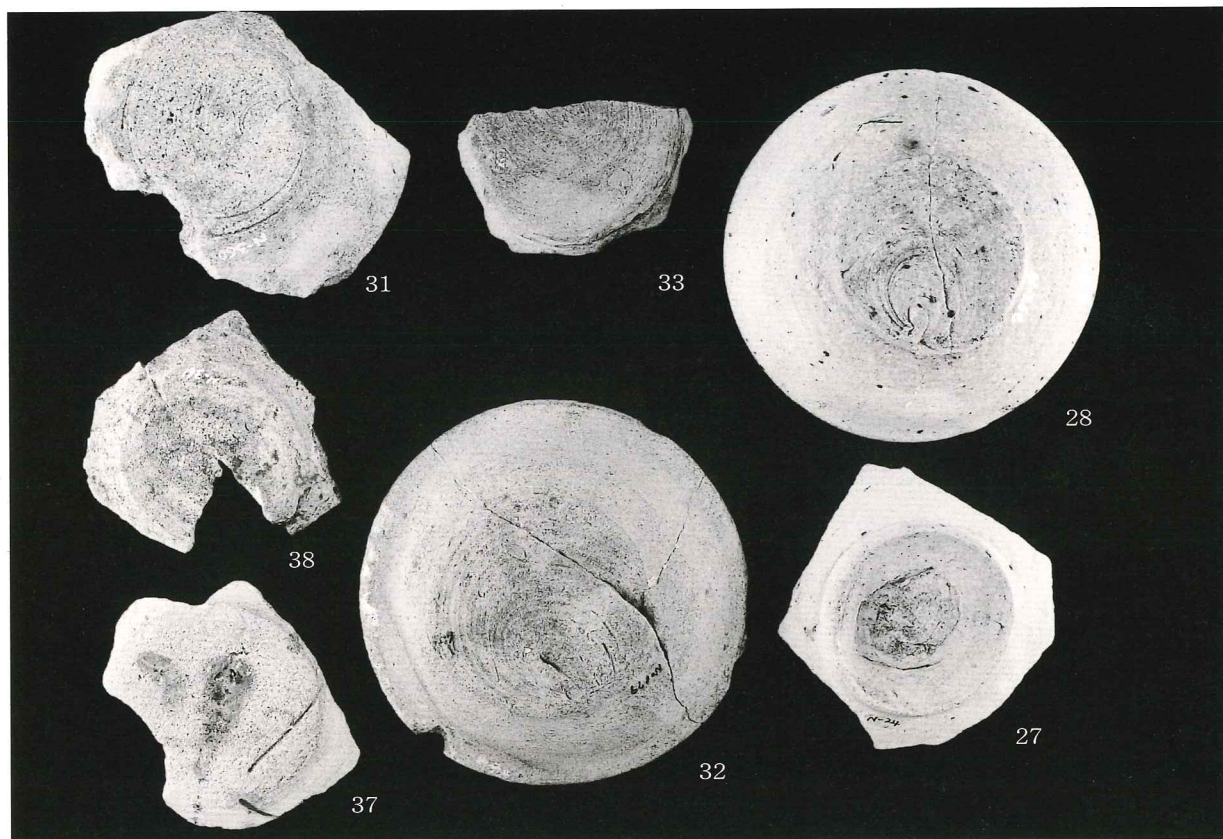
中島遺跡出土遺物 1（墨書土器）



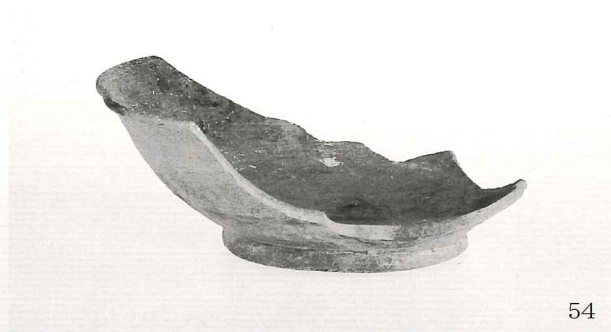
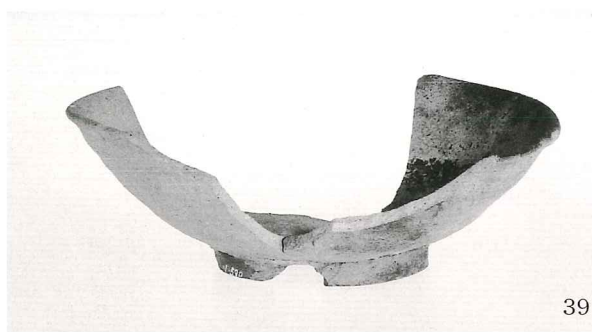
中島遺跡出土遺物 2 (墨書土器)



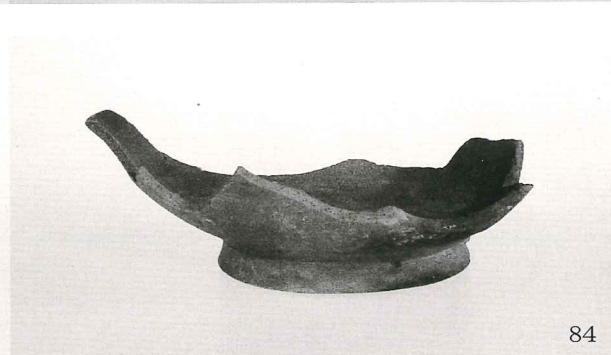
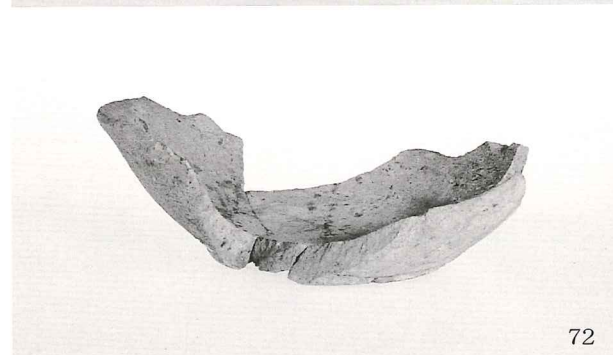
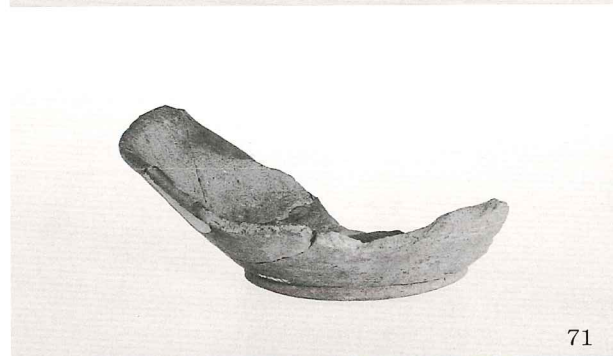
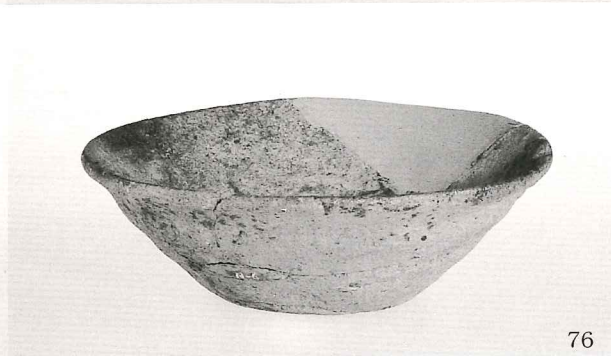
中島遺跡出土遺物 3 (墨書土器)



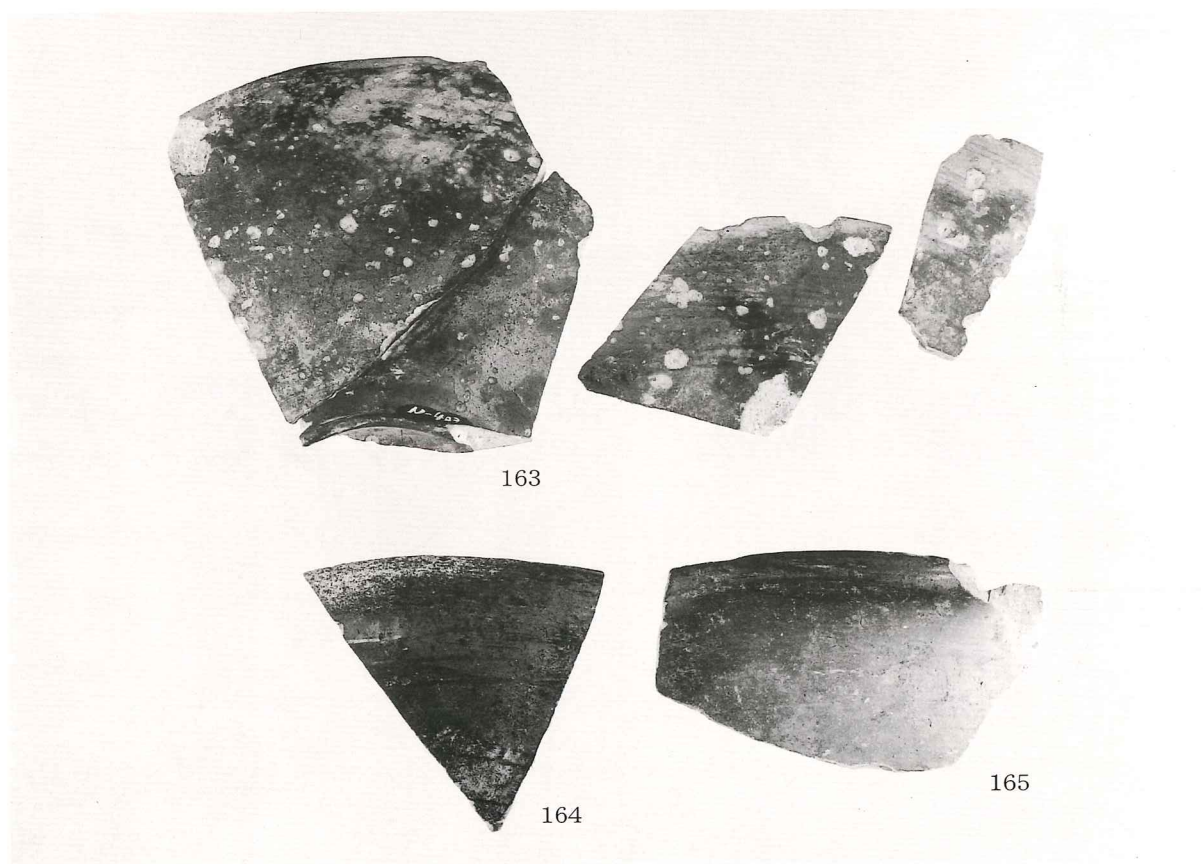
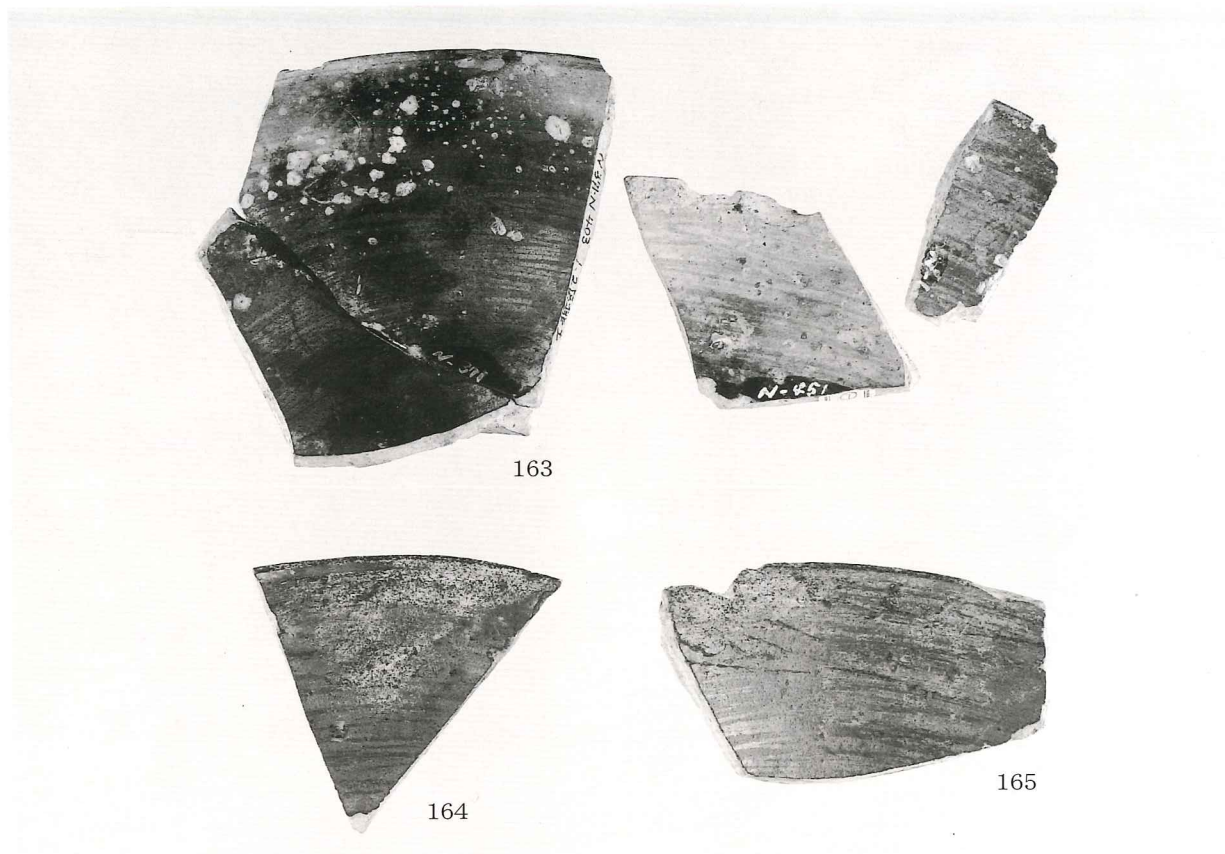
中島遺跡出土遺物 4 (墨書土器)



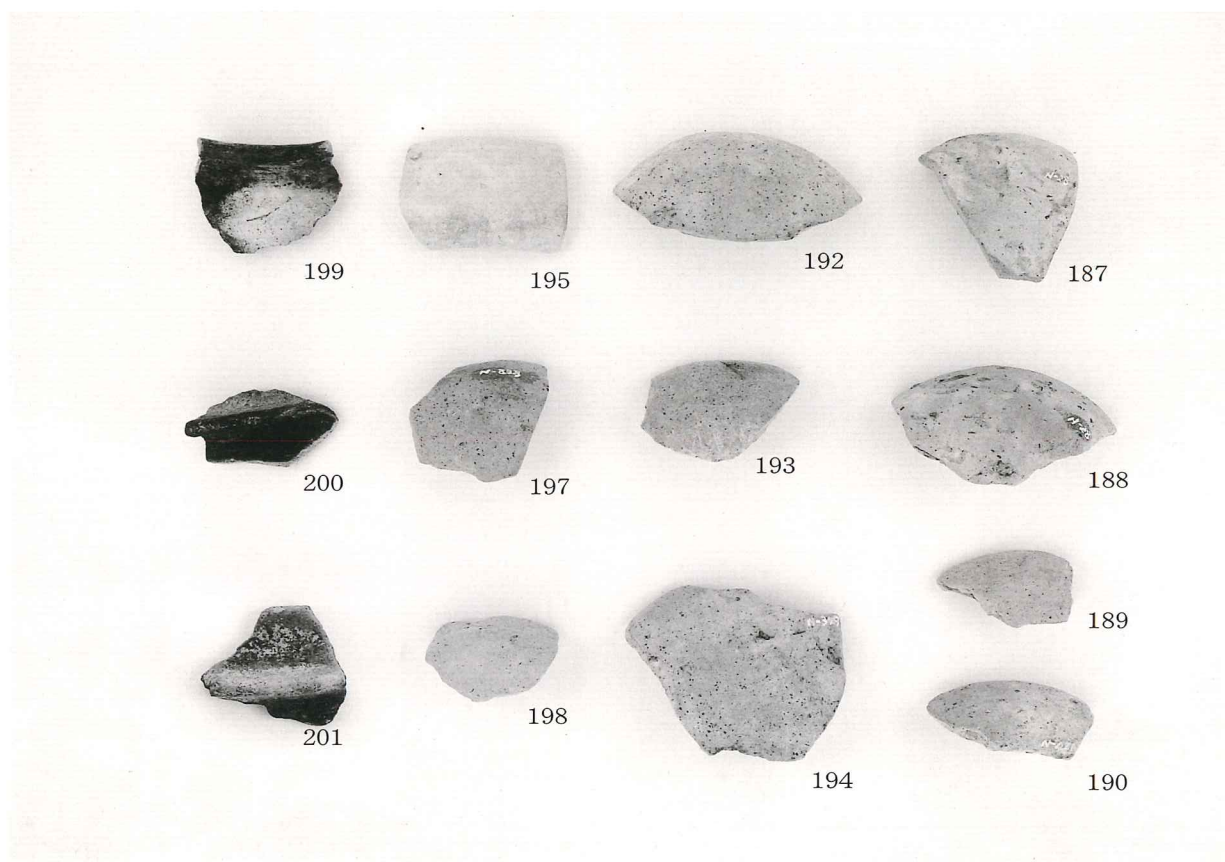
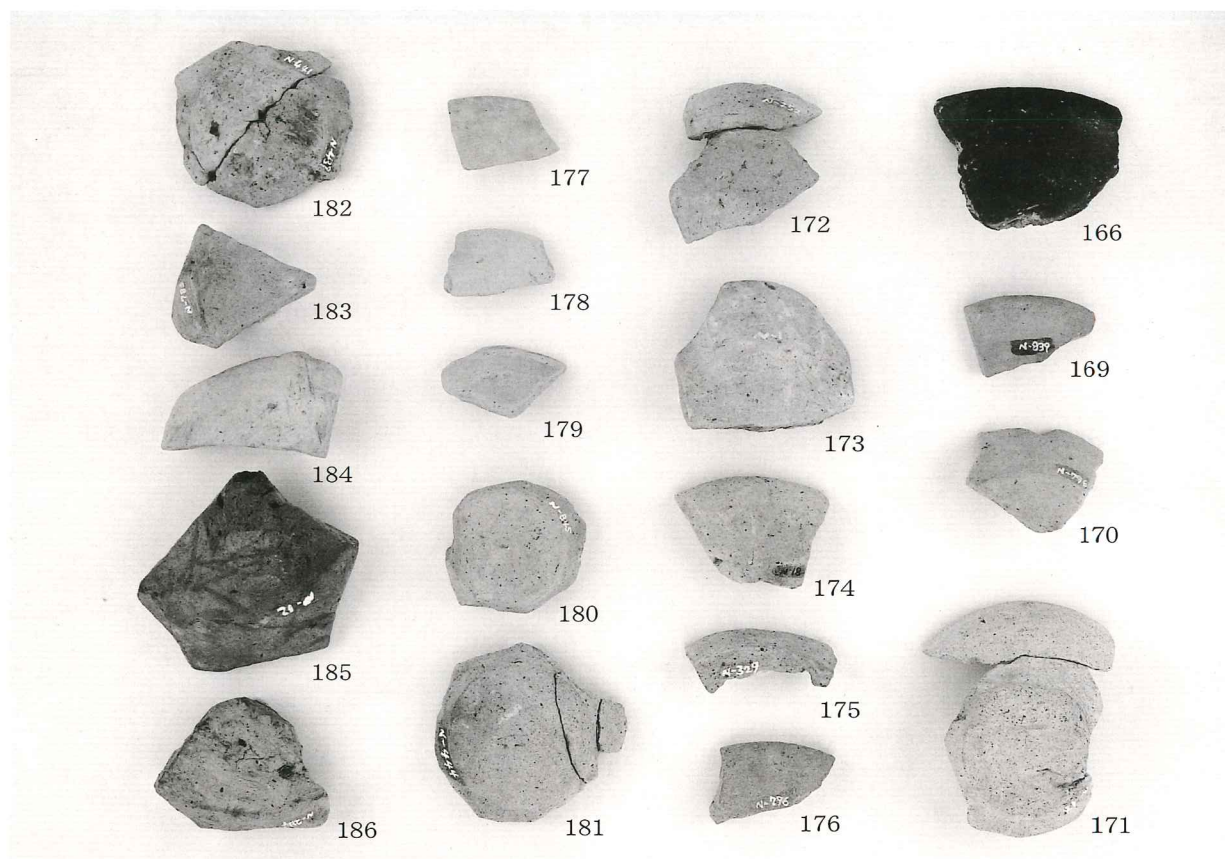
中島遺跡出土遺物 5 (山茶碗)



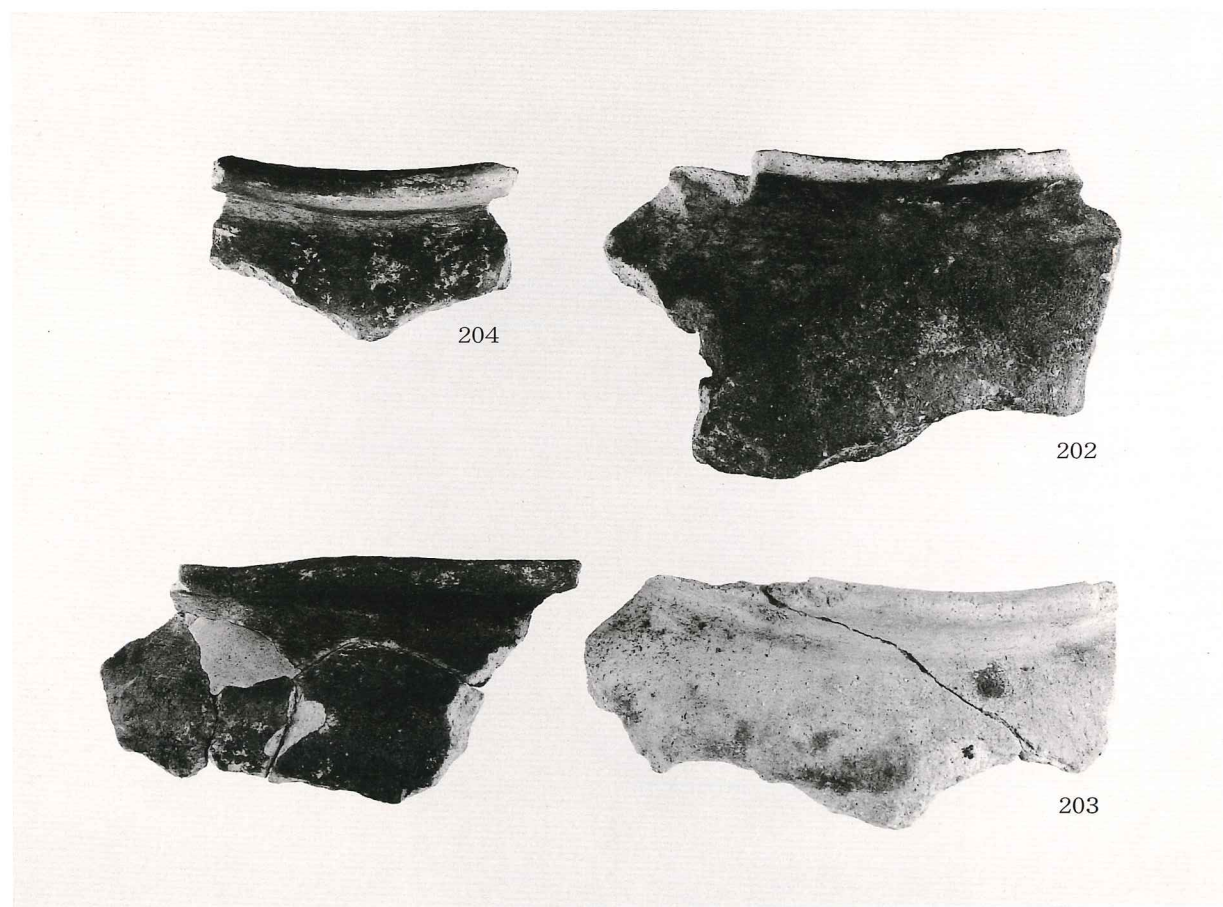
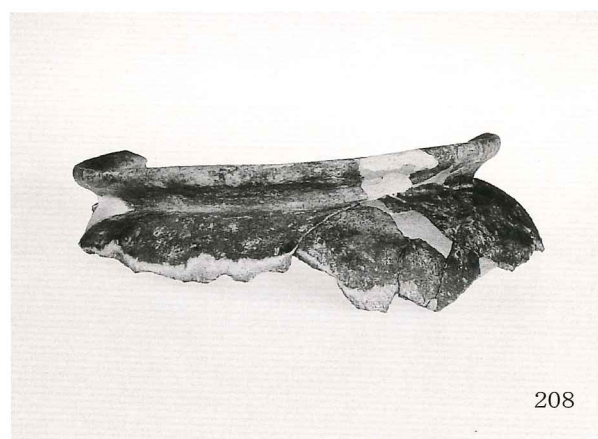
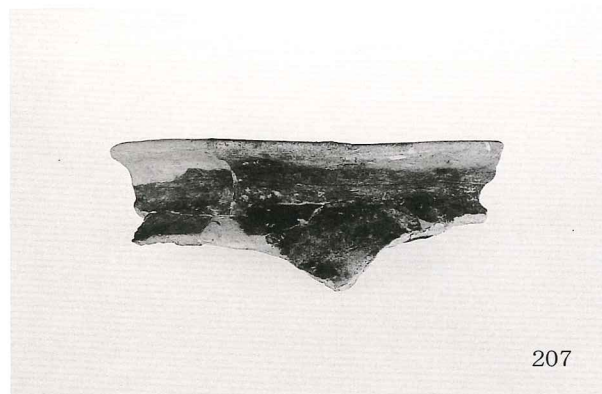
中島遺跡出土遺物 6 (山茶碗)



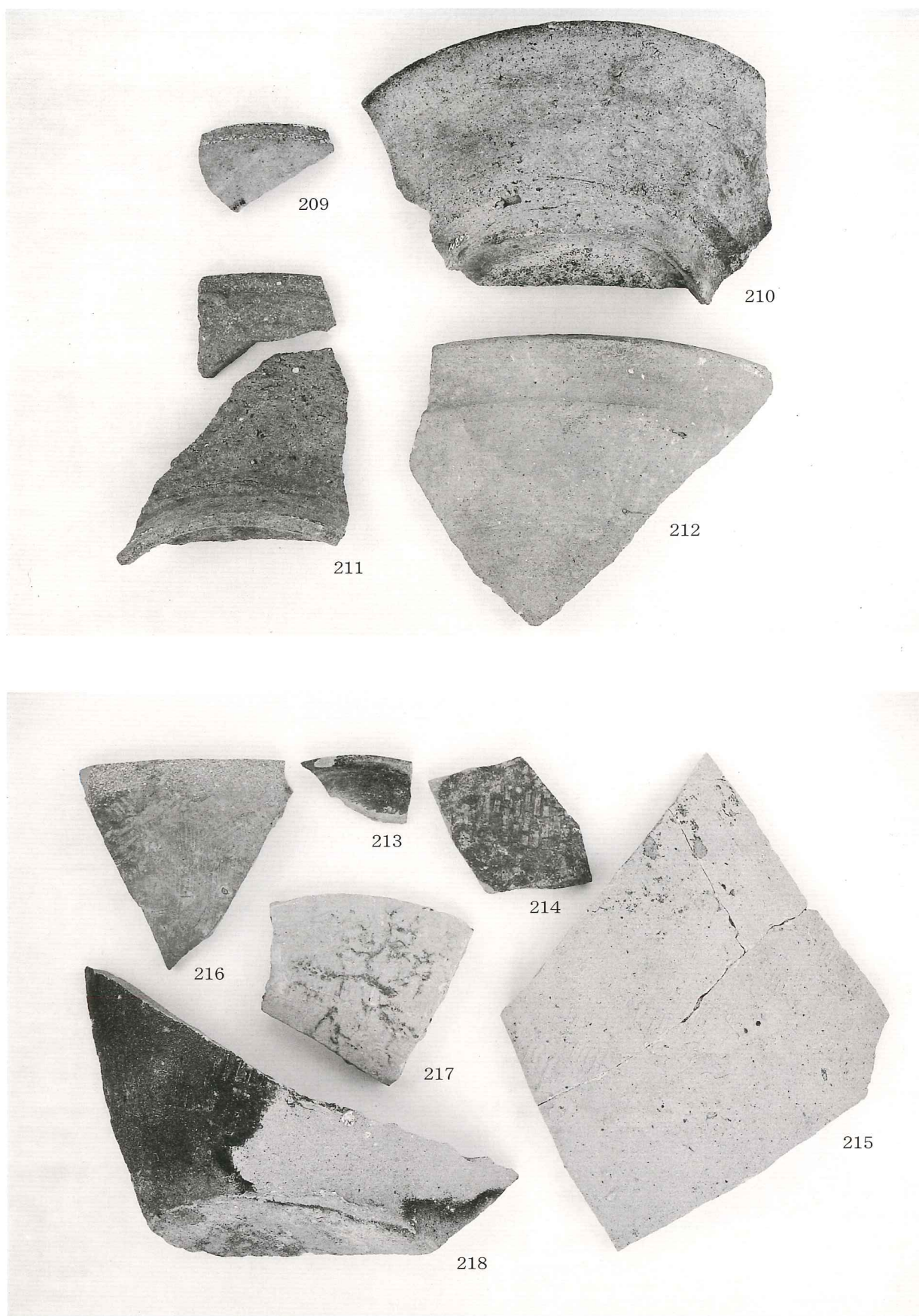
中島遺跡出土遺物 8 (瓦器碗)



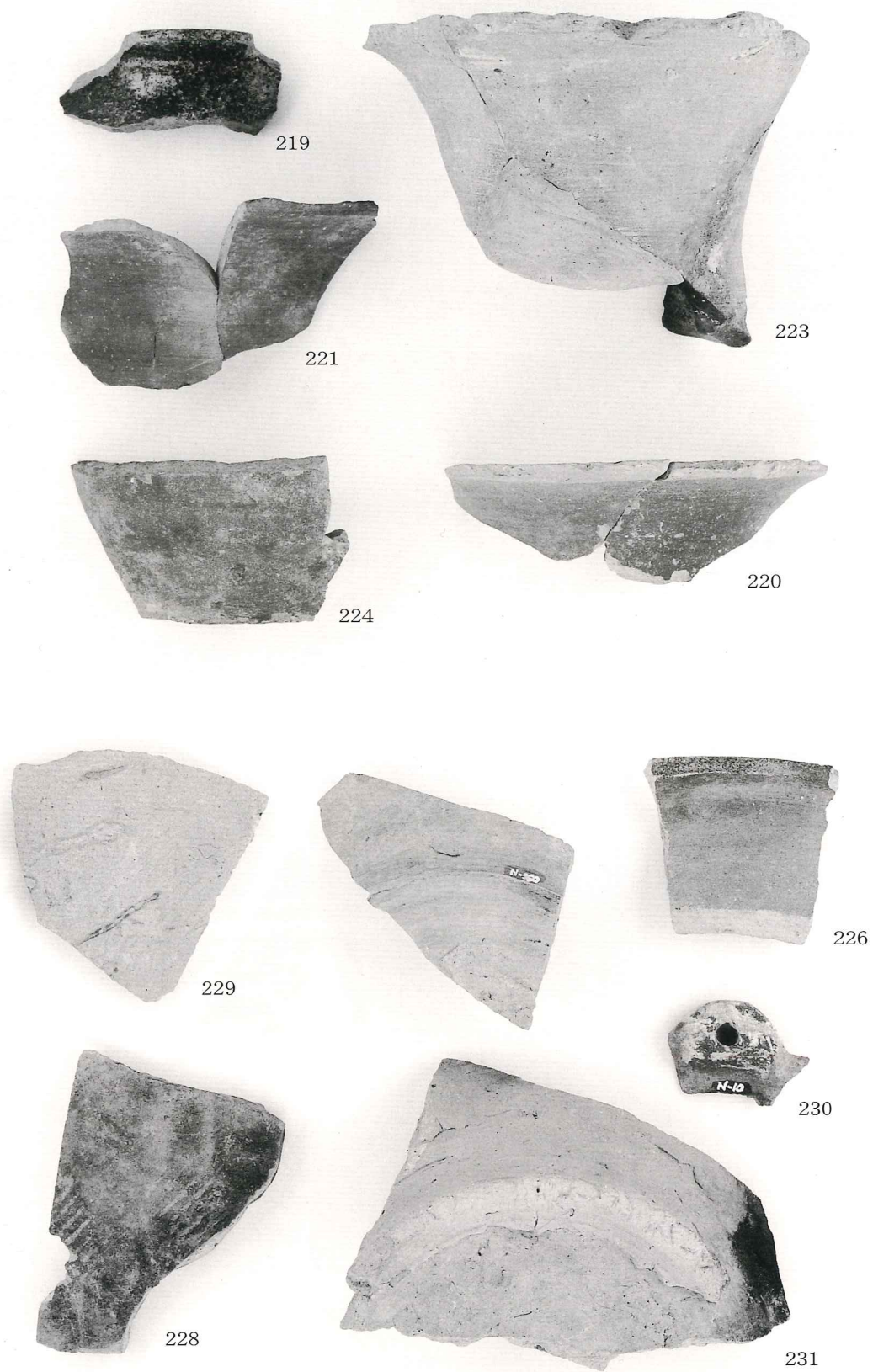
中島遺跡出土遺物 9 (土師器類)



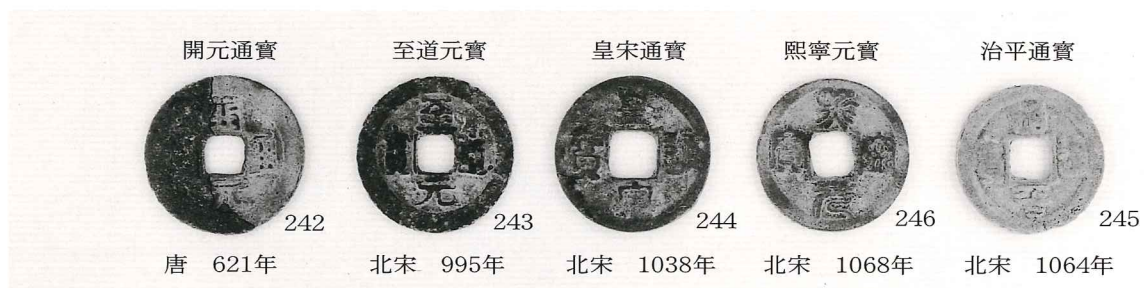
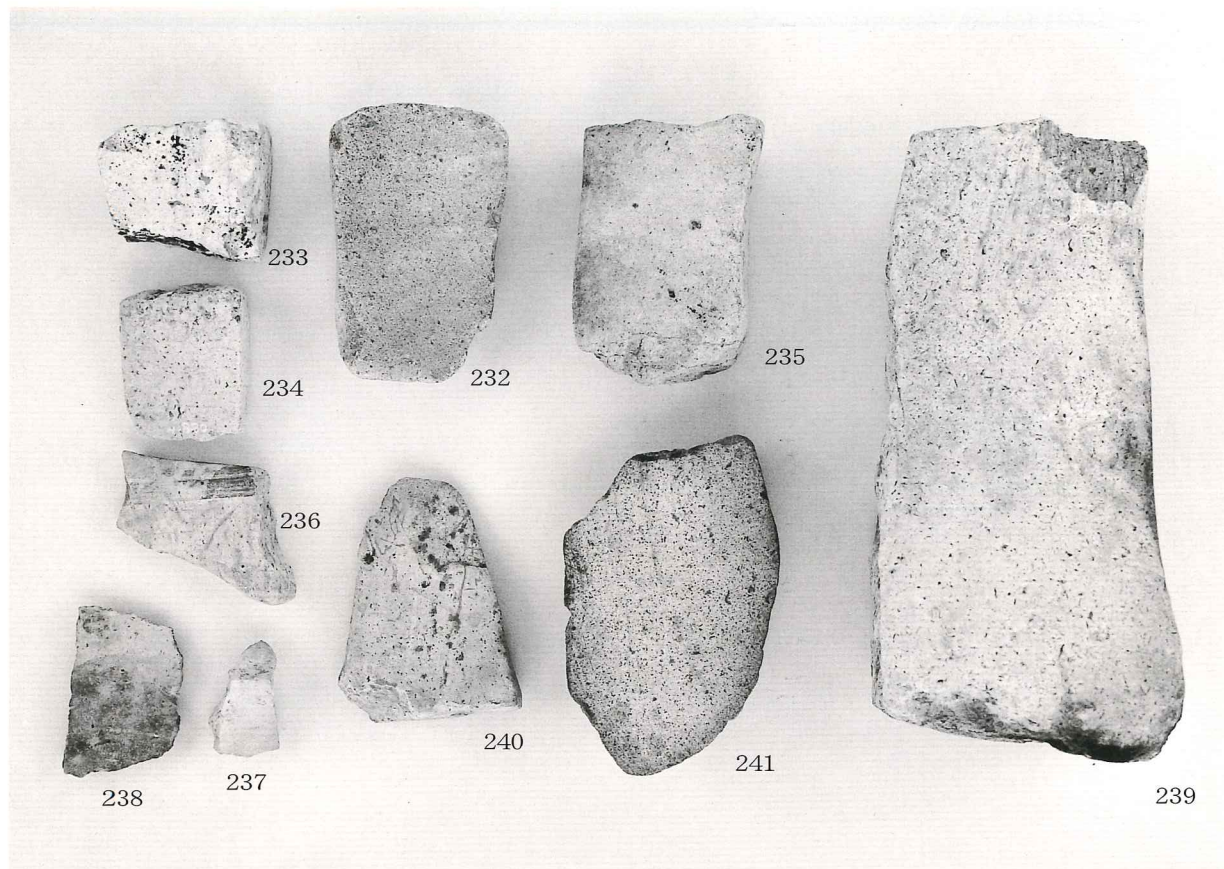
中島遺跡出土遺物10 (伊勢型鍋)



中島遺跡出土遺物11 (常滑)



中島遺跡出土遺物12 (渥美)



中島遺跡出土遺物13（砥石・古銭）

ふ り が な	なかじまいせき・あさばおおがこいづつみ							
書 名	中島遺跡・浅羽大囲堤							
編 者 名	山本義孝(編集)、木曾昌司、原廣志							
編 集 機 関	浅羽町教育委員会 磐田郡浅羽町浅名1028 tel(0538)23-2424							
発 行 機 関	浅羽町教育委員会 磐田郡浅羽町浅名1028 tel(0538)23-2424							
発 行 年 月 日	2000年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかじま いせき 中島遺跡	しずおかけん 静岡県 いわたぐん 磐田郡 あさばちょう 浅羽町	22481	50	34度	137度	1997年 10月20日 ～ 1998年 4月22日	1,500 m ²	川河改修
			51	42分 50秒	55分 30秒	1996年 8月23日 ～ 10月17日	300 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
中島遺跡	集落	12世紀中頃～ 13世紀前半		大溝 堅穴住居 掘立柱建物		中国陶磁器 瓦器埴 伊勢型鍋 墨書土器		
浅羽大囲堤	堤防	近世		堤防				

静岡県 磐田郡 浅羽町

中島遺跡・浅羽大囲堤

2000年3月15日発行

編集・発行 浅羽町教育委員会
印刷 静岡県磐田市二之宮 251
株式会社 山田印刷所
TEL(0538)35-6151
